

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007
報 告 書

2008年（平成20年）3月

認知症介護研究・研修センター（東京・大府・仙台）
住友生命保険相互会社

ごあいさつ

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーンは今年で4回目を迎えました。第1回目は平成16（2004）年の秋に行われた「国際アルツハイマー病協会第20回国際会議・京都・2004」の場において先進的な町づくり活動の報告が行われ、認知症を知り地域をつくる国民的な運動の先駆けとなりました。

その後も本キャンペーンには毎年、日本各地で認知症になっても安心して暮らせる町づくり活動を続けておられる皆様からの御報告をお寄せいただきました。そしてこれらの事例を広く全国にお届けして学びあうことに努めてまいりました。

このたびの「『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン」には各地から49に及ぶ活動報告が寄せられました。これらの活動を、堀田力委員長をはじめとする「地域活動推薦委員会」の皆様が検討してくださいました。そして各地域で町づくりの参考として推薦された8つの活動が「町づくり2007モデル」として報告されます。

いずれの活動の中にも認知症の人と地域の人々がともに尊重しあって暮らしていくための理念と実践が詰まっています。とくに今年のモデルでは、民間企業や学校も含めて多様な立場の方からその活動を報告していただくことになりました。このことは、認知症の人の尊厳を守り、その力を生かしてともに暮らしていくという現代社会の大切な課題が、単に医療・福祉関係者にかかわる事柄ではなく広く市民一人ひとりにかかわることであることを端的に示していると思います。

私たちができることから始めて日本全国のあらゆる地域が認知症になっても安心して暮らせる地域とするために、この発表会が今後の活動のための大きなステップとなることを期待しています。

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007

実行委員長 長谷川 和夫

報告書の刊行にあたって

『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン2007では、2007年6月より全国で認知症の人を地域で支える活動を展開している活動報告の募集を行い、慎重な検討の結果、2008年1月に「町づくり2007モデル」を決定しました。

そして2008年3月に「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーン報告会の場において、表彰式と「町づくり2007モデル」団体による地域活動の発表を行いました。

本キャンペーンは、厚生労働省と認知症にかかわる各団体による国民的な「認知症を知り 地域をつくる」キャンペーンの一環として行ったものです。

各活動報告の本報告書への収録にあたっては、活動している団体および個人の表現のスタイルを尊重し、原則として原稿に改変を加えることは行っていません。このため、表記に不統一の部分があります。

『認知症でもだいじょうぶ』町づくりキャンペーン2007は、厚生労働省老人保健健康増進等事業の補助金および住友生命保険相互会社のご支援をいただき運営が行われました。あらためて感謝申し上げます。

本報告書が、全国各地で認知症の人とそのご家族を支える活動を続けておられる皆様のお役に立つように願っています。

2008年3月

「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007 事務局

目 次

I. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007総括

1. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007実行委員長から経過報告(発表会より) 3
2. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007地域活動推薦委員長から総括(発表会より) 4
3. 全応募者への応援メッセージ 5

II. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007へ全国から寄せられた活動一覧

1. 全国から寄せられた地域活動 応募一覧 11
2. 各地域報告の情報データベース(町づくりキャンペーンホームページ)の紹介 13
3. 「町づくり2007モデル」一覧 14
4. 「町づくり2007モデル」
 - 活動報告(1)「認知症になっても安心して暮らせるマンション」 15
中銀インテグレーション株式会社(東京都中央区)
 - 活動報告(2)「当たり前の特権である地域行事・老人会への参加を目指して」 23
社会福祉法人 ふるさと会 グループホーム福寿の家(高知県吾川郡いの町)
 - 活動報告(3)「教科 奉仕『認知症と地域について考える』授業」 37
東京都立拝島高等学校(東京都昭島市)
 - 活動報告(4)「この町にこんな病院があったらいいな(地域にとけ込んだ認知症センターの取り組み)」 50
財団法人 豊郷病院 老人性認知症センター(オアシス)(滋賀県犬上郡豊郷町)
 - 活動報告(5)「おじいさん、おばあさん、いっしょにキャンプしませんか！」
認知症高齢者と楽しむ『あしがらシニアキャンプ』 64
あしがらシニアキャンプ実行委員会(神奈川県南足柄市・足柄上郡5町)／
社団法人 日本キャンプ協会(東京都渋谷区)
 - 活動報告(6)「認知症の人と家族のつどいと支援者養成研修」 78
社団法人 認知症の人と家族の会富山県支部(富山県富山市)
 - 活動報告(7)「若年性認知症デイサービス“おりづる工務店”の取り組み」 86
社会福祉法人 町田市福祉サービス協会 おりづる苑せりがや(東京都町田市)
 - 活動報告(8)「地域の認知症の拠点としてのグループホームの活動」 98
NPO法人 ほのぼの朝日ネットワーク(岐阜県高山市)
5. 各地域活動概要 110

III. 資料編

1. 実施要領 153
 2. 推薦基準 157
 3. 発表会について 158
- 附:活動経過 161

Ⅱ. 「認知症でもだいじょうぶ」町づくりキャンペーン2007へ

全国から寄せられた活動一覧

活動報告(6)

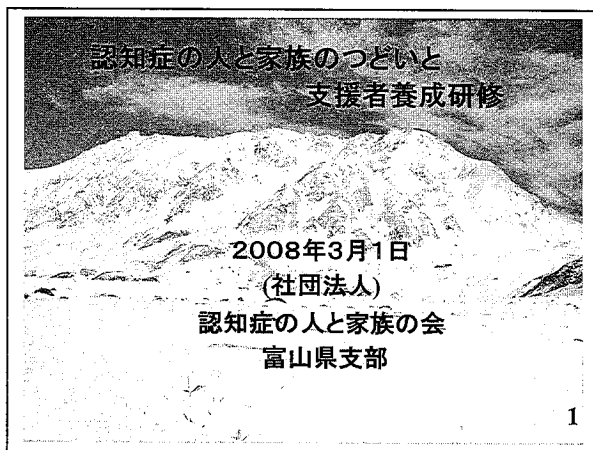
活動名称	認知症の人と家族のつどいと支援者養成研修
活動要旨	認知症の本人を中心とした「つどい」は、昨年より、寒さの厳しい1月を除いて毎月開催。家族の会会員への支部報や県の高齢福祉課を通して案内。余暇活動のほか、専門職も対象にした支援者の養成講義や本人同士の話し合いを実施
応募者	社団法人 認知症の人と家族の会 富山県支部
連絡先	〒930-0093 富山県富山市内幸町 3-23 菅谷ビル 4階

1) 推薦理由

- ・ 各地に家族会が多いが、認知症の本人と家族と一緒に「つどい」ことは、まだまだ取り組まれていない。介護者の息抜きや学びのための活動であると同時に、本人たちのつどい、本人自身の活動の芽吹きを感じる活動である。
- ・ 専門職も含めたサポーター養成も共に行っている。家族や本人の力を最大限引き出す中で、専門職も多くのことを学んでいる。特に専門職から「こんなにゆっくり認知症の方にむきあったのははじめて」との声もあがり、実際の認知症ケアの変化につながっている。
- ・ 大きな仕掛けを必要とせず、定期的で丁寧な活動の継続、居場所を設け、そこから絆が生まれ、さまざまな活動に発展していく活動は他の地域でも展開できるものである。

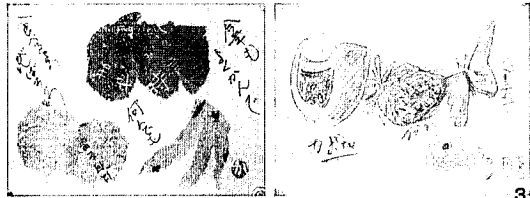
2) 3月1日キャンペーン発表会 発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。



認知症の本人と家族のつどい

高齢者も若年も本人家族も一緒に



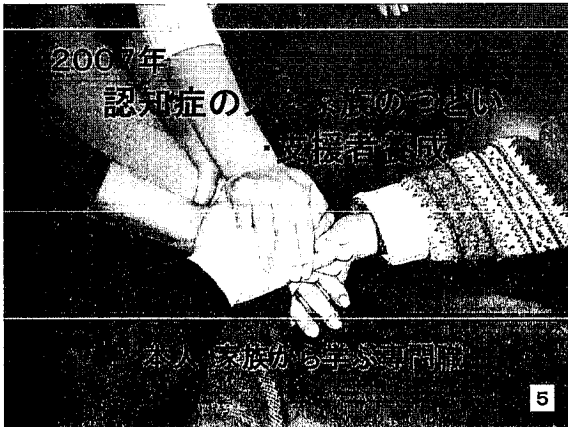
3

家族支援プログラムへの 取り組み

県との協働事業として

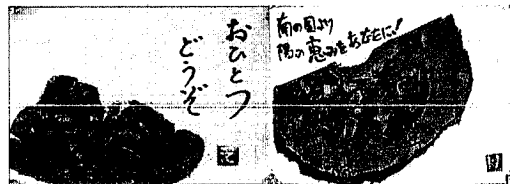


4



5

ひとりひとりが輝き 家族が
気楽に話せる場(環境)作り



6

2007年

「てるてるぼうずの会」11月発足
若年認知症の本人と家族が
企画運営を
サポーターの協力のもと行う。



2007年12月16日 手づくりクリスマスパーティー「ふきのとう」にて

7

<<これからの取り組み>>



3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概要

認知症の人と家族の会富山県支部では、昨年より認知症の人ご本人を中心にした「つどい」を始めている。日本各地でこのような活動が始まっているが、これから始める方のご参考になればと思い、私たちの経験をご紹介したい。

数年前より、毎晩行っている「電話相談」に若年の介護家族から相談が相次いでくるようになった。その介護家族に「つどい」にお誘いしたところ、「本人を置いては行けない。一緒に参加していいだろうか」との声があり、「どうぞ、どうぞ」ということで高齢者も若年の家族もそして認知症の本人も参加するつどいが始まった。つどいは昨年からは始まり、本年は2年目となる。寒さの厳しい1月を除いて残りの月は毎月開催されている。家族の会会員への支部報などを通した案内や県の高齢福祉課からの案内で呼びかけている。

毎回の参加者は家族と支援者も合わせて40人～50人で、認知症の本人は、若年性の人と高齢の人を合わせて12～13人が参加している。ボランティアで参加している支援員は、専門職の方と支部の世話人である。

午前中はゲームや歌、絵てがみなど室内で行う活動で、午後はグループに分かれて卓球や散歩などからだを動かす活動である。同時に支援者養成のための講義が行われたり、本人同士の話し合いも行われる。そして本人を中心にして質問をして生活や気持ちの話しを聞くことも積極的に行っている。また、このつどいを通して本人や家族の交流も盛んになっている。たとえば、親しくなった家族同士で集まって話をしたり、山に登ったり、また今年からはじめたこととして5月と8月には1泊旅行の「お楽しみ交流」に5家族程度が参加している。

こうして、以下のような成果を得ている。

- ・若年の本人たちが集まり、家族同士も日常的に連絡をとりあうなど、本人のネットワークが広がっている。
- ・本人の一人ひとりの力を最大限に引き出している。
- ・専門職である若い支援者から、このつどいに参加して改めて「認知症の人の心を知った」「こんなにゆっくり 認知症の人にむかったことははじめて」との声が上がっている。

また、今後は以下の課題もだんだん明らかとなっている。

- ・物忘れがあっても「仕事」を続けたいと願っている若年の方々と本人をひとりにはしておけないと悩む家族、そんな願いをかなえる「デイ」が作れないだろうか。
- ・若年の場合、経済的な問題が大きいのしかかってくる。特に本人が男性の場合深刻である。障害者年金には病名が決まって1年半かかる。病気があっても支えがあれば仕事ができる。社会的にも貢献したいという願いをかなえるために、社会的なシステムがつくれないだろうか。

2. 地域の紹介

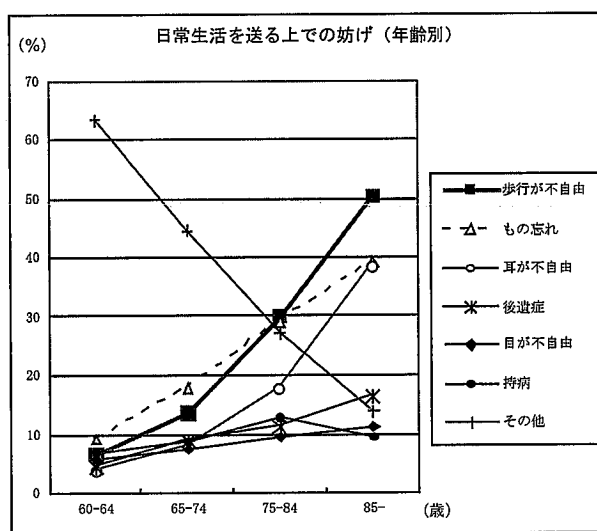
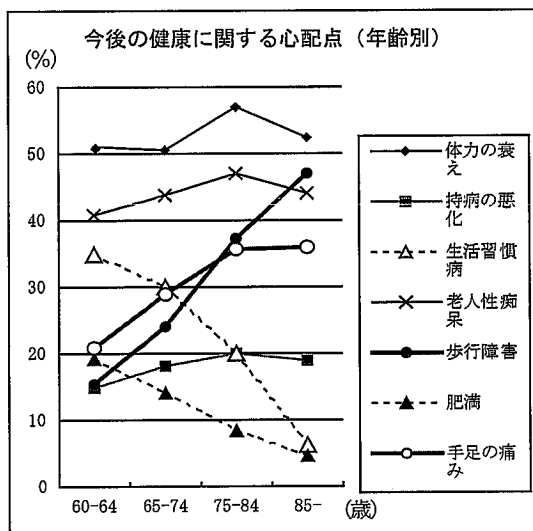
(「富山県高齢者保健福祉計画(平成18年度～平成20年度 平成18年3月)」より)

- ・総人口 1,115,393人
 - ・65歳以上人口 256,587人(23.0%)
 - ・75歳以上人口 125,111人(11.2%)
- (以上、平成17年)

・要介護(要支援)認定者数

- 65歳以上認定者数 40,393人(15.9%)
- 40～64歳認定者 1,218人

富山県「高齢者生活意識調査(平成17年)」より



3. 活動の内容と成果

1) 活動の実際

「認知症の人と家族のつどい」は昨年からはじめ、本年は2年目となる。寒さの厳しい1月を除いて残りの月は毎月開催されている。

つどいはまず、集まりを告知するところから始まる。その方法は1つは家族の会会員への支部報などを通じた案内で、もうひとつは県の高齢福祉課から各市町村や介護支援専門員あるいは介護福祉士などに連絡をする際に集いの案内も入れてもらっている。つどいは若年性認知症の人の気持ちに沿うことを進める「本人ネットワーク支援者養成」もかねているので専門職の方への参加を募る意味でこのような県の協力はたいへんありがたいことである。

毎回の参加者は家族と支援者も合わせて40人～50人で、主に富山県民共生センター「サンフォルテ」の部屋を借りて集まっている。認知症の人本人は、若年性の人と高齢の人を合わせて12～13人が参加して下さっている。ボランティアで参加している支援員は、主に若年の方への対応をあらためて学びたいという専門職の方で、それに看取りを終わった支部の世話人が加わっているという人たちである。支援員は毎回同じメンバーだが、本人とご家族は入れ替わることもある。

午前中はゲームや歌、絵てがみなど室内で行う活動で、午後はグループに分かれて卓球や散歩などからだを動かす活動である。一般的なデイと違うところは、同時に支援者養成のための講義が行われたり、本人同士の話し合いも行われることである。そして本人を中心に質問をして生活や気持ちの話しを聞くことも積極的に行っている。また、このつどいを通して本人や家族の交流も盛んになっている。たとえば、親しくなった家族同士で集まって話をしたり、山に登ったり、また今年からはじめたこととして5月と8月には1泊旅行の「お楽しみ交流」に5家族程度が参加されている。つまり、私たちは介護を提供するというよりも文字通り本人がネットワークを広げていくためのお手伝いをしているのである。

つどいが終わった後、1時間程度支援者が会場に残ってその日の振り返りを行っている。

2) 活動の中から

(1) 富山県支部4半世紀の歩み

呆け老人を抱える家族の会（現・認知症の人と家族の会）が京都に誕生して3年後、富山県支部が産声をあげた。地方新聞の片隅に「痴呆性老人の会が結成された」という記事が掲載された。当初は認知症の人をかかえる高齢者の家族が集まった。小さなつどいは毎月開催されたが、認知症の人本人が参加されることはあっても介護家族が話し合っている間に「預かる」程度であった。

数年前より、毎晩行っている「電話相談」に若年の介護家族から相談が相次いでくるようになった。その介護家族に「つどい」にお誘いしたところ、「本人を置いては行けない。一緒に参加していいだろうか」「どうぞ、どうぞ」ということで高齢者も若年の家族もそして認知症の本人も参加するつどいはじまった。でも、若年の本人はただ預かるというわけにはいかなかった。

(2) 若年の本人たちが集まる

若年の本人Aさんは57歳、現役のサラリーマン「なんとか定年まで勤めたい」という願いをもっている。55歳の大工の棟梁のBさんはお抹茶のお師匠さん。笑顔がすてきだ。仕事で全国をまわったというCさんは 右半分しか見えないという症状あり・・・この3人がとても仲がいい。家族同士も日常的に連絡をとりあっている。3家族一緒に近くの銭湯に出掛けた。大きなお風呂に入

りたいというCさんの願いはかなえられた。

(3) 本人 一人ひとり の力を最大限に引き出す

高齢者も若年もその介護家族も集まった。毎回の運営は介護家族のつどいは「高齢者」と「若年」や「配偶者」「娘・息子」「嫁さん」の立場別のつどいを開催、若年の本人を中心に「卓球」「キャッチボール」など体を思いっきり動かすこともはじめた。高齢者向きには「散歩」「お話」「歌」「ゲーム」など一人ひとりができること、やりたいことをききながら 行っている。なかでも「絵てがみ」は好評である。絵にむかっているときは集中するDさんは、それ以外はいつも奥さんのまわりをぐるぐるまわっている。

(4) Eさんの音頭にあわせて 全員が輪になって「おわら」を踊りだす

Eさんは建具屋さん。今は息子が引き継いでいる「景気がいいと仕事もたくさんあるが、これからは・・・」と顔を曇らせる。会員がつくってきたビー玉のゲームに夢中、EさんルールはEさんが考案したもの、普通はまっすぐしか進めないルールだがEさんのみはななめに進める。常勝してご機嫌のEさんは、ツヤツヤした顔をほころばせる。

つどいの最後を飾るのは、このEさんが音頭をとる「越中おわら」は富山県人のほとんどは踊れる民謡である。Eさんの声が響く中で汗をかきながら踊って、その輪のままつどいは終了する。「じゃまたね」と声をかけあう。

(5) Bさんのお抹茶で一服

「おはよう」「おはよう。元気だった」と手を握ったり肩をたたいたり、つどいの日はみんな笑顔で集まってくる。「どうぞ、どうぞ」座ったらお抹茶と手作りのおはぎが振る舞われた。Bさんのお抹茶はとてもおいしい「空気をいれるように」という指導で若いサポーターが習いながら手伝う。Bさんの笑顔が最高のよい笑顔になる。おいしいお抹茶を飲んでからつどいがはじまる。

(6) 認知症の人の心に沿うサポーター養成

毎回のつどいの参加人数が増えるに従い、世話人だけでは手に負えなくなった。「認知症の人により沿うサポーター養成研修」を呼びかけたところ今年は30名が集まった。福祉のプロの人が多い。でも、このつどいに参加して改めて「認知症の人の心を知った」「こんなにゆっくり認知症の人にむかったことははじめて」という人たち、つどい終了後の「振り返り」の中で多くのことに気づかされるという。素人の世話人も多くのことを学ぶ機会にもなっている。

(7) 認知症があっても 「働き続けたい！」

物忘れがあっても「仕事」を続けたいと願っている若年の方々、本人をひとりにはしておけないと悩む家族、そんな願いをかなえる「デイ」が作れないだろうか。世話人のFさんは認知症の人も家族も一緒にすごせる「デイ」がつかれないか模索中。できれば本人が仕事をする事ができるデイができないかなど検討中である。

(8) 本人も家族も笑顔ですごせるように

若年の場合、経済的な問題が大きいのしかかってくる。特に本人が男性の場合深刻である。障害

者年金には病名が決まって1年半かかる。Aさんの奥さんはパート勤務から正社員へチャレンジした。Bさんの奥さんは2級ヘルパーの受講中、認知症と向き合っていこうと話合っている。Aさんはアルツハイマーと宣告されてから3年、10月20日に無事定年を迎えることができた。

「これから就職先を探したい」というAさん。病気があっても支えがあれば仕事ができる。社会的にも貢献したいというAさんの願いをかなえるために、社会的なシステムがつかれないだろうか、模索中である。

3) 「認知症の人と家族のつどい」2007年度の計画（一部）

*活動は寒さが厳しい1月を除いて毎月行われている。下記は最近の例として掲げる。専門職や家族の方を対象とした講義も随時行われている。このほかに、

- ・ 5月27日 午前10時～午後3時
第1部 お話と実技「口腔ケアを始めましょう」
第2部 ご本人と家族のつどい

- ・ (5月、お楽しみ交流。1泊旅行)

- ・ 7月28日 午後1時～午後3時
- ・ 7月29日 午前10時～午後3時
本人ネットワーク支援研修、「本人会議」「介護家族の集い」

- ・ 8月18日 午前10時～午後3時
センター方式にチャレンジ
講義：本人の思いを聞く、「本人会議」「介護家族の集い」

- ・ (8月、お楽しみ交流。1泊旅行)

- ・ 9月2日 午前10時～午後3時
講義、「本人会議」「介護家族の集い」

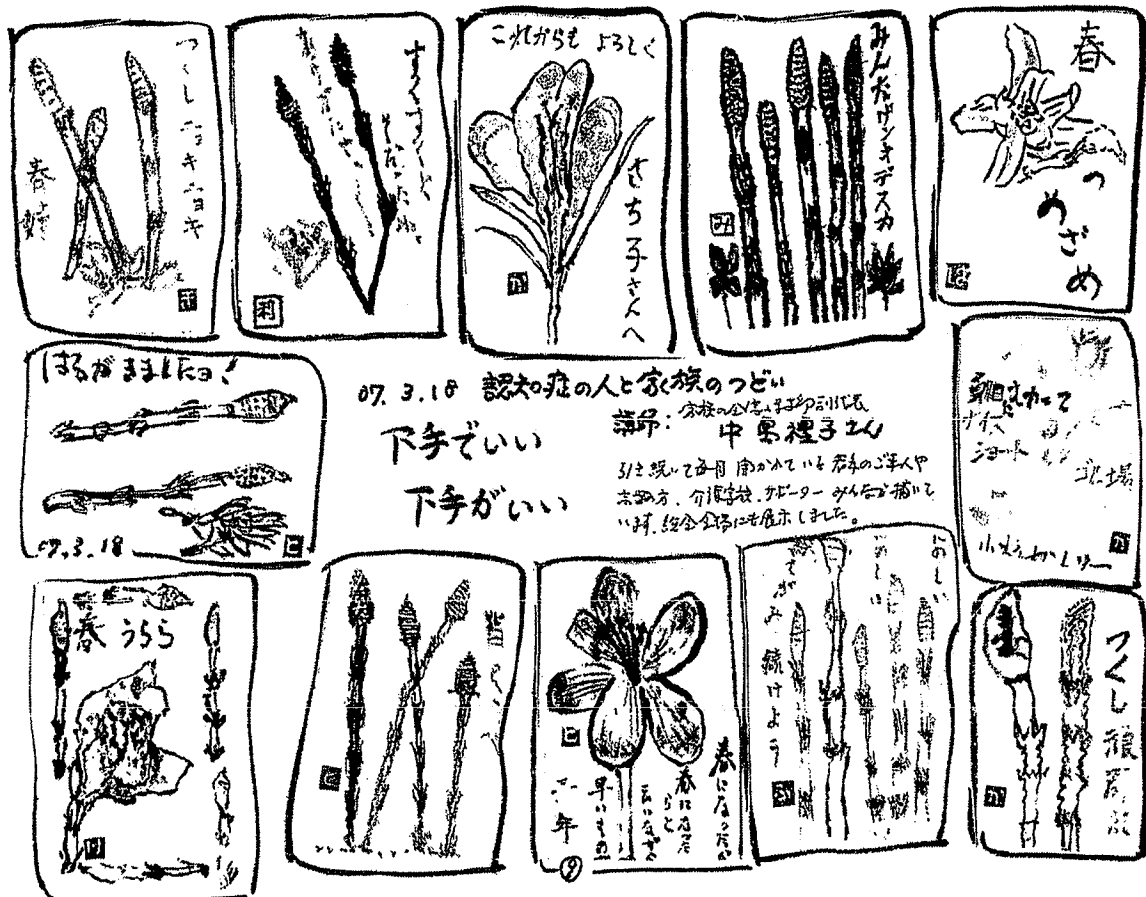
- ・ 9月30日 午前9時半～午後4時
シンポジウム「介護家族を支える認知症ケアの現場から」、
講義：「認知症の人を地域で支える」、講義：「若年性認知症・最新情報」

- ・ 10月14日 午前10時～午後3時
「本人会議」「介護家族の集い」

- ・ 11月11日 午前10時～午後3時
「本人会議」「介護家族の集い」

・12月2日 午前10時～午後3時

クリスマス料理にチャレンジ、「本人会議」「介護家族の集い」



活動報告(7)

活動名称	若年性認知症デイサービス “おりづる工務店” の取り組み
活動要旨	まだまだ働きたいという若年性認知症の方の声をうけ、『会社のような組織をつくり、社会とつながる実感と仕事を成し遂げた充実感をもてる場所』として始まったデイサービス。保育園や市役所から“工務店の仕事”を受注。介護保険サービスの一環のため無償ボランティアだが、就労支援につながることを目指し、実績を積み重ねている
応募者	社会福祉法人 町田市福祉サービス協会 おりづる苑せりがや
連絡先	〒194-0013 東京都町田市原町田 4-26-6 せりがや会館内

1) 推薦理由

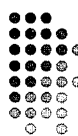
- ・ 若年の認知症の方々への支援として、ただ客体とするのではなく、できることを通してその存在を自他ともに確認できる活動である。同時に、この仕事ぶりを大切なこととして認め合う社会や人々をつくる取り組みでもある。社会の人々が彼らにペースをあわせることでこの取り組みは大変素晴らしい。
- ・ 認知症の方々が社会経験を活かして社会に貢献したいという思いを大切に、「仕事」という取り組みにつなげている活動は他に見られない特徴と今後の可能性が感じられる。
- ・ 「働きたい」「人の役に立ちたい」という若年性認知症の人の願いは強く、そのためにも全国的にも広がり期待される活動モデルである。今後はさらに、収入も保障された就労にもつながることを期待したい。

2) 3月1日キャンペーン発表会 発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。



**若年性認知症デイサービス
“おりづる工務店”の取り組み**

社会福祉法人 町田市福祉サービス協会
おりづる苑せりがや 前田 隆行



若年性認知症ご本人の思い・・・

- 「まだまだ働きたい」
- 「人の役に立ちたい」
- 「体を動かしたい」
- 「社会経験を活かしたい」
- 「できる事からやってみたい」

若年性認知症デイサービス

男性の場合・・・
 〈出勤〉→〈仕事〉→〈帰宅〉
 何十年と繰り返してきた、当たり前の日常

そこには、

- ・仕事を成し遂げる充実感
- ・社会とのつながり
- ・人の役に立っているという気持ち

おりづる工務店とは？

- ・若年性認知症の男性グループ
- ・市立保育園から“仕事”を受注
- ・ボランティアとして活動
- ・自然と身体を動かす内容
- ・食事は現場付近の定食屋
- ・お茶は園児と一緒に



“会社”の雰囲気作り

- ・タイムカード
- ・打ち合わせ
- ・揃いの作業着
- ・肩書き付きの名刺
- ・リアルな仕事内容
- ・仕事は現場に向く



仕事内容



- ・プール掃除
- ・壁のペンキ塗り
- ・園庭掃除
- ・落書き消し
- ・ワックス掛け
- ・砂場掘り起こし
- ・剪定

・・・等々

～ある一日の仕事～

- 10:00 事務所到着
作業着に着替え
タイムカード
今日の仕事流れ(ミーティング)
食庫で道具準備&車両積込
- 10:30 出発
保育園到着
・プール非常階段ペンキ塗り
・床の古ワックス落とし
・砂場の掘り起こし
- 12:30 昼食(現場保育園付近の放食店)
昼食後は保育園へ戻る
休憩(コーヒータイム)
- 13:40 午前の続き
・プール非常階段ペンキ塗り
・園庭掃除
- 15:10 現場片付け
- 15:20 園児と一緒にお茶
- 15:45 事務所到着
地下倉庫に道具片付け
タイムカード
着替え
- 16:05 終了、帰宅



成果と課題

〈成果〉

- ・社会とのつながりを保っている
- ・一般のデイサービスでは見れない表情、行動(積極性等)が見られた
- ・同年代、同性ならではの会話が弾む
- ・“勤務”を楽しみにされている
- ・生き生きと働く場面がある
- ・若年性認知症の方の想いを表現
「人の役に立っている」
「仕事を成し遂げる充実感」
「身体を目一杯動かせる」・・・等々
- ・発語が多くなった
- ・回覧板で活動の様子が紹介される
- ・夜よく眠れる

〈課題〉

- ・病状の進行と仕事内容のギャップ
- ・利用者数の確保
- ・就労支援となるため、報酬の確保
- ・女性利用者の過ごし方

おりづるパン工房

・採算性

3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概要

おりづる苑せりがやは、東京都町田市の駅からほど近い市街地にある認知症デイサービスセンター。デイサービスの参加者は、駅前商店街へ歩いて買い物に行く日もあります。そのおりづる苑せりがやの母体は、社会福祉法人町田市福祉サービス協会です。元々、認知症の分野に特化して力を注いできました。

そんな中で、人数は少ないものの何名かの若年性認知症の方がデイサービスを利用し始めました。しかし周りの方と比べると断然若く、ご本人も「ここは自分の来る所ではない」と思われていました。それもその筈で、周りの高齢者は皆80歳～90歳とご自分の両親と変わらない、もしくはそれよりも上の方たちばかりなのです。おりづる苑せりがやは、高齢者にとってはかなり活動的なのですが、それでもやはり高齢者向けの時間が流れるデイサービスに変わりはありません。そこで、彼らに対して何ができるのか考察していたところ、一人の若年性認知症の方が訪れてきました。その方も「自分のいる所ではない」と例外なく思われていましたが、法人が賃借している民家の修繕を男性スタッフと二人でするようになると、生き生きと汗水流して働く姿がそこにはありました。

若年性認知症の男女比率は男性が多く、その多くの方が在職中に発症され退職を余儀なくされています。実際に想いを聞いてみると「まだまだ働きたい」「まだ身体は動くし、今までの社会経験を活かして人の役に立ちたい」と、皆さん口を揃えて言われます。そこで、修繕等で一緒に活動したケア経験を活かして、若年認知症の方のデイサービスを発足してみようと思いました。『何か会社のような組織を作り、目一杯、一日身体を動かしながら社会とつながっている実感と、仕事を成し遂げたという充実感が持て、役に立っているという気持ちを感じることができる場所』と考えて始めたのがおりづる苑せりがやの若年性認知症デイサービス“おりづる工務店”です。



まず環境を整えて“仕事”という雰囲気を作り上げるために、朝、利用者・スタッフが同じ作業着に着替え“出勤(来苑)・退勤(帰苑)”時に事務所のタイムカードをそれぞれ押して頂いています。作業着には“おりづる工務店”とネームの刺繍入り。また名刺もそれぞれが持ち歩き、今までの経験を活かす形での肩書きも付いています。

それこそ活動当初は、以前と同じように民家の修繕や倉庫整理等を行なっておりましたが、やはり『全くの外部から依頼された仕事のほうが社会の一員とじて頂けるのではないか、そして社会とのつながりが広がり、そこには普通の生活があるのではないか』という思いが強くなりました。そこで、従来から交流のあった保育園の園長先生や市役所子育て支援課の担当者に説明し、協力を仰ぎました。現在では、市内の全保育園から理解を得て、仕事の依頼が連日のように届き、年内の予定はぎっしりと詰まっています。

その仕事内容は多岐に渡っていて、プール掃除・園庭掃除・マット下の砂出し・下駄箱等のペンキ塗り・落書き消し・剪定・床磨き・砂場掘り起こし・・・等々、数えると限りがありません。



自宅にいと、身体を動かす機会が少なく、不安感から閉じこもりがちになり、社会との接点も限られてきてしまいますが、工務店では皆さん同年代ということから会話内容の時代背景も同じで、話も自ずと弾みます。仕事にも積極的に取り組まれ、先生や園児達に感謝され生き生きと過ごされているように思います。ある方は、「まだ人の役に立てる、それが嬉しい」と言われ、毎週の工務店“勤務”を非常に楽しみにされています。ご本人の〈人の役に立っているという気持ち〉や〈仕事を成し遂げる充実感〉、〈社会とのつながり〉を実感できるような環境がようやく整い始めました。仕事内容も、自然に身体を動かし、高齢者とはまた違うストレスや欲求を発散できるものとして定着してきています。さらに最近では、園長先生が保育園発行の便りに載せて下さったり、民生委員や町内会長さんが、自主的に回覧板で活動の様子を回して下さったりと、地域への輪が広がり、嬉しい状況でもあります。まだまだ若年性認知症のことは余り知られていませんが、“おりづる工務店”の活動を通して地域の方々にも知ってもらおうきっかけとなっていると思います。

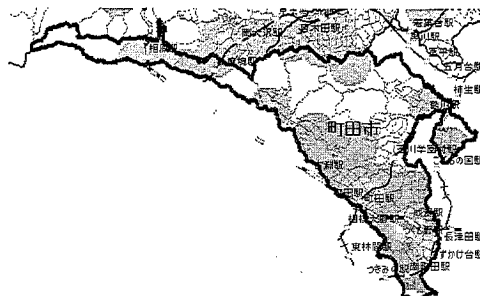
ただ、現在は、介護保険サービスの地域密着型認知症対応通所介護の一環として活動しています。そのため、報酬はゼロとし、ボランティアで仕事を請け負っています。将来的にはやはりきちんとした形で報酬を得られるようにし、それを給与という形でご本人へお渡ししていきたいと考えています。そうすることで、より一層モチベーションも高まりますが、何よりも〔仕事〕をすれば対価として〔給与〕を受け取ることが至って普通のことだと思うからです。それが実現できれば、厚労省で検討されている《就労支援》の一つになるのではないのでしょうか。しかし、それにはもう少し実績を作っていかなければなりません。今は実績を作り、来るべき日に向けて一つ一つの積み重ねだと思っています。

また“おりづる工務店”の現況が変化することも想定しています。皆さんのADL低下も考えられます。まして若年性認知症は進行が早いと言われていています。個人差はあるものの、病状が進行し、現在の仕事・活動が困難になった時のための過ごし方も考えております。その一つとして、つい先日“おりづるパン工房”なるデイサービスをスタート致しました。このデイサービスの内容も〈地域社会との交流〉をモットーとして、手探りながら色々な工夫を図っていきたくて考えています。

2. 地域の紹介

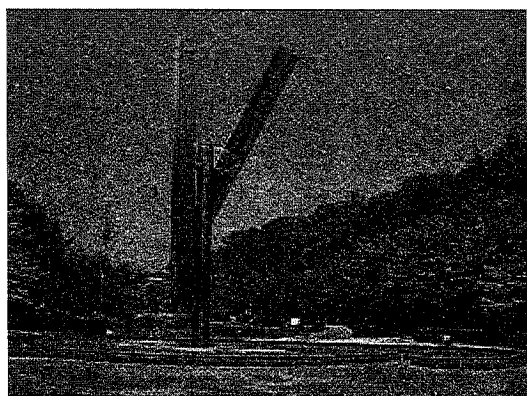
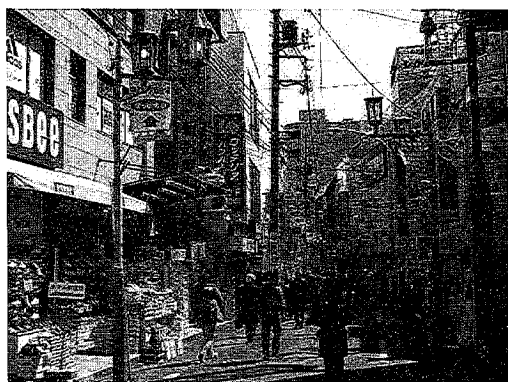
おりづる苑せりがや（おりづる工務店）がある東京都町田市は、東京都の中心部よりやや西側に位置し、横長い地形で八王子市や相模原市、横浜市、川崎市等に隣接しています。古くは縄文時代まで遡り、多摩丘陵地域で生活していたとされる遺跡が数多く出土しています。

現在は、その発掘調査の跡地にマンモス団地群が建設され、現在も「団地の町」と呼ばれています。その「団地の町」でも団塊の世代や高齢者世帯が圧倒的多数を占めていて、今後の高齢化社会を迎えるにあたり、一つの課題となっています。



総人口は415,848人となっており、毎月の人口増加傾向に伴い高齢者向けのサービスは充実しています。ただ、若年性認知症の方向けのサービスは他の地域と同じように皆無に等しく、おりづる苑せりがや（おりづる工務店）だけです。若年性認知症の方は、高齢期認知症の方と比べると人数は少ないのですが、実際に少ないながらもデイサービスを利用し始めました。そこで必要性から、“おりづる工務店”が誕生しました。

最寄り駅は、JR横浜線、小田急線の町田駅で、駅前の古くからある商店街を抜けて市立芹ヶ谷公園を目指します。市立芹ヶ谷公園はかなり広く、家族連れに人気のスポットで、四季折々の季節が楽しめます。版画美術館も併設していることもあり、美術や芸術に触れることもできます。



また、園内では、現在も湧き水があり、この水を利用した大きなシンボルマークの噴水があり、夏になると子供たちの遊び場になっています。この公園の隣という好立地におりづる苑せりがや（おりづる工務店）があります。

3. 活動の内容

【若年性認知症デイサービス発足まで】

最近、人数は少ないものの何名かの若年性認知症の方が、デイサービスを利用し始めました。しかし周りの方と比べると断然若く、ご本人も「ここは自分の来る所ではない」と思われていました。それもその筈で、周りの高齢者は皆80歳～90歳とご自分の両親と変わらない、もしくはそれよりも上の方たちばかりなのです。おりづる苑せりがやは、高齢者にとってはかなり活動的なのですが、それでもやはり高齢者向けの時間が流れるデイサービスに変わりはありません。若年性認知症の方をデイサービスに合わせるのではなく、デイサービスが合わせるとしたら、そこで、彼らに対して何ができるのか考察していました。そうした時、一人の若年性認知症の方が訪れてきました。その方も「自分のいる所ではない」と例外なく思われていましたが、法人が賃借している民家の修繕を男性スタッフと二人でするようにすると、生き生きと汗水流して働く姿がそこにはありました。

若年性認知症の男女比率は男性が多く、その多くの方が在職中に発症され退職を余儀なくされています。実際に想いを聞いてみると「まだまだ働きたい」「まだ身体も動くし、今までの社会経験を活かして人の役に立ちたい」と皆さん口を揃えて言われます。そこで、修繕等で一緒に活動したケア経験等を活かして、若年性認知症の方のデイサービスを発足してみようと思いました。『何か会社のような組織を作り、目一杯、一日身体を動かしながら社会とつながっている実感と仕事を成し遂げたという充実感が持て、役に立っているという気持ちを感じることが出来る場所』を目指しました。それにはデイサービスの殻を破るような斬新な考えが必要でした。まず特に男性は「仕事」が生きがだったということ、加えて、高齢者とはまた違ったストレスや欲求を抱えている彼らが、自然に身体を動かしてそれらを発散できるような仕組みが必要だと考えました。〈人の役に立っているという気持ち〉や〈仕事を成し遂げる充実感〉、〈社会とのつながり〉も視野に入ると、やはり外での仕事、活動となるのではないかと考えました。そこで、まず環境を整えて“仕事”という雰囲気を作り上げました。朝、利用者・スタッフが同じ作業着に着替え、“出勤(来苑)・退勤(帰苑)”時に事務所のタイムカードをそれぞれ押して頂いています。作業着には“おりづる工務店”とネームの刺繍入り。また名刺もそれぞれが持ち歩き、今までの経験を活かす形での肩書きも付いています。



次に活動内容として、当初は、以前と同じように民家の修繕や倉庫整理等を行なっておりましたが、やはり『全くの外部から依頼された仕事のほうが社会の一員と感じて頂けるのではないかと、そして社会とのつながりが広がり、そこには普通の生活があるのではないかと』という思いが強くなりました。そこで、従来から交流のあった保育園の園長先生や市役所子育て支援課の担当者に説明し、協力を仰ぎました。現在では、市内の全保育園から理解を得て、仕事の依頼が連日のように届き、年内の予定はぎっしりと詰まっています。

【ある一日の仕事】

- 10:00 事務所到着
作業着に着替え
タイムカード
今日の仕事の流れ説明
倉庫で道具準備&車両積込
- 10:30 出発
保育園到着
・プール非常階段ペンキ塗り
・床の古ワックス落とし
・砂場の掘り起こし
- 12:30 昼食（現場保育園付近の飲食店）
昼食後は保育園へ戻る
休憩 → 園庭でサッカー
- 13:40
午前の続き
・プール非常階段ペンキ塗り
・園庭掃除
- 15:20 お茶、片付け、撤収開始
- 15:45 事務所到着
地下倉庫に道具片付け
タイムカード
着替え
- 16:10 終了



【保育園での仕事～就労支援の一步手前～】

現在は、介護保険サービスの地域密着型認知症対応通所介護の一環として活動しています。そのため、報酬はゼロとし、ボランティアで仕事を請け負っています。将来的にはやはりきちんとした形で報酬を得られるようにし、それを給与という形でご本人へお渡ししていきたいと考えています。そうすることでより一層モチベーションも高まりますし、何より【仕事】をすれば対価として【給与】を受け取るとは至って普通のことだと思うからです。それが実現できれば、厚労省で検討されている《就労支援》の一つになるのではないのでしょうか。一度、一般的な考えから、ご家族よりお預かりした金額をそのまま給与袋に入れてご本人にお渡ししたこともありますが、最近まで一家の大黒柱として社会の第一線で働いてきたことと、それなりの給与額を受け取っていたことからすると、『何か違う』という思いもありましたし、ご家族からの『騙している感じがする』という意見もあり、中止しました。実現すべきはやはり介護保険サービスの中であっても、もしくは介護保険サービスとは別の外部団体となっても、報酬を得ることが可能な仕組みを考えていく、もしくは作っていくことだと思います。そんな意味で、現在は就労支援の一步手前という事です。

今では、保育園から依頼される仕事内容は多岐に渡っていて、プール掃除・園庭掃除・マット下の砂出し・下駄箱等のペンキ塗り・落書き消し・剪定・床磨き・砂場掘り起こし・・・等々、数えると限りが無いほどです。当初、若年性認知症の方々でどんな仕事ができるのかわかりませんでしたし

たので、その点を見極める必要性がありました。まずはやってみて、保育園の先生と相談しながら、その内容に近い仕事の試行錯誤を繰り返していました。

その他にも、保育園の先生が、若年性認知症についての知識がそれほど多くはなかったもので、保育園へ行くと園児たちを教室の中へ誘導し、仕事中は園児の全くいない園庭等での活動となったこともあります。これは正直寂しかったです。今では、先生にもご理解頂き、園児が大勢いる中での仕事となってきました。ちょっかいを出して逃げる園児を、「しょうがねえなあ」と嬉しそうに見守る社会の一員がそこにはいます。

たまたま、保育園では雑務の仕事に追われていたことと、先生は女性が多く力仕事のものは敬遠しがちだったこと、また大きな補修や修繕は予算的に後回しになりがちだったことにニーズがありました。おりづる苑せりがや（おりづる工務店）としてもご本人の〈人の役に立っているという気持ち〉や〈仕事を成し遂げる充実感〉、〈社会とのつながり〉がまさに実感出来るものと思い、仕事内容としても、自然に身体を動かし、それらを発散出来るものとしてニーズがありました。ここにすばらしい出会いがありました。仕事の依頼は絶えることが無いほどに順調です。ところで、仕事はやはりそれなりに完成度が高いものを提供していかなければなりません。それは、将来の報酬を得るという考えの下、その完成度を維持していかなければ報酬は発生していかないと考え、完成度が低くなった時点で仕事の依頼も少なくなってくるだろうと考えています。そこをフォローするのが私たちの仕事です。

自宅でも身体を動かす機会は少なく、社会との接点も限られてきてしまいがちですが、工務店では皆さん同年代ということから会話内容の時代背景も同じで、話も自ずと弾みます。仕事にも積極的に取り組まれ、先生や園児達に感謝され、生き生きと過ごされているように思えます。ある方は、「まだ人の役に立って、それが嬉しい」と言われ、毎週の工務店「勤務」を非常に楽しみにされています。

トピックス・トピックス・トピックス・TOPICS・トピックス・トピックス・トピックス

都立報 福祉報 2007年10月号

町田市の認知症通所介護「おりづる苑」の取組み
若年性認知症のデイサービス
おりづる工務店の挑戦



土曜日の朝10時、おりづる工務店に50、60歳の男性たちが現れ、スタッフが「社長、部長、おはようございます」と声をかけます。今日の仕事は、保育園の下駄箱のペンキ塗りや園庭の雑務の予定。10時半にはスタッフの遠転する車で保育園へ出発しました。おりづる工務店のメンバーは皆、若年性認知症の男性たち。空間認知に不安があり、剪定するはさみの片側をつかんでいて、もう片側を自分でつかむことが難しい方もいます。できることを自分でやりながら、スタッフが手助けします。

「まだまだ働きたい」と支える町田市のせりがや会長にある「おりづる苑」では、介護保険の認知症対応型通所介護を提供しています。冒頭の土曜日の朝10時、おりづる工務店のメンバーの多くは平日は、高齢の方と一緒の遠征先まで通っています。しかしながら、そこには年齢の若い彼らに合うプログラムが少なく、居場所がありませんでした。そのうち、平成19年1月、「日一休、一日身体を動かしながら社会とつながっている実感を持って働きたい」と、毎週土曜日に若年性認知症の男性6名をメンバーとした「おりづる工務店」の活動が始まりました。おりづる苑の副理事長さんは「彼らの多くは50歳代で定年し、急に仕事も辞めなければならなくなった。働きたいという気持ちも残っており、「何か会社のような組織を作りたい」と考えて始めたのがおりづる工務店」と話します。取組は法人内の研修などをしてい

ましたが、前田さんは「全くの外部から依頼された仕事で公共性も高い方が、社会の一員と感じていただけるのではないかと考え、市内の保育園の園長さんや、アビリティから6月からは冒険のよう、保育園へ仕事に出かけるというスタイルが生まれました。仲間がいる」とおりづる苑スタッフの主任が話します。

さんは、「自宅でも身体を動かす状況がなかなかない。そうした中、(家族からは)平日に通うデイサービスとは違う姿をおりづる工務店では見ている」という感想が聞かれる。利用者同士もコミュニケーションがとれていると話します。若年性認知症という障害を抱える不安の中、同年代の仲間がいるという状況、一日を過ごしているということが、メンバーの明るい表情からうかがえます。さらに、スタッフの権利が保証されています。スタッフが社会の一員だったことをふまえて、社会とのつながりを持ち続けていた方が、どうなると成し遂げたという充実感が持て、自分の力が必要とされていると感ずることが大得意と、スタッフのやり方を話します。

4. 活動の成果と今後の展望

【成果】

自宅にいると、身体を動かす機会が少なく、不安感から閉じこもりがちになり、社会との接点も限られてきてしまいますが、工務店では皆さん同年代ということから会話内容の時代背景も同じで、話も自ずと弾みます。仕事にも積極的に取り組まれ、保育園の先生や園児達に感謝され、生き生きと過ごされているように思います。ある方は、「まだ人の役に立てる、それが嬉しい」と言われ、毎週の工務店“勤務”を非常に楽しみにされています。ご本人の〈人の役に立っているという気持ち〉や〈仕事を成し遂げる充実感〉、〈社会とのつながり〉を実感できるような環境がようやく整い始めました。仕事内容も、自然に身体を動かし、高齢者とはまた違うストレスや欲求を発散出来るものとして定着してきています。当初の『会社のような組織を作り、目一杯、一日身体を動かしながら、社会とつながっている実感と、仕事を成し遂げたという充実感が持て、役に立っているという気持ちを感じることが出来る場所を作りたい』という目的は果たせたと思います。

また保育園の先生が、若年性認知症についての知識がそれほど多くはなかったのですが、仕事をしていくに連れ、先生にもご理解頂く事ができ、園児が大勢いる中での仕事となってきました。園長先生が保育園発行の便りに載せて下さったり、民生委員や町内会長さんが、自主的に回覧板で活動の様子を回して下さったりと、地域への輪が広がり、嬉しい状況でもあります。まだまだ若年性認知症の事は余り知られていませんが、“おりづる工務店”の活動を通して地域の方々に知ってもらえるきっかけとなっていると思います。

園児がちよっかいを出して逃げる。「しょうがねえなあ」と嬉しそうに園児を見守る社会の一員がそこにいます。他の仲間やスタッフ、保育園の先生はもちろんですが、園児だけではなく園児の保護者や関係者、昼食の飲食店従業員、そのお客、すれ違う人々、まさに地域社会との交流で、地域の様々な方と接し会話をするということは、それこそが普通の生活であり、私たちが同じことをしている筈です。

【今後の展望】

現在は、先に述べましたとおり介護保険サービスの地域密着型認知症対応通所介護の一環として活動しているため、報酬はゼロとし、ボランティアで仕事を請け負っています。将来的にはやはりきちんとした形で報酬を得られるようにし、それを給与という形でご本人へお渡ししていきたいと考えています。そうすることでより一層モチベーションも高まりますし、何よりも〔仕事〕をすれば対価として〔給与〕を受け取ることは至って普通のことだと思うからです。それが実現できれば、厚労省で検討されている《就労支援》の一つになるのではないのでしょうか。しかし、それにはもう少し実績を作っていかなければなりません。今は実績を作り、来るべき日に向けて一つ一つの積み重ねだと思っています。

また“おりづる工務店”の現況が変化することも想定しています。皆さんのADL低下も考えられます。まして若年性認知症は進行が早いと言われていています。個人差はあるものの病状が進行し、現在の仕事・活動が困難になった時のための過ごし方も考えております。その一つとして、つい先日“おりづるパン工房”なるデイサービスをスタート致しました。このデイサービスの内容も〈地域社会との交流〉をモットーとして、手探りながら工夫を図っていきたくと考えています。

大切なことは、若くして認知症になっても笑って、安心して普通に暮らせる町になればという想いと、若年性認知症の方を敬遠するのではなく、私たちにできるものから始めていくことだと思います。これをきっかけに、若年性認知症デイサービスが全国へ広がることを願います。

患者を生きる

479

社会へ①

認知症

東京都町田市。駅からほど近い市街地にある認知症の人のデイサービスセンター「おろつろ苑せりがや」に毎週土曜、50、60代の男性数人がやってくる。保育園などから請け負ったベンチ整理や掃除、建物補修などをする「おろつろ工務店」。病家になって仕事を辞めたが、まだ働きたいという若年認知症の人たちの希望をかなえようと、今年1月にスタートした。

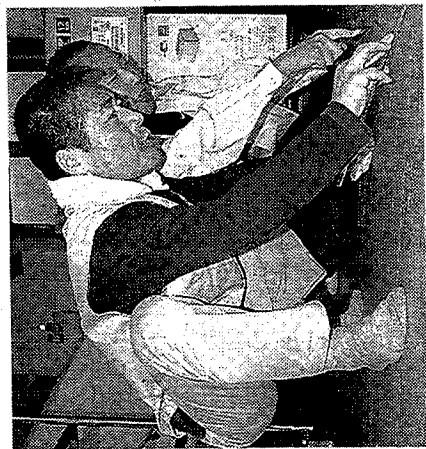
9月下旬、作業に参加した平本豊市郎さん(69)は笑顔を見せた。「この日がとても待ち遠しいんです」

長年、計測機器メーカーに勤務。5、6年前から妻の眞理子さん(67)らに聞いたほかの質問を繰り返すなど異変が見られるようになった。

03年秋、朝、出勤して2時間ほどで帰ってきた。ちやうどパートに出かけようとしていた眞理子さんは驚いた。

「どうしたの」「仕事から帰ってきたんだよ」

電車の中で寝てしまい、仕



保育園の廊下についた汚れを落とす平本豊市郎さん(左)―東京都町田市で

まだ働きたい、訴え続ける

事をしていける夢を見て、目覚めたときに帰宅の途中と思い込んでしまったようだった。

翌年2月、川崎市で聖マリアンナ医科大学病院に検査入院し、脳の一部の萎縮や血流低下が見つかった。東京都多摩市の新天本病院で「もの忘れ外来」も担当する杉山恒医師(34)は、若年性のアルツハイマー病と診断した。

現在の医療では治らないと知り、「自分の人生は終わるだ」と思った。薬をのみながら勤め続けたが、05年8月から休職し、1年後退職した。会社は「電話番などできることをやってもらえば」と勧めたが、駅の出口もわからないようになり、おきこめるほかなかった。

退職後はほぼ毎日、スポーツクラブのプールに通った。子どもころは家の近くの川で泳いだ。大学時代は水泳部。就職してからも、1日2千〜3千泳いでいた。

だが、脳炎所のロッキングの場所がわからなくなり、サウナで頭をぶつけてはけをするなどが続き、昨秋からはプールにも行けなくなった。

体力は十分あるのに、食器洗いや掃除など、家事の一部の手伝いをするだけの毎日。

「体を動かしたい」「社会でかかわりたい」

豊市郎さんは眞理子さんに訴え続けた。

(文 写真・太田康夫)



「患者を生きる 社会へ」は6回連載します。

患者を生きる

480

社会へ②

認知症

04年2月に若母桂子（66）がパーキンソン病と診断された東京都町田市の平本憲市郎さん（59）は06年夏、長年勤めた計測機器メーカーを退職した。アールのロッカーの場所もわからなくなり、秋以降は好きな水泳もできなくなった。

同年代の人が働いているのに、家に閉じこもっているのは嫌だった。「体を動かしたい」と訴えた。

妻の真理子さん（61）はアールズを解消できる場所を見つけてあげたいと思った。

市内の高齢者向けのタイムサービスセンターの情報を集めてみた。70、80代の人が軽い体操などをしているところ、「夫が利用するところでははない」と感じた。

「ちよろろ若年認知症の人向けのサービスが始まりますよ」。年明けに市役所に相談すると、担当者が教えてくれた。認知症の人のためのタイムサービスセンター「おひつる苑せりがや」を運営する町田市福祉サービス協会が1月中旬



自宅で話す平本憲市郎さん（左）と妻の真理子さん＝東京都町田市で

「工務店」の作業着を着て

旬にスタートさせる「おひつる工務店」のことだった。

週一回、50、60代の認知症の人が集まって、掃除などのボランティア活動をするという。昨年2月、「せりがや」に来た50代後半の男性とスワットの前田隆行さん（71）が初めてタイムサービスに使っていた民家の修繕をするようになったのがきっかけだった。男性が生き生きと働く様子を見て、協会は工務店の構想を検討。タイムサービスに通う男性も人に声をかけるよう、「せりがや」全員が必死だ。

憲市郎さんは1月中旬、「せりがや」に真理子さんと説明を聞きにやってきました。

「できるんじゃない、何でもします」。その話を憲市郎さんに前田さんは、ベトナムに「おひつる工務店」と縁起の文字の刺繍が入った作業着を譲り渡してもらった。

「よく似合っていますよ」

前田さんが声をかけるよう、憲市郎さんは喜んで、その日はそのまま着て帰った。後日、「作業担当主任」と肩書の入った名刺ももらった。

毎週土曜の朝10時、「せりがや」の事務所に集合し、作業着に着替える。タイムカードを押し作業場へ。みんなで昼食を食べ、午後も作業を続ける。その後はスワットも一緒にカラオケをする。

間もなく、憲市郎さんは「次はいつ工務店があるの？」と毎日のように真理子さんにたずねるほど、活動を楽しみにするようになった。

患者を生きる

481

社会へ③

認知症

アルツハイマー病と診断された東京都町田市の平本肇市郎さん(69)は今年2月から週1回、若年認知症の人が集まる「修繕や掃除などをするサービス」"おりのる工務店"に通うようになった。

最初はサービスを運営する町田市福祉サービス協会の空き家の修繕や掃除、倉庫整理をしていたが、7月になると、五つの保育園からも、仕事の依頼が入るようになった。仲間も6人に増えた。

どきどき感があった今年の夏。窓下でのプール掃除や金魚の水槽の掃除、花壇の整備……。肇市郎さんは仲間たちと作業に取り組んだ。

昼食は近くの飲食店で好きなものを注文する。できる人は自分で、できない人はスタッフがあらかじめ預かっておいた中から代金を支払う。

9月上旬の土曜は、前田隆行さん(51)らスタッフ5人と計10人で、市立町田保育園に出かけた。道すがらスキップをする人。アニメ「鉄腕アトム」の主題歌を口笛で吹きながら、色の落ちたげた箱にぐんぐん手を突っ当てる人。



「おりのる工務店」のスタッフとカラオケを楽しむ平本肇市郎さん(中央) 東京都町田市で

人の役に立てる、それが喜び

肇市郎さんは、廊下にごりごりついた汚れをこぼけ落す担当だ。前田さんと一緒にくらは床をこする。額から汗がしたたり、水泳で鍛えた腕には力こぶが盛り上がった。

午後3時。げた箱は鮮やかな水色になり、廊下の床はくっきりと木目が浮かんできた。

「きれいになりました」と藤田義江園長(58)。「ありがとうございました」。約40人の園児が声をそろえて、全員が笑顔でこたえた。

肇市郎さんは、夏ごろから自宅の洗面所やトイレの場所を間違えるようになった。

5年前に建てた家のローン返済まであと20年。妻の真理子さん(51)は近くの紳士服縫製工場で働く。生活費はそのパート収入と肇市郎さんの傷病手当金を中心だ。心の中で悲鳴をあげることもある。でも明るくなった肇市郎さんを見ると、頑張らなきゃと思う。

川崎市の聖マリアンナ大聖堂に2015年11月1日、主治医の杉山恒之医師(84)が工務店に話を聞けると、肇市郎さんは「最高ですよ」と夢中になって話す。「豊かな感情や意欲を生かせるのはとてもいい」と杉山医師。アールも月1回、工務店のスタッフと行くようになった。

「ありがとうございました。また来て」

その言葉が励みだ。

「また人の役に立てる。それがうれしんです」

活動報告(8)

活動名称	地域の認知症の拠点としてのグループホームの活動
活動要旨	「認知症にならない、なっても暮らせる地域づくり」をキーワードに活動。住民ボランティアグループと、地域の行政、生協が協力してできたNPO法人で、グループホームを拠点に、宅老所、ふれあい会食会、子育て支援など活動は多岐に渡る
応募者	NPO法人 ほのぼの朝日ネットワーク 高井 道子
連絡先	〒509-3303 岐阜県高山市朝日町浅井736番地

1) 推薦理由

- ・ グループホームを拠点に世代や事業の枠を超えた活動が、認知症の方の生きがいや地域住民の理解の促進に結び付いている活動である。
- ・ 小さなグループホームでも認知症を理解してもらう情報発信基地としての役割を担っている。小さな町、地方でも先進の認知症ケアが可能であるモデルとなろう。
- ・ 住民自身のボランティアから大きく発展していき、地域に根ざした活動をしている。オープンで自然な流れの中でご本人たちものびやかに暮らしている様子が素晴らしい。
- ・ 最期まで地域社会の一員として暮らすことができるこのような活動が、全国各地で展開されていくことが期待される。

2) 3月1日キャンペーン発表会 発表資料

町づくりキャンペーンホームページからダウンロードができます。



ほのぼの朝日の家の理念

・ 安心して楽しくかつ尊厳のある暮らしがしたい

・ 自分らしく生きがいを持って地域の中で楽しく暮らしたい

みなさん毎日充実してる？

料理 買い物 掃除 ごみ捨て 洗濯物干し 農協での支払い おしゃべりetc

どこでも行きます

とらやで饅頭 同級生の家の近くで栗拾い 高山市政70周年の舞台を見に

朝日町文化部研修で盆梅展 朝日小学校の同級・同窓生 お寺にも行きます

春祭り 園遊会 すすらのペンションでお茶 ご近所さんお手玉遊びを小学生に教えて帰ります

来るもの拒まず 同じ釜の飯を食う

朝日に住みたい若夫婦の家探しもお手伝い 土曜教室のクッキーを届けに

避難所生活学習会 NPO法人ルビナス 獅子だ〜い好き(中のイケメン?) 俄に(件)賞して〜

ハンドベル演奏 田んぼの持ち主のお孫さん

にわか かご網教室

生きがい支援も

この子わしを見ているんや

高山へお願いします 10年ぶりの三姉妹再会

ひだ朝日伝統芸能祭に参加 認知症セミナーで「ふるさと」

作 坂倉勉

みんなで歌う歌詞を 外出支援でスケッチ 絵は気の向いたときに

グループホームは暮らしの拠点としての役割も担う

朝日小学校4年生がお手玉遊びを習いに 岐阜経済大学佐藤・樋下田ゼミの学生

認知症サポーターを 養成 日本福祉大学石川ゼミの学生

ご近所さんが散歩の途中ちよつとご一緒に 終の棲家としても

紙パンプ・オムツの学習会 毎年恒例の餅つきと花餅作り 平成19年1月18日97歳で逝かれる 97歳のお誕生会

3) キャンペーン応募資料(全)

1. 概要

NPO法人ほのぼの朝日ネットワークのコンセプトは、「認知症にならない、なっても暮らせる(赤ちゃんから高齢者までほのぼの暮らせる)地域づくり」です。定員6名の「グループホームほのぼの朝日の家」を拠点として、宅老所、ふれあい会食会、子育て支援にも取り組んでいます。

そのほか、活動の一環として、ほのぼの朝日ネットワークニュース「にぎわしひろば」をほぼ毎月近隣の町にも新聞折込みで発行し、グループホームでの暮らしを知っていただき、認知症になっても楽しく暮せるというメッセージを発信してきました。そして、グループホームの利用者さんの地域での活動を通して、認知症になっても生きがいを持って暮らせることを理解してもらい、また、理事長(高井)がキャラバンメイトとして認知症サポーターを養成する活動にも取り組んでいます。

平成17年9月のある日、グループホームの一人の利用者さんが、世間話をしている時に、「これからは歌と絵で他人を楽しませたい。」と、ボソッと言われました。ちょうど朝日町の伝統文化祭の出演者を募集していたので、ご本人に出演の意思を確認し、ご家族の了解を得て、早速申し込みました。

10月当日、スタッフが利用者さんの紹介をした後、歌われました。一曲目は、マイクを持つ手が震えてみえましたが、2曲目の「籠の鳥」を歌い終わると、その堂々たる歌唱力に会場の方の大きな拍手に包まれ、舞台を降りてから、「感動しました。がんばってくださいね。」と何人もの方から声をかけられ、ご本人も大感激されたようでした。

その後、12月には、各務原市での認知症セミナー、翌18年4月には、コープぎふくらしたすけあいの会総会、10月には、朝日町伝統文化祭2回目と、張りのある声を披露されました。さらに、11月には、飛騨文化交流センターで行われた飛騨地区コープぎふくらしたすけあいの会・飛騨市共催の認知症セミナーに、スタッフとともに出演し、理事長(高井)のグループホームほのぼの朝日の家の実践報告とともに参加者に大きな勇気を与えました。

絵のほうも、平成17年9月にスタッフと二人で好きなところへ出かける「外出支援」といううちのグループホーム独自のサービスを利用し、野麦峠に出かけ、日和田高原でスケッチを楽しんで、勘が戻られたようで、すてきな絵を連続して描かれました。

これは、我がNPO法人自体が、もともと地域の住民と行政(当時の村役場)とコープぎふが協力しあってできたので、地域とのつながりが深く、小学校の運動会、祖父母学級、文化部研修会、盆踊り大会等への参加や、小学校の総合教育で小学3年、4年の生徒がお手玉の遊び方を習いに来たり、グループホームはどんなところかを学習に来たり、土曜教室の子供たちが、自分たちの手作りクッキーをプレゼントしに来てくれたり、近所の子供が遊びに来てくれたり、祭に獅子が踊りに来てくれたり、農協へ1日おきに買い物に出かけたり、日常的なつながりを大切にしている中で育まれたように思います。また、複数の福祉系大学のゼミの学生さんたちが、見学・研修に来て認知症についての理解を深めたり、子育てママたちが利用者さんと一緒に餅つきをして、花餅を作るのは、毎年恒例になっています。さらに、町内の高齢者、高山旧市内や岐阜市、美濃市、可児市などのボランティアグループの訪問も、多く、利用者さんとスタッフが協力して昼食を作ってふれあい会食会の活動もしています。

一方、理事長(高井)が、キャラバンメイトなので、高山市だけではなく、飛騨市、下呂市の市民グループや傾聴ボランティアの認知症サポーター養成の活動にも岐阜県飛騨地域振興課や、高山市社会福祉協議会などと共に取り組んでいます。平成19年10月までに、300人近く養成しま

した。

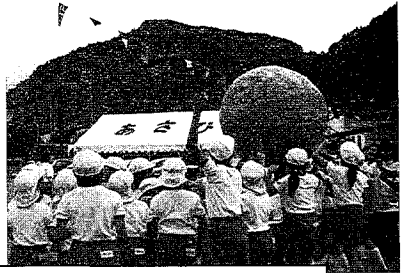
こうした活動を通して、朝日町、高山市だけでなく、飛騨地域全体が少しずつ認知症についての理解を深めているように思いますので、これからも引き続き取り組んでいこうと思います。



祭の獅子（イケメン？）に恋心！



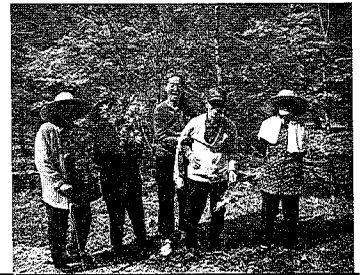
朝日小学校の運動会



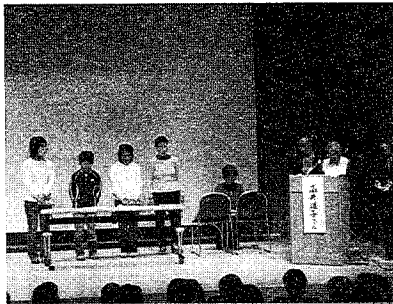
「あああ、大玉が……」



朝日町文化部の皆さんとバスで長浜の盆梅展に行き蟹を食べてきました。



カクレハ高原のもみじ祭り



この日は、ふるさとを熱唱
平成 18.10.29 飛騨文化交流センター



外出支援でスケッチ平成17年9月



サインして描き終わり！



金山町のグループが、ふれあい会食



町内の農協で買い物です



餅つきは、ここ4年間（開所時より）毎年恒例行事になりました



子育てネットと野中ファーム
利用者さんとスタッフの協力で
合計43食作りました〜

2. 地域の紹介

高山市朝日町(旧大野郡朝日村)は、岐阜県飛騨地域の南東部に位置し、高山から車で約25分、乗鞍岳と御岳の山懐に抱かれた自然豊かな溪谷型の美しい小さな町です。総面積の92.5%が林野で、標高712m以上、標高差は2kmを超え、農林畜産業を中心に発展した町で、高冷地野菜の生産と、繁殖牛が盛んです。朝日ダムを境に朝日地区と秋神地区に分けられ、秋神地区には、すずらん高原スキー場がありましたが、昨年閉鎖になり、さらに、平成20年4月より、秋神地区にあった小学校が朝日地区の小学校と合併されることになりました。

平成18年11月現在、人口2千人、そのうち15歳未満は、261人で全人口の12.9%、65歳以上の高齢者が680人で高齢化率は、33.8%の典型的な少子高齢化の進んだ地域です。

また、高山市(平成17年2月1日に合併)全体としては、面積2,179.35km²うち92.5%が林野の日本一大きい市となり、人口9万4千人高齢化率24.1%でやはり全国平均を上回っています。

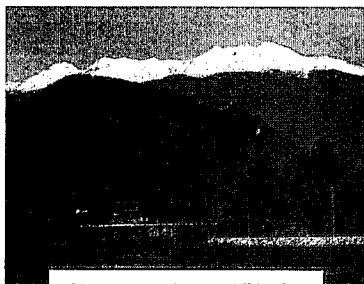
高山市は、「個性ある地域の連携と強調」を基本テーマに、市域の広大さや変化に富んだ地形など地理的・地形的な生活条件の克服、市域全体の早期一体性の確保と均衡ある発展に向けて、新たな町づくりに取り組んでいこうと、住民参加型の高山市地域福祉計画を作成し、「思いやり・支えあいで、安心して暮らせる町づくり」を目指し、認知症について行政で取り組む内容として、

- 1) 認知症グループホームの開設支援
- 2) 認知症に対する理解を深め誰もがサポートできるよう講座等の開設・研修
- 3) 講座等を受講した市民のグループホームへの活用支援

を掲げています。

そして、地域の取り組みとして地域福祉計画策定に関わった市民ワーキンググループ委員を中心にした地域の住民やNPO・ボランティア団体等をつなぐ地域福祉ネットワーク作りの協力を呼びかけています。高井も微力ながら市民ワーキンググループ委員として参加して、認知症についての取り組みを働きかけたので、計画に反映され嬉しいです。

どこの過疎地も同じだと思いますが、ここ朝日町も、どんなに厳しい条件の中でも、住民は、自立を迫られています。行政に頼るのではなく、行政とともにみんなで知恵を出し合い、過疎化をストップさせ、死ぬまで暮らせる町が私たち住民の切実な願いなのです。



朝日町からの乗鞍岳

グループホームほのぼの朝日の家兼
NPO 法人ほのぼの朝日ネットワーク
事務所

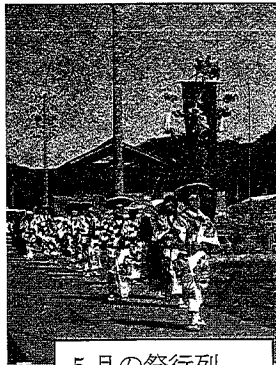


甲地区の七百五才の七本榎

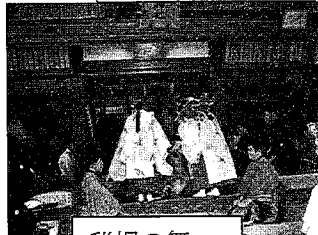


朝日町の真ん中を流れる飛騨川

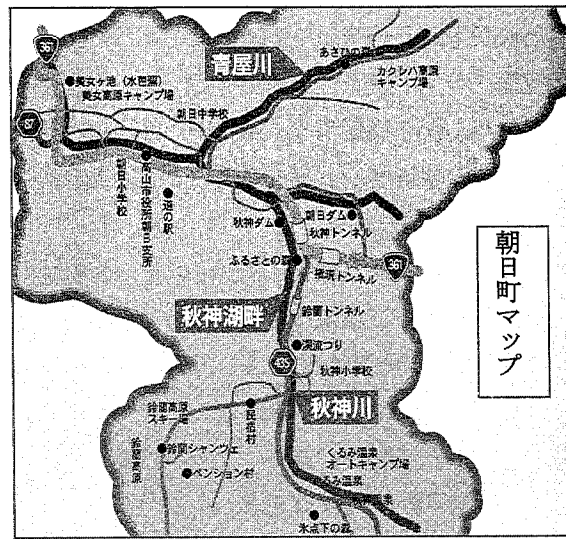
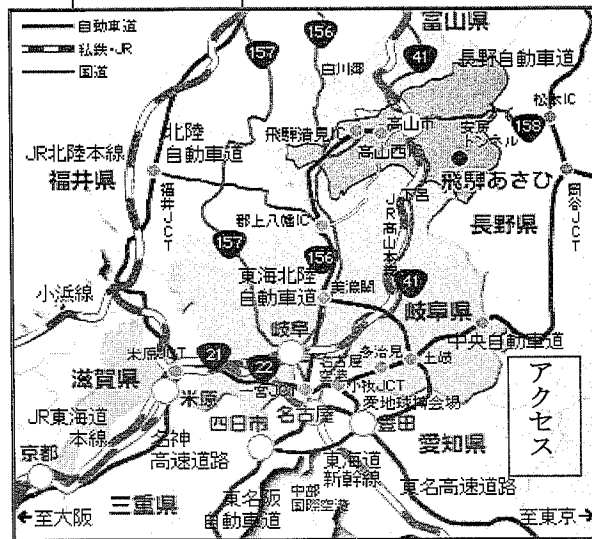
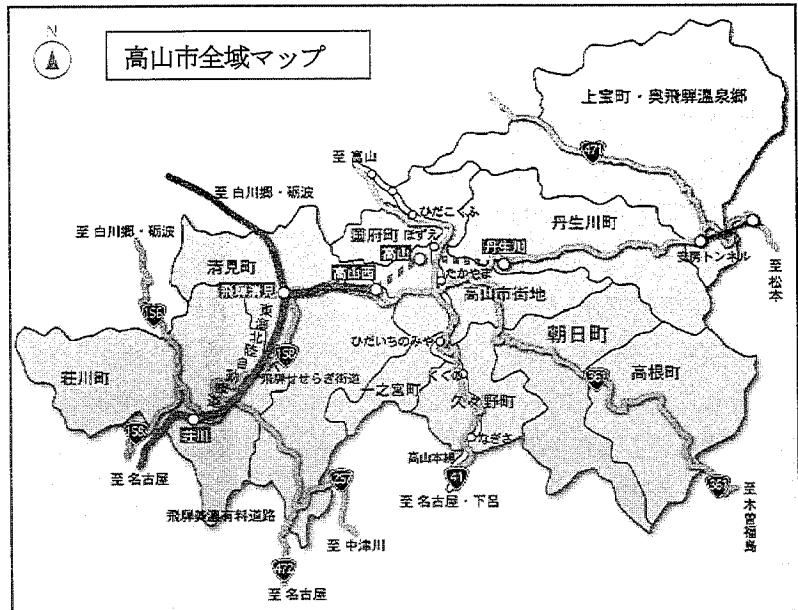
秋神地区胡桃島のもみじ



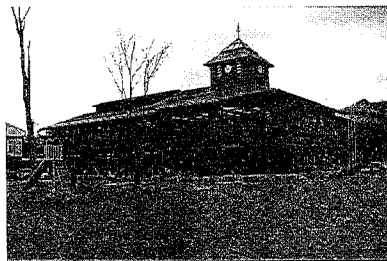
5月の祭行列



稚児の舞



出荷を待つ飛騨牛



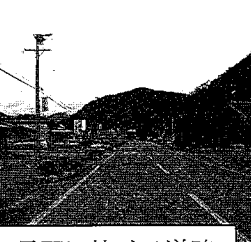
木の匂いと温もりの朝日小学校



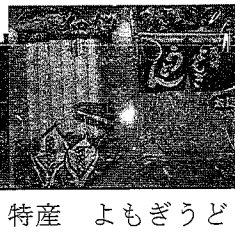
朝日支所とふれあいホール



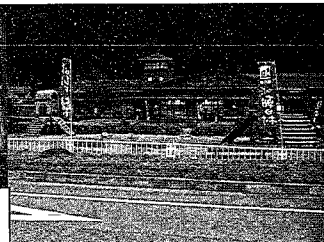
たった一軒のコンビニ



長野に抜ける道路



特産 よもぎうど
んと美女餅



ひだ朝日道の駅

3. 活動の内容

NPO法人ほのぼの朝日ネットワークのコンセプトは、「認知症にならない、なっても暮らせる（赤ちゃんから高齢者までほのぼの暮らせる）地域づくり」です。定員6名の「グループホームほのぼの朝日の家」を拠点として、宅老所、ふれあい会食会、子育て支援また運営資金捻出のため、「ふくろう」のブローチとストラップを製作して販売する活動にも取り組んでいます。

そのほか、活動の一環として、ほのぼの朝日ネットワークニュース「にぎわしひろば」をほぼ毎月近隣の町にも新聞折込みで発行し、グループホームでの暮らしを知っていただき、認知症になっても楽しく暮せるというメッセージを発信してきました。

そして、グループホームの利用者さんの地域での活動を通して、認知症になっても生きがいを持って暮らせることを理解してもらい、また、理事長（高井）がキャラバンメイトとして、認知症サポーターを養成する活動にも取り組んでいます。

NPO法人ほのぼの朝日ネットワークは地域の福祉の増進を目的とし、平成14年8月に設立、平成15年1月に認証され、法人としての活動を開始しました。

その基になったのは、平成11年11月に朝日町小学校の体育館（旧大野郡朝日村）で上映された映画『郡上一揆』の上映運動を担った上映実行委員会のメンバー（生協の組合員理事高井、養護教諭、トマト農家、未来の手話通訳、寺の坊守、幼稚園教諭、等）を中心に、死ぬまで暮らせる、赤ちゃんから高齢者まで楽しんで暮らせる地域づくりをしようと設立したボランティアグループほのぼの朝日ネットワークでした。住民自らが自主的に作ったこの地域では、初めてのボランティアグループでした。

村の社会福祉協議会に福祉のニーズの聞き取り調査をして、その中から自分たちがやりたいこと、また自分たちが必要だと感じていることに取り組みました。公民館での食事会や、クリスマス会、調理実習、読み聞かせの会、リサイクルバザー、グループホームの学習会と見学、社会福祉協議会の配食の手伝いなど多岐にわたりました。そのうち、村がオウムから買い戻した古民家を貸してもらえることになり、高井が当初やりたかった宅老所と託児も始めることができました。

当時、気軽に集まっておしゃべりのできる宅老所は、ありませんでした。村のデイサービスは、重度の障害のある方から認知症の方など、20人が一緒に過ごし、認知症の方への個別の対応が難しかったようなので、何とかそういう方の役に立ちたいという思いがあったので、そういう活動のできるものがとても嬉しかったです。さらに、生協での福祉エンパワメントの学習をしていくうちに、急激な高齢化社会を迎えるこの日本で、認知症（当時は痴呆症と言っていた）患者さんが増えるということが明らかになり、当時のアドバイザーだった岐阜経済大学の中井教授が、これからの活動として認知症高齢者のグループホームを作ると、宅老所も一緒に継続できると言われたので、生協の協力で、ほのぼの朝日ネットワークのグループホーム作りが始まりました。日本福祉大学の中井先生のゼミの学生と生協のグループホーム研究会とともに、当時の朝日村役場の住民福祉課長の協力で高齢者福祉調査を三次にわたって行い、住民が、在宅福祉サービスを利用して在宅介護を希望していることがわかると同時に、認知症の症状が出ている高齢者が、32人いることがわかりました。この調査報告と、認知症とグループホームの理解を得るために、グループホームを作っちゃおう集会を平成14年5月に行い、高山市で初めてできたグループホームの理事長に講演していただきました。今、思えば、この集会が、地域の方たちに認知症の理解をしていただく活動の第一歩だったと思います。その後、平成14年10月より、ほのぼの朝日ネットワークニュース「にぎわしひろば」を発行、ふれあい会食会も開始し、村の診療所の医師による認知症介護学習会を開催

したり、飛騨寿楽苑、高山旧市内グループホーム認知症基礎講座研修等でのスタッフ研修も行いました。宅老所には、会員さんのお姑さんが週1～2回通ってくださるようになり、高井の82歳の友達も、時々利用してくれるようになり、ふれあい会食会には、毎回5～8人参加して下さり、認知症患者さんと一緒に楽しみました。

そうした活動を続ける中、この古民家を改装して、平成15年10月に定員6名のグループホームを開所しました。12月には、満員になり、それ以来1人の利用者さんが、このほのぼのでターミナルを迎えられ、逝去されました。現在、この朝日町内の方が2人、高山旧市内の方が2人（内1人は朝日町出身）久々野町1人、荘川町1人と、高山市内にグループホームが5ヶ所しかないので、遠い町でも困った方優先に入居していただいています。

このグループホームの設立過程が、上述のように住民のボランティアグループが主体でしたので、この地域の中で、できるだけオープンに暮らすことを心がけてきました。

開所以来、住民健診も、インフルエンザ注射も、町内の方たちと一緒に受診し、定期受診も往診も、朝日町診療所所長の医師が私たちNPO法人の理事で、看護師たちも会員なので、協力してもらっています。診療所で町内の方と一緒にになると、初めは奇異な目で見られたりすることもありましたが、めげずに何十回と受診の回数を重ねて通いました。

また、食料品も高山旧市内のスーパーのほうが安いのですが、できるだけ町内の農協で買い物をするようにしました。歩いては行けない距離なので、1日おきぐらいに車で買い物に行きます。その上、歩くことが大好きな利用者さんが入居して以来、スタッフは毎日高山方面に向かって町内を一緒によく歩きました。隣町まで1日合計14～5キロ歩いたこともありました。町内の駐在所と一緒に挨拶に行き、お巡りさんと知り合いになりました。高山方面とは反対の近くのお店にも挨拶に行き、毎日通いました。

さらに、町内・各地域のイベントにも、利用者さんの体調の許す限り積極的に参加しました。春は、町文化部の研修バス旅行、高山祭り、すずらん高原祭り、各町・旧市内・萩原・下呂のお花見、夏は、朝日、久々野の盆踊り・花火大会、ドスコイ祭り、高根のかがり火祭り、秋は、小・中学校の運動会、紅葉祭り、荘川祭り、ひだ朝日伝統芸能文化祭、ぶり街道祭り、など。

一方、平成16年6月から平成17年3月まで、各地区の公民館に出かけていって、ふれあい会食会を行いました。認知症の理解を深め、介護予防や、介護サービスの利用方法など、高齢者にとって暮らしやすい情報の提供と体験学習を、行いました。具体的には、朝日村社会福祉協議会職員の話や、お巡りさんの詐欺予防の話、岐阜県障害半減運動研究所の保健師による物忘れ（記憶障害）予防の話、肩こり腰痛予防の呼吸法、雛様作り、貼り絵などと、食事も楽しみながら学習する機会を作りました。これには、52回開催し延べ418人が参加、ほのぼの朝日の家で行われた、ふれあい会食会の参加者を合わせると、528人の高齢者が参加され、当時の65歳以上高齢者は、ほぼ650人ぐらい（内要介護高齢者101人）なので、かなり多数の方が参加されたこととなります。

また、子育て支援事業も行っているのですが、開所以来毎年暮れには、子供たちと餅つきをして、花餅も作ってきました。去年は米作りにも挑戦しました。

こうして日々の暮らしを、積み重ねていた平成17年9月のある日、グループホームの一人の利用者さんが、世間話をしている時に、「これからは歌と絵で他人を楽しませたい。」と、ボソッと言われました。グループホームの理念が、「尊厳を守り、安心して楽しい暮らし」「生きがいのある楽しい暮らし」だったので、折にふれ、利用者さんに生きがいの話を投げかけていたのです。ちょうど朝日町の伝統文化祭の出演者を募集していたので、ご本人に出演の意思を確認し、ご家族の了解を

得て、早速申し込みました。

10月当日、町内の道の駅脇にあるこだま館で、スタッフが利用者さんの紹介をした後、歌われました。一曲目は、マイクを持つ手が震えてみえましたが、途中インタビューに答えて、2曲目の「籠の鳥」を歌い終わると、その堂々たる歌唱力に会場の方の大きな拍手に包まれました。舞台を降りてから、「感動しました。がんばってくださいね。」と何人もの方から声をかけられ、ご本人も大感激され、涙ぐまれました。

その後、同年12月には、各務原市での認知症セミナー、翌18年4月には、コープぎふくらしたすけあいの会総会、10月には、朝日町伝統文化祭2回目と、張りのある声を披露されました。さらに、同年11月には、飛驒文化交流センターで行われた飛驒地区コープぎふくらしたすけあいの会・飛驒市共催の認知症セミナーに、スタッフとともに出演し、理事長（高井）のグループホームほのぼの朝日の家の実践報告とともに参加者に大きな勇気を与えました。

絵のほうも、平成17年9月に、スタッフと二人で好きなところへ出かける「外出支援」といううちの独自のサービスを利用し、野麦峠に出かけ、日和田高原でスケッチを楽しんでから、すてきな絵を連続して描かれ文化祭に、展示もして、住民の皆さんにも見ていただきました。そして、複数の福祉系大学のゼミの学生、傾聴ボランティア、認知症サポーター、外部評価調査員の見学・研修、町内の高齢者、高山旧市内や岐阜市、美濃市、可児市などのボランティアグループの訪問も受け入れ、利用者さんとスタッフが協力して昼食を作ってふれあい会食会も行ってきました。

一方、高井が、キャラバンメイトなので、高山市だけではなく、飛驒市、下呂市の市民グループや傾聴ボランティアの認知症サポーター養成の活動にも岐阜県飛驒地域振興課や、高山市社会福祉協議会などと共に取り組んでいます。平成19年10月までに、300人近く養成しました。





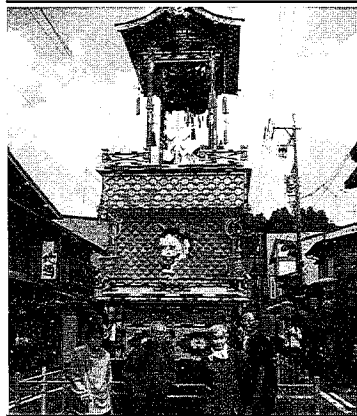
花餅を寄ってたかって



紙粘土の雛様作り ふれあい会食会ほのぼので



つきたての餅です



高山市政 70 周年の祝い



もみじ祭り 拾った枝です



公民館でヨガ体験



永田先生も利用者さんの作られた
採りたて卵を試食された



田植えも稲刈りも初体験



散歩途中で一休み 誰がご近所さんか
利用者さんかスタッフか



そこまで栗拾いにきたんや



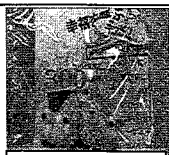
日福大石川ゼミ 2 年目です



ドスコイ祭りは 7 月第 4 土曜日



この日は朴葉寿司でおもてなし



ふくろう



長良川国際会議場にも



平成 19.1.18 享年 97 歳
ほのぼので逝去される

4. 活動の成果と今後の展望

こうして、さまざまな活動に取り組んだ成果は、さまざまな場面で見られるようになりました。診療所では、耳の遠い利用者さんが大きな声で話されても、待っていられずに「外を見てくるわ」と診療所の外に出られても、それが当たり前になってきて、スタッフが他の利用者さんに関わっている時は、見守りをしてくださり、外へ出られると知らせてくださるようになりました。

ほのぼの朝日の家の近くでも、高山方面でも、高根方面でも、利用者さんが一人で歩かれていると、「いま、一人で歩いているようだけど・・・」と電話で知らせてくださるようになりました。近くの店の方も、「いま、自動販売機で飲み物買って飲んでるけどいいのかな・・・」他のガソリンスタンドの店の中に入っていくと、「ここには、食料品は置いていないんですよ」と頼んでおいた対応を快く引き受けてくださったりしています。農協では、利用者さんが買い物をする姿が普通になり、レジで、店員さんに気長に待ってもらったり、利用者さんの知り合いに会うと、世間話に花が咲いて「まめなかな（元気だったかな）？」と気遣う言葉をかけあったりしています。

また、運動会、祖父母学級への参加などから、こんどは、ほのぼの朝日の家に小学校の総合教育で小学3年、4年の生徒たちがお手玉の遊び方を習いに来たり、グループホームはどんどころかを学習に来たり、土曜教室の子供たちが、自分たちの手作りクッキーをプレゼントしに来てくれたり、近所の子供が遊びに来てくれたり、利用者さんの近所の友達が散歩の途中で寄ってお茶を飲んでいたり、昼食を食べに来たり、祭に獅子が踊りに来てくれたり、日常的に、いろいろな方が訪れて来るようになりました。昨年から作り始めたお米も、田植え、草取り、稲刈り、稲こきに地域の常連さんがボランティアで参加してくれるようになりました。

そして、グループホームの実践報告を通して認知症と介護の学習としたいというさまざまな市民グループから高井に要請が来るようになりました。岐阜県地域振興課・飛騨市社会福祉協議会（以下社協）共催、高山市社協共催、下呂市社協共催の傾聴ボランティア養成（兼認知症サポーター）講座、河合町介護家族の会、三福寺町ボランティアグループ喜楽の会、生協くらしすけあいの会・飛騨市共催認知症セミナー、ひだ朝日芸能文化祭、外部評価調査委員学習会、福祉大学系ゼミなど振り返るといろいろなグループに報告しており、これから要請されているグループもあります。報告の中で、認知症の人のためのケアマネジメント センター方式についても紹介し、認知症になった時によりよいケア（自分にとっての快い環境を整えてもらう）を受けられるように、自分史を書いておこうという提案もしています。報告後、見学に訪れる方たちもたくさんみえました。こうした中で、認知症に対して自分の問題として捉える気運が少しずつ芽生えてきているように思います。特に、歌を歌ってインタビューに答える利用者さんの活動は、地域の方たちが認知症に対する理解を深めるとともに、認知症になってもこうして生きがいを持って暮らせるんだという安心感をもたらす重要な役割を果たしました。

今後の展望としては、今までのような活動を継続し、もう少したくさんの方の認知症の方とその家族の暮らしを支えるためにデイサービスを開設したいと思います。また、そのスペースを利用して、利用者さんの歌や踊りや実践報告ができるようにしていきます。また、他の利用者さんの生きがい探しに引き続き取り組み、他の利用者さんも、参加できるようにしていきたいと思っています。

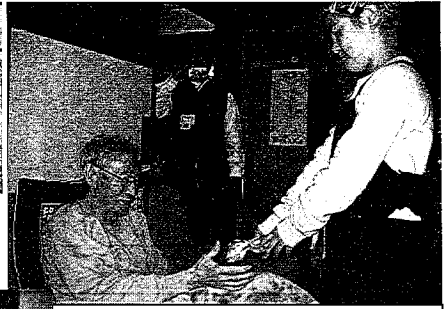
また、小学校の合併で、コミュニティスペースが空になった秋神地区でのふれあい会食会や、長寿学級と一緒に認知症予防活動にも取り組み、さらに、小・中学校で認知症について取り組むよう働きかけていき、認知症になっても暮らせるやさしい町づくりを住民の方たちと一緒に実践していきます。



レジでおつりをもらいます



坂倉さんの絵



手作りクッキー大歓迎



岐阜市のくらしたすけあいの会



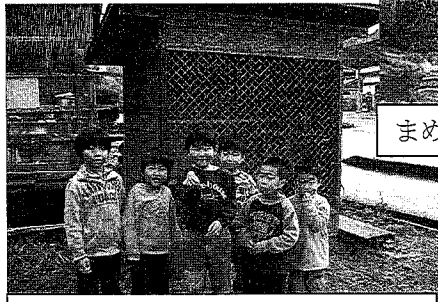
祭の獅子(イケメン?)に恋心!



田んぼを貸してくれた方の孫たち



まめなかな?(元気だったかな)



勝手知ったる鶏小屋で、ハイ卵!



各務原市ホットクラブ



どちらに歩いていかれても
だいじょうぶ



床暖のコタツでおやつ



朝日小学校4年生がお手玉遊び
を教わりにきました



稲刈りもボランティアさんと



可児市のいしづえの会

5. 各地域活動概要

No. 2

(番号は応募順です。)

活動名称	地域の人達と共に健康体操教室に参加
活動要旨	グループホーム入居者数名が、地元の健康体操教室に通い地域の方との交流を楽しむ
応募者	総合ケアセンター榛名荘内「グループホーム榛名荘」 介護福祉士 小林 秀子
連絡先	〒370-3342 群馬県高崎市下室田町 965-1

(概要)

<ケアセンター榛名荘とは>

- ・ケアセンター榛名荘は、グループホーム、小規模多機能、高齢者住宅などを運営している総合的な高齢者施設です。
- ・一年を通じて様々な催しが町ぐるみで行われ、町内有志の皆様の協力を得ながら、祭りや花火大会、運動会などへ参加させていただいています。
- ・榛名高校のボランティアが来訪、ケアセンターからは福祉、看護の講師が出向いて講義を行う等の交流があります。
- ・ケアセンター内には軽食と地元特産物販売を兼ねた売店「あいおい」があり、地元の皆さんの憩いの場となっています。
- ・概ね地域の皆さんは長く地元に住居されていて、利用者様の顔見知りも多く、何かと声を掛けて下さいます。

<グループホーム入居者が、施設職員とともに地元の健康教室に通う>

- ・グループホームの中でも比較的元気な認知症高齢者が、元気アップくらぶはるなの健康体操教室に参加しています。
- ・参加のいきさつは、無料体験のコースのお誘いを受けてのことでした。無料体験は5日間で、毎回3～5人の利用者様が一般会員の皆さんと一緒に和気あいあいと体操を楽しみました。
- ・6月からは有料ということもあり、以後の参加は諦めていたのですが、教室の方から週1回の参加を無料で続けても良いとの話をいただき、有難く通わせてもらうことにしました。
- ・一般会員の皆さんや指導の先生には認知症のことをお話し、理解と協力を得られています。
- ・7月、8月と暑い間も元気に教室に通い続けました。これからも周囲の理解と事情が許す限り、週1回の健康教室体操を続けていきたいと思えます。

活動名称	「認知症を知るための取り組み」
活動要旨	社団法人 長寿社会文化協会会員に講師を依頼し、各地域に合った講習会（認知症疑似体験含む）を開催し、認知症についての理解を深める活動をする
応募者	NPO法人 福祉振興会 小関 薫
連絡先	〒211-0001 神奈川県川崎市中原区上丸子八幡町 816 番地

（概 要）

認知症になっても家庭的な雰囲気に住めるグループホームを、平成7年に川崎市内で初めて新設して運営を開始しました。グループホーム運営の経緯は、社団法人 長寿社会文化協会（通称WAC）の会員となり、今後、高齢化社会を迎え、高齢者福祉の重要性、特に認知症（当時は痴呆症）の方が安心して生活できる環境の整備が重要と感じました。

しかし、一般の方々の認知症に対する知識や理解が不十分なため、家族の方に認知症の症状があっても、世間には認知症を隠す状況の現実と、そのため認知症のご本人やご家族は認知症による様々な症状に振り回され精神的にも、肉体的にも日々の生活に困難な場面が沢山ありました。

このような現実から、「認知症になっても安心して住める街づくり、地域づくり、人材づくり」に関する研修会・講習会を神奈川県、静岡県、千葉県、石川県で開催し、各地で開催する講習会のカリキュラムに「認知症の理解と認知症を支える地域づくり」及び「認知症疑似体験」を設定し、当該カリキュラムに理解があり、地域で介護事業を営んでいる方や、認知症の地域づくりに理解のあるWAC会員に講師を依頼し、各地域に合った「認知症の理解と認知症を支える地域づくり」を目的とした講習会を開催しました。

今後、神奈川県内各地、東京都内各地、静岡県、栃木県、石川県の開催を予定しています。

<成果と課題>

- ・実際のニーズに対し、取り組みや先駆的なことを聞きたい。
- ・具体的な手法を学びたい。
- ・概念をつかみたい。
- ・先進、最近の動向、公的な方向性を知りたい。
- ・認知症の疑似体験をし、それから何を学ぶか。
- ・福祉事業者が社会的問題となっている中、今後事業者として生き残るにはどうしたらよいか。
- ・問題定義を見出し、問題、課題を話し合いたい。
- ・情報を勉強の場とした会報の発行希望（月500～1,000円程度の会費）
- ・地域により良いサービス創出と先駆けの実績を作りたい。
- ・公民館・会議室・事業者会議室にて認知症問題と地域づくり、小教室開催の推進。
- ・認知症対応早期発見と探索捜査。
- ・認知症対応医療と連携事例の訓練開始。

活動名称	地域で支えよう認知症
活動要旨	認知症の方本人、家族、ボランティアからなるグループが、電話相談、ミニデイなど認知症の方を支える活動を21年続け、行政とも連携し地域の核として活動
応募者	にこにこクラブ 北村 紀子
連絡先	〒253-0002 神奈川県茅ヶ崎市高田 3-13-14

(概要)

1. 立ち上げ

昭和61年5月、ボランティアグループを立ち上げ、第一歩を踏み出しました。「にこにこクラブ」の誕生です。それ以来本日まで21年間活動を続けています。

2. 活動について

1) シンポジウム「みんなで支えよう認知症」

設立20周年を迎え、平成17年11月20日(日)に「にこにこクラブ」主催のシンポジウム「みんなで支えよう認知症」を農協ビル大会議室で開催し世間に一石を投じました。

2) ボランティア大学必修コースでの介護劇の上演

茅ヶ崎市社会福祉協議会と茅ヶ崎ボランティア連絡会が毎年定期的に行うボランティア大学(一般市民を対象とした講座、毎年約100名集客)にて、寸劇による認知症の随伴症状を説明。

3) 日常の活動

- ①看取りをした家族(OB)による支援活動
- ②家族の会一同じ悩みをもつ介護者が集い、情報交換や心の悩みの相談などを本音で語り合う会
- ③ボランティアグループ-家族会と併走、「ミニデイサービス活動(月2回実施)」が主体
- ④電話相談活動 ⑤「徘徊老人のためのSOSネットワーク」支援
- ⑥認知症相談事業(物忘れ相談)支援 ⑦機関紙「にこにこだより」(月1回発行)

3. 地域との関わりあいについて

自分たちだけの領域に固執しては自己満足だけで地域を動かすことはできません。「にこにこクラブ」は認知症を理解し、そのケアを学び、実践しているノウハウがあり、その実績をもって地域福祉に貢献するには、先ずこちらを評価してもらうためのPRも必要であり、市民活動団体や他の施設や関連機関とのネットワークを持つことも必要になります。現在、茅ヶ崎市では地域福祉計画が策定され、「住み慣れた家や地域で自分らしく幸せに暮らしたい」をモットーに活動を展開しています。「にこにこクラブ」は、この行政の計画の中に認知症についての情報の発信源として参加し、「認知症になっても安心して暮らせる地域づくり、まちづくり」の一翼を担っています。

4. まとめ

「にこにこクラブ」は活動を20数年間もやっつけながら、地味で目立つことのない存在であったと思います。しかし、最近では行政からも認知症のことなら「にこにこクラブ」さん、と頼られるようになってきました。これからの活動は、軸足の一つを「地域で支えよう認知症」として、自分たちが長年の経験から学んだ認知症の方および家族へのケアについて、分かりやすく助言できる能力を涵養し、困っている人たちに助言していく。また、行政や市民活動団体などの協力を得ながら発言する機会を多く持ち、認知症の方や家族を地域の人みんなでサポートする運動を広げたい。

また、既存の活動としては、一緒に活動する仲間を増やして個人々人へのサポートの範囲を広げたい。

活動名称	生涯学習町づくり回想法
活動要旨	市の生涯学習講座「回想法」の受講生と近隣の主婦などをスタッフとし、回想法を通じたまちづくりを目指す。認知症高齢者施設へも訪問し、回想法を実施
応募者	コスモスの会・校舎の無い学校 森 依頭
連絡先	〒779-3301 徳島県吉野川市川島町川島 438-1

(概要)

- ・校舎の無い学校は、現代文明社会が失った創造的遊びの文化の復権・復活を期して2007年4月創立。
- ・キャンパスは、町全体。山、川、野原、路地、各種施設等。
- ・校長は、年齢を重ねて遊び心に磨きがかかり、ますます豊かな生活を続けている人。
教員は、一人一芸に秀でた文部科学省無認可のふるさと教員。
用務員は、授業以外の学校経営にかかわる地域アニメーター。
PTAは、各界の豊かな遊び心を保持する専門家。例)上智大学教授(臨床心理士)黒川由紀子氏。
生徒は、年齢、性別、国籍、人種、宗教等、一切不問。
- ・学費は、一切無料。
- ・建学の精神は、自立協同。
- ・学校の教育目標は、創造的遊び人間発達をめざし、幼な子が持っている過去体験の知恵をかみ合わせ、幼老共生の社会を実現する。
- ・一時留学は、自由。寄宿舎は善根宿で三食一泊無料。
- ・今年度の重点目標は、遊びをパスポートとして地域の老人施設のお年寄り(認知症)とハートボランティア活動を開始。

<現在の活動>

- (1) 思い出語り集会(月例会) 一月1回のグループ回想法
- (2) “校舎の無い学校”行事開催 一子どもの遊び文化の伝承活動など
- (3) 月例学習会「遊びって何だろう科」「“VIDEO”を見よう科」
- (4) 子ども遊ばせ隊の派遣
- (5) 校舎の無い学校通信かわら版発行
- (6) 認知症のお年寄りのところへ訪問し、「アクティベイト回想法」を実施
- (7) おもちゃの図書館事業

活動名称	認知症の傾聴ボランティア
活動要旨	認知症高齢者の方などへの傾聴ボランティア活動—良く聴く、目で見ると、全部しっかり受けとめる、気持ちを通わせて、心にゆとりをもって相手の話を聴く
応募者	シニア・傾聴ボランティア 市川 道雄
連絡先	〒370-0015 群馬県高崎市島野町 567

(概要)

近年、社会福祉をとりまく環境は大きく変わり、人々は安全・安心・住み慣れた地域での生活を人と人とのふれあい共に手を携えて支えあい、尊厳を保ちながら、いきいきと生きる、心にゆとりのある生活へとライフスタイルの変化がみられます。現実高齢者の生活を見たときに何か出来ることはないかなと考えていた矢先に県長寿社会づくり財団で傾聴ボランティア養成講座があることを知りました。早速受講の手続きをして受講する。「この講座は、カウンセリングを基本にした傾聴について学び、高齢者認知症、言語障害者失語症の方、各種の障害を持つ人々の悩みや寂しさを抱える人たちのお話相手や相談相手（若い世代・子供の相談も）をするボランティアの養成講座です。この講義では話の聴き方（傾聴スキル）・それによる脳の働き浄化・五感・信頼関係・情緒的一体感の共有・守秘義務等々4日間（講義・ロールプレイング）をうけて終了しました。話を心で受けとめ「良く聴く」の意味がわかるようになりました。“聴くということの大切さを感じ、地域の社会福祉協議会に「傾聴ボランティア」を登録することにしました。そこで介護施設を紹介されました。施設の責任者には「傾聴についての思いを良くお話したところ気持ち良く承諾をしてくれました」。その日から活動を始める（平成17年11月～）施設内に入り高齢者に近づいて話をすることが大変難しかったのです。戸惑いを実感し四苦八苦しながら繰り返し、繰り返し優しさを持って活動を続けました。数ヶ月経ったころから高齢者の方々の表情に少しづつではありますが明るさが見えてきました。不安と緊張の連続で思うように言葉も出ない、傾聴ボランティア活動はこんなやり方でよいのだろうかと思うこともありました。活動を終えて帰途についてからボランティア仲間との電話等で連絡を取り合いながら反省会や勉強会をしていました。勉強会の中でこんなことが出たのです。会話の無いときは「そっと側に寄り添っているだけで温かい心遣いになる」なるほどと思い、ロールプレイングで良く学んだことであることを思い出しました。このことは大きな励みとなり力となったのです。それから数日後のことです。いつものように活動を始めると高齢者の方々も笑顔を見せてくれるようになりました。施設内の雰囲気もよく挨拶をすると反応があります。そのときに一人の高齢者が近づいて来ました。私の方を向いて「あんたさこの前のときにわしの話を良く聴いてくれたので嬉しくてね、楽しみにさあんたを待っていたのさ」と私の所に来て嬉しそうに大きな声で話しかけてくれました。思わず私も高齢者の方の手を優しく握りしめました。すると高齢者の方が泣き出したので、私は握りしめた手が痛いのかと思いきやごめんね痛かったのねと申したのですが高齢者の方が顔を横に振ってこんなことを言ってくれました「わしの話をこんなに良く聴いてくれたのはあんたしかいないよ、この年になってほんとに嬉しかったよ」といって高齢者の方が「俺も自然に泣けてきちゃったのさ」といいながらハンカチで目頭を押さえたのです。真摯に一生懸命に活動することが大切なんだと思いました。何か嬉しさと恥ずかしさが入り混じった感じになりました。高齢者の皆様有難うございます。傾聴は相手の立場に立って、尊重して肯定的に・共感的に受けとめて聴く、温かい心遣い・情緒的一体感の共有を大切に相手の状態を良く観察し、あわてないでゆっくりと活動する。相手の方はいろいろの経験沢山している方です尊厳を大切にしたい。一生懸命に注意深く耳を傾けて心を込めて聴く五感をフル稼働させ聴きたいわ、聴かせてくださいと信頼関係の架け橋を、そっと側に寄り添いお話を優しく聴く活動をしております。

活動名称	ねたきり、認知症の方をかかえる家族の会
活動要旨	ねたきりや認知症の方を介護している家族が集い、定例会や会報を通して情報交換を行う
応募者	小平わかばの会 代表 萩谷 洋子
連絡先	〒187-0024 東京都小平市たかの台 27-1

(概要)**<小平市のあらまし>**

小平市は、東京都23区を中心から西26kmの距離にあります。

人口は約180,000人、65歳以上の単身世帯約5,300世帯(平成18年4月1日)で武蔵野台地や市の中央部を東西に青梅街道が貫き、それに平行して南に五日市街道が、それに沿って玉川上水が流れています。その沿道は樹木に覆われ、市民ばかりか都民の散歩道として親しまれています。東西に長い市内には、JR、私鉄の駅が7駅あります。

<「小平わかばの会」について>

- ・ねたきりや認知症の方を介護している家族、及び会の趣旨に理解を持った住民で構成。
- ・現在、発足24年目で、会員数70名。
- ・都保健所の介護者講座の受講者から生まれ、8年後、行政から介護者の紹介も多くなり、現在は、「小平市社会福祉協議会ボランティア登録団体」へと発展。
- ・介護者の閉じこもり、孤立からの解放をめざしています。
- ・当事者の、話すこと、聴くことを最も大切に歩んでおります。

<会の事業について>

- ・毎月1回、定例会を開催。
- ・例会では会員の近況報告、情報交換などをいたします。看取り後の経験者の介護のノウハウは、心のケアということで、当会の大きな人的資産になっております。
- ・会報を隔月発行。例会や学習会の内容を掲載し、例会に参加できない会員への情報提供といたしております。

<福祉行政への協力>

- ・新設施設への見学及び意見の具申。
- ・活動実践—福祉バザー、共同募金の参加。

<認知症啓蒙活動>

- ・介護福祉、社会福祉専攻の学生の、学外教育の一環として、会員宅訪問、見学の協力をいたしております。
- ・看取り後の独居会員宅の開放により、移動交流会(ミニデイ的)を地域のかたも誘い、行っております。
- ・独居高齢者、老々介護家族へのサポーターとして、シルバー協力員登録を勧めています(小平市の共助制度)。

<今後のテーマ>

- 1) 独居会員宅を拠点とした 地域密着の移動交流会の増強
- 2) かかりつけ医の啓蒙及び往診医のマップづくり

活動名称	認知症メモリーウォーク・千葉
活動要旨	認知症の理解と病気に対する社会への啓蒙活動などを目的として、認知症の専門職と家族の会、行政が協働して日本で初めての「メモリーウォーク」(パレード)を実施
応募者	認知症メモリーウォーク・千葉実行委員会 永島 光枝
連絡先	〒260-0026 千葉県千葉市中央区千葉港4-3 千葉県社会福祉センター3階 認知症の人と家族の会千葉県支部内

(概要)

1. 計画の経緯と実行委員会

急激なスピードで高齢化が進む千葉県では、認知症高齢者も急増することが見込まれることから、地域で助け合い、支えあう体制を構築することが課題です。言わば、待ったなし!の状況に対応するため、千葉県高齢者保健福祉計画推進作業部会の下部に設置された「千葉県認知症対策研究会」から、この「認知症メモリーウォーク・千葉」の開催を千葉県へ提案し、実行を計画しました。実施においては、千葉県認知症対策研究会、千葉県・千葉市の高齢者福祉担当課、認知症の人と家族の会千葉県支部が「認知症メモリーウォーク・千葉」実行委員会を組織して運営にあたりました。

2. 目的と意義

9月21日は「世界アルツハイマーデー」です。諸外国ではこの日を中心にアルツハイマー病の理解と、社会への啓蒙活動の目的で「メモリーウォーク」(パレード)が盛んに行われています。2006年のアルツハイマーデーでは、米国、英国、オランダ、インド、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、台湾、キューバ、ドミニカ、ジャマイカなどで行われましたが、日本ではまだ行われていませんでした。

認知症の理解が地域に行き渡り、偏見などがなくなれば、認知症になっても住みなれたところで暮らし続けられます。認知症の人と家族、一般市民、医療・保健・介護の従事者などが共に歩くことは、社会に対して理解を求めると同時に、閉じこもりがちな認知症の人と家族の心を開くことにもなります。ですから一緒に歩くことが必要なのです!

「認知症でも今までどおり住みなれた千葉で暮らしたい」というアピールをこめて歩きます。

3. テーマ

「認知症でも安心な千葉に!!」

4. 事業内容

- (1) 日時：平成19年9月16日(日) 10:00開会、10:30出発、12:00解散
- (2) 場所(コース)：県庁～中央公園～JR千葉駅手前
- (3) 参加予定者数：300人
- (4) 参加対象者：一般県民、認知症の人とその家族(介護者)、福祉・医療・保健関係者、施設従事者、等
- (5) 参加費：無料(保険料は、主催者負担)、 (6) 雨天決行、荒天中止

5. 主催

認知症メモリーウォーク・千葉実行委員会

(構成団体：千葉県認知症対策研究会、千葉県、千葉市、認知症の人と家族の会千葉県支部)
委員長 助川 未枝保(千葉県認知症対策研究会 会長)

活動名称	古民家を拠点になじみの空間を大切に、認知症の方もそうでない方も、地域の誰もが寄りあえる場所づくりを
活動要旨	空家となっていた古民家を再生して作った介護施設にてデイサービスを開始。施設での様々な行事を通して、認知症高齢者と地域の方々との交流を見守る
応募者	NPO法人 こだま 近藤 けい子
連絡先	〒299-4404 千葉県長生郡睦沢町北山田 172

(概要)

かつてにぎやかな声が聞こえた家が じいちゃんばあちゃんが亡くなった後、ひっそりとして いつの間にか 誰も尋ねなくなって 時間が止まってます 私たちの願いは そんな静まりかえった家に命の灯りを灯すことです まるで眠れる森の美女の館のような 蔦が絡まって身動きできない木々たち 私たちの住む 地域には いろいろな人が暮らしています みんな何かしら 辛いことや困ったことを抱えながら 暮らしています そしてどんな人でも人の支えなしには生きていけないものです 私たちはみんなが自分にできる手助けを行いあうことで みんなが暮らしやすい 地域 できるのではないかと考えます 誰もが集まることのできる場を 誰もがちょっと手伝って と言える場を NPOこだまは作ります

(NPO法人こだまホームページより)

木々に囲まれたこの家と出会った時、この場所には、なんだか木の精＝木霊がひそんでいるように感じました。そして「こだま」がうまれました。みんなの声が響きあうように…

空家となっていた古民家の再生を50代60代が中心となって、取り組みました。そして「介護」という福祉分野での活用によって、古い家に生命が吹き込まれたのです。

なじみの空間づくりは認知症・高齢者介護のキーポイントです。そして、この空間は、障がいのある人にも子どもにとっても、心地良い場所になりました。

地域のだれもが、垣根を作らずに出入りできる場所になることが、私達の目標です。

ふつうの家に来たような自然な気持ちで利用される方々はいっぱいになりました。

自然や環境を守ること…人間らしく生活しつづけること…たとえ障がいを持って、認知症になっても、自分らしい生活、その人らしく生きることを大切にする介護にたくさんの共通項があることを実感できました。

2003 (平成15年) 古民家と出会い借りたい思いを家主に伝えーみんなde NPOを立ち上げ

2004 (平成16年) 改修とデイサービスこだまを1日10人の定員で開始

2005 (平成17年) デイサービス開始から9ヶ月

ー「よっちゃばるこだままつり」250名が集う

2006 (平成18年) 夏・ジンバブエから歌とダンスのジャナグル来日。秋に「こだままつり」沖縄コンサートと古民家シンポジウム。地域の人々が集う

2007年 (平成19年) 「こだまdeアート」0歳から97歳まで参加。アートを通して心が解放される体験。懐かしい物たちに囲まれ安心感が生まれる。「思い出博物館」作り開始。

「家族の会」を講師にサポーター養成講座実施。

活動名称	独居老人の認知症を支えあう地域と地域包括支援センターのかかわり
活動要旨	地域の認知症の独居老人が倒れたことをきっかけに、行政・地域包括支援センター・自治会・民生委員・地域のボランティアが一丸となって認知症高齢者を支援
応募者	小田原市第五地区地域包括支援センター 脇 正宏、椎野 京子、八十島 弘子、田口 由美、小田原市役所 鈴木 富子
連絡先	〒250-0207 神奈川県小田原市曾我光海2番1

(概要)

小田原市の高齢化率は全国平均とほぼ同等に推移していますが、今回事例提出した地域は、自治会単位では高齢化率45.8%、高齢夫婦世帯の割合14.9%、高齢単身世帯の割合34.7%という高い割合となっています。この自治会は全て集合住宅で構成されています。集合住宅ということで古くから住んでいる方も多いのですが、反面入れ替わりもあり、高齢になってから転居して来る方も多いため、近所付き合いなどの地域との関わりが親密でない方も多く、問題が発生して地域包括支援センターに相談が来る頃には認知症が進行していることも少なくありません。

今回の事例は、87歳の独居男性が食べるものがなく自宅前で倒れてしまったことから発覚しました。集合住宅で周りとの関わりも少ないので、地域住民も詳しいことを知らず、情報収集に時間がかかりました。又、認知症の進行に伴い日付の感覚が鈍くなり、年金の受給日以前に銀行へ行き入金されていないことで、年金不払い問題と混同して食べるものが買えなくなってしまったと思いついでいることが分かりました。さらに親族の連絡先も全く分からなかったため、暫くの間は地域住民の好意で、食事・掃除・入浴・洗濯の支援がありましたが、関わりを重ねることで地域住民の好意の支えに甘えてしまい、お金を出しての介護サービスに必要性を感じなかったため、すぐには配食サービスしか導入できず、食事面では地域住民の精神的な負担軽減はできましたが、新たにボランティアでの支援の必要性がいつまで続くのかという不安が生じて来ました。次のサービス導入へ向けて本人が納得し始めた相談受付から10日後、主治医意見書作成のため受診したところ、検査の必要や、地域の体制整備に時間が必要であろうという主治医やソーシャルワーカーの配慮もあり入院となりました。3週間ほどの入院でしたが、その間、疎遠だった親族と連絡がとれ、地域住民の疲れもなくなり、要介護認定の結果も出て、退院直後からスムーズに生活ができる体制整備の時間が取れました。この報告をまとめているのは相談受付からまだ1ヶ月半ですが、本人は地域の方の見守りや訪問介護によるサービスを受け自宅での生活を続けています。

相談受付からあまり時間が経っておらず、本人や地域に対して今後どのようなようにしていかうかと検討中です。急な変化が見えて来ると誰しも困惑してしまいますので、地域包括支援センターやケアマネージャーが早い段階で関わるができるように、少しの変化に気付き、認知症の早期発見ができる様な環境作りが必要だと思います。現在、対象者の把握方法や見守り体制については、社会福祉協議会・自治会・民生委員がそれぞれ独自に行い、必要に応じて地域包括支援センターに相談がある状況です。それぞれの情報が一元的になれば、組織的な見守りができ、有意義なものになると思いますが、互いに個人情報の取り扱いに慎重でなかなか情報が交換されていません。その統一作業を地域ごと個別に行うのではなく、市の方針として一斉にできるように市に働きかけていく必要があると思います。また、認知症の早期発見の目を養う点で、地域住民対象の認知症教室を開催し、家族・地域住民が早い段階で主治医等に相談できるようにしていきたいと考えております。

活動名称	沼田市認知症にやさしい地域づくりネットワーク
活動要旨	地域社会において一人暮らし高齢者や認知症高齢者の自立生活を支えるべく、市内の関係機関や福祉団体、地域のFM局や商店会が協力しネットワークを発足、模擬徘徊訓練などを実施
応募者	医療法人 大誠会 内田病院 横坂 稔
連絡先	〒378-0005 群馬県沼田市久屋原町 345 番 1

(概 要)

利根沼田地方では、多くの高齢者が在宅で生活しています。認知症高齢者が徘徊により所在不明となってしまうケースが沼田警察署内でも年々増え続け、平成17年では10件、平成18年では28件と確実に増えつつあります。

私たちの住む利根沼田地域では認知症高齢者が徘徊により所在不明になると、生命に危険が及ぶ可能性があり一刻を争います。なぜなら沼田市のような地方都市では、街の中を徘徊するよりも、人の眼の届かない畑・谷川・山林等に迷い込んでしまうケースがとても多く、一度迷い込むと発見が難しく捜索がとて困難になるためです。

特に11月から5月までの冬の期間は、所在不明者を捜すことができないと死に至るケースがおきてきます。現実に数年前に起きた事例では、12月下旬、一人の認知症高齢者（女性）が夕刻にいなくなり、家族全員で家の周りを捜しましたが見つからず、家族は「少しすれば帰ってくる」「なるべく大さわぎにたくない」との気持ちから、通報が翌日になってしまいました。その後、村の消防団・青年団・部落の人々、総出で捜索したそうですが見つからず、3日後に捜索は打ち切られました。残念ながらこの方は翌年4月、雪が解けたことにより亡くなって発見されました。

このように認知症高齢者にはとても厳しい環境ですが、「認知症にやさしい地域づくりネットワーク」が設立され、利根沼田住民の所在者の発見には一定の成果をあげています。このネットワークは平成16年7月、沼田市、沼田市社会福祉協議会、沼田市在宅介護支援センター協議会が中心となって「高齢者支援ネットワーク事業」としてスタートし、平成17年5月「認知症にやさしい地域づくりネットワーク」として、市内の関係機関や福祉団体・関係者、地域のFM局や商店会などの多彩な団体の協力を得、発会しました。このネットワークは「地域社会において独居高齢者や認知症高齢者の自立生活を支えるためには、幅広い分野における支援が必要であるほか、近隣の住民の見守り活動が重要。このため、市内の関係機関や福祉団体・関係者、また多彩な協力団体が参画し、地域社会において生活している支援を必要とする方々に対し、きめ細かい対応と継続的なアフターケアを提供し、高齢者が住み慣れた地域で安心して生活を営むことを支援する」という目的で発足しました。また、同会が主催となりネットワークの重要性を周知することだけでなく、認知症に対する理解を広く市民の方々に深めてもらうため、平成17年9月に講演会・シンポジウムも開催しています。

今回、このネットワークが十分機能しているのか、どのようなところに問題点が潜んでいるのかを検証するため、平成19年5月27日（日）、模擬徘徊訓練を行いました。

活動名称	もりたやproject
活動要旨	グループホームの入居者が、いつも通うスーパー「もりたや」の店員さんを食事会にご招待する「プロジェクト」
応募者	社会福祉法人 櫻灯会 グループホームさくらの家 東矢口 管理者：奥村友保 常務理事：櫻井真里（グループホームさくらの家東矢口代表）
連絡先	〒146-0094 東京都大田区東矢口 2-6-24

（概要）

地域に根ざした認知症グループホームを目指して開設した櫻灯会の「さくらの家 東矢口」は、東京都大田区から土地をお借りして平成19年4月1日にオープンした新しいホームである。当初から地域密着型グループホームとしてスタートしているため、町会活動への参加や近くの商店街へのお買い物、家族・職員を交えての地域行事への参加など、認知症高齢者が地域と共に生きることを積極的に後押ししてきた。幸いなことに、この地域はグループホームの入居者が外出し、地域の住民として社会性を持って生きていくことにとっても寛大であった。地域住民の協力、町会長さんのご理解などさまざまな人々の助けを借りて、グループホーム入居者はとても安定した生活をしている。仕事帰りの息子が、おかあさんのところに枝豆とビールを持って遊びに来て、一日の話と枝豆を着にビールを一杯ググッと飲んで、いい気分になって家族の下に帰る、そんなグループホームになってきた。おかあさんは息子の顔は毎日見られるし、好きなビールは息子が買って来てくれるし、家族との関係は以前よりはるかに好転した。暗い顔して愚痴を言うこともなくなり、明るい笑い声が多くなった。同時に世話好き・社交的だった昔の顔が戻ってきたのか、また「作った得意料理をだれかに食べてもらいたい」という気持ちからか、「下の人（他ユニット）にも作ってあげたいの」との発言が聞かれるようになった。一方、オープンより利用している近くのスーパーでは、当初買い物の場所が分らなかつたり、また狭いため、シルバーカーで通りにくく困っていた状態から、現在では買い物に行ったときには大きな声で挨拶してくれたり、買い物の場所が分らずに困っていると、声をかけて場所を教えてくれる、また狭ければ物をどけて通りやすくしてくれるなど、お店の方がグループホーム入居者に対し配慮してくれるようになった。

そこで今回私たちが提案するのは、これらの商店街との人間関係を「お店の人」と「お客」の関係から、同じ地域に生きる「人」と「人」の関係に変化させる試みである。

「じゃあ、いつもお世話になっているから、スーパーの人でも招待しようか」という新人職員の先入観のない言葉により、入居者の「うん、やってみよう」という声があがり、自分たちの家に招き入れて、ご馳走をすることによって入居者に更なる自信を持っていただく。認知症ケアはこうしたきっかけが役割を持てる生活を支援する重要な鍵であることを認識した。そしてグループホームの入居者が、普段自分たちが買い物をしたり、お話をしたりしている相手を、単に外に出て行って挨拶する関係から相互の家に行ったり来たりする関係に進展させることが、認知症と共に生きる社会を築く第一歩になるだろうと考えた。図らずも自分の口からそのような積極的な発言があった入居者をキーとして、私たちはお呼ばれしたりされたりする関係を地域社会に住む人々と構築してみようと考えた。今回ご紹介するのはそのプロセスであり、その波及効果の一部である。

活動名称	認知症フレンドシップクラブ
活動要旨	長年暮らしてきた地域での隣人（友人）として認知症の方を支援すべく、余暇活動の支援や、安心して利用できる店舗「認知症フレンドシップストアー」認定活動を展開
応募者	認知症フレンドシップクラブ 代表 井出 訓
連絡先	〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢 1757 北海道医療大学内

（概要）

認知症フレンドシップクラブは、平成19年3月に北海道札幌で立ち上がった非営利組織です。認知症を患いながら暮らす方々、そのご家族や介護者の方々が、安心して暮らせる町づくりを進めると共に、生きる上での勇氣と豊かさを提供することを目指し、長年暮らしてきた地域で安心して過ごせるよう応援したいと願う人々が、彼らの隣人（友人）として自由に集い活動に加われる、そんなフレンドシップを基調とする展開を願い活動続ける団体です。また、社会における非営利組織としてのあり方を自覚し、認知症に対する社会貢献の「場」を提供する存在となること、それをもって認知症を患う方々と介護にあたる方々の生活の質を高め、豊かな社会の創造に資する存在となることを目標としています。

現在、認知症フレンドシップクラブでは2つの活動を行っています。そのひとつは、認知症（若年性を含む）を患う方々の余暇活動を支援するDFサポーター活動です。認知症を患うことで、今まで楽しみとしてきた余暇活動が続けられなくなった人たちに、そうした活動が続けられるよう、認知症に関する知識とスキルをもった、いわばプロの友人であるサポーターを養成するものです。

認知症フレンドシップクラブでは、DFサポーター養成講座の開催と、認知症の方々やご家族、介護者からの依頼の受付、サポーターとのペアリング、DFサポーターによる実際の活動支援の提供を行っています。

もうひとつの活動は、認知症フレンドシップストアーと呼ばれる活動です。この活動は、私たちが暮らす地域にある店舗や企業、オフィスなどのすべてを、認知症バリアフリーに変えて行きたいという願いから始まりました。例えば、ご家族の方が認知症をわずらう方々と外食をしようと考えたとき、レストランでいやな顔をされないだろうかなど、心配することも少なくはないと思います。

しかし、地域にあるレストランや店舗が「大丈夫です」「ぜひいらしてください」という意思表示をすれば、家族や介護者の方々も、安心してその店舗を利用することができると思うのです。そこで、認知症フレンドシップクラブでは、認知症バリアフリーの店舗であると地域の中で声をあげてくださる店舗や企業を募り、その方々を対象に認知症に関する勉強会（認知症サポーター養成講座）を行い、その履修者が働く店舗や企業などを認知症フレンドシップストアーとして認定する活動を行っています。認知症フレンドシップストアーとして地域の中で意思表示をしてくださる店舗や企業に関しては、認知症フレンドシップクラブのホームページ上に宣伝や「あなたの街のフレンドシップストアーマップ」などを載せ、より多くの方が認知症バリアフリーの店舗に関して知っていただくサポートをします。また認知症フレンドシップストアーでは、認知症フレンドシップクラブのメンバーが利用する場合の特典やサービスが得られるようなシステムを作っています。

認知症フレンドシップクラブでは、地域に暮らす人が自分にできることを行いながらお互いを支えあい、その中で地域にとともに暮らす認知症の方々を支援していくシステムを、町づくりの活動として根づかせていきたいと願っています。

活動名称	認知症及び認知症予防の啓発活動
活動要旨	看護大学の先生を講師に招いての認知症の勉強会及びそれを活かしたグループホーム訪問等のボランティア活動
応募者	いちご会 会長 多々見 邦次
連絡先	〒929-1214 石川県かほく市内高松ケ 50-1

(概要)

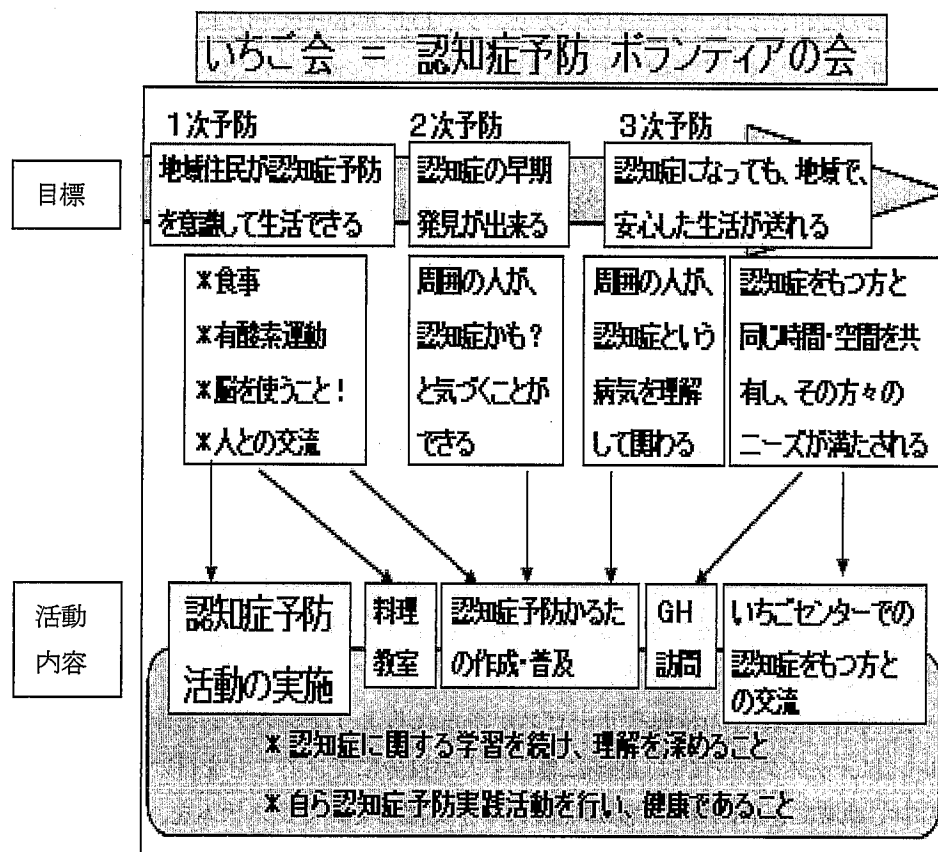
石川県かほく市にある認知症予防ボランティアの会「いちご会」は、平成15年石川県立看護大学附属地域ケア総合センターが高齢学の調査研究のために集めたボランティアグループでしたが、平成19年4月かほく市社会福祉協議会に認知症及び認知症予防の普及啓発グループとしてボランティア登録をしました。

主な活動は、石川県立看護大学の先生方を講師として月1回の勉強会を開催し勉強をしています。今年度は、太田正博さんの「マイウエイ」の本を教科書とし、少しずつみんなで読み進めてきました。その定例会も46回を迎えることができましたことは、看護大学の先生方のリードのお陰です。

その定例会では、今年4月からのボランティア登録をきっかけに、積極的に出前活動をしていこうと話合っています。

活動の理念は定例会で学んだことや皆で話し合っただけで決めたことをスケジュール化し、いちごセンターや出前活動をすることを基本としています。

一連の流れは下の図のとおりです。一番上の四角が目標で、一番下の四角が実際の活動内容です。



活動名称	住み慣れた町での生活の継続
活動要旨	グループホームの入居者が、近くにある昔からなじみの喫茶店へ再び通り店主と交流することによって、施設での生活のストレス緩和、自信をよみがえらせる
応募者	社会福祉法人 恩賜財団 愛知県同胞援護会 グループホーム春緑苑 副主任介護士 丹羽 宏
連絡先	〒487-0031 愛知県春日井市廻間町703番地の1

(概要)

○グループホーム春緑苑がある地域の紹介

当施設は愛知県尾張西部の春日井市東部の廻間町にある。春日井市は人口約30万人で、廻間町は田園風景や森や林が美しい緑豊かな町である。施設周辺には当施設が所属する法人の施設や他の法人施設、高校、警察学校などの施設はあるが、民家は数軒だけでスーパーなどの店はない。車で10分程度の高蔵寺ニュータウンには、店や銀行、病院などがある。

○活動内容

入居者Aさんは、入居当初、家族に対して強い不信感と怒りを表に出し、他の利用者に対して悪影響を及ぼした。「どうして俺はこんなところにいるんだ」「息子は何もしてくれない」「俺はぼけていない、頭はしっかりしている」などの発言があった。しかし、「ここはいつでもコーヒーが飲めるからいい。前の病院は飲ましてくれない」など今の生活を自分で納得しようとする言動もみられてきた。気分のいいときは、「俺はなんでもできるから、手伝いますよ」と協力的な発言もあったが、他に話し相手がないため、食事とおやつ以外は居室にこもりテレビを見てすごすことが多かった。これは、在宅での生活と特に変わらない生活リズムと考えられたが一人で室内にこもることで、かつてに思い込みが進み暴言がでる傾向にあった。会話の中で「俺は毎朝この近くの喫茶店にいていた。その喫茶店ではコーヒーを2杯飲んで、俺だけ特別にバナナを出してくれていた」と自慢げに話す姿がみられた。ストレス解消および在宅での生活の継続のため、定期的にその喫茶店に行くことにした。喫茶店ではよく話すし、店主に話しかけられ生き生きとする姿が見られることが多い。家族の面会は入院時同様なためイライラも募っていったが、平成18年7月に入所(平成17年8月)以来初めて長男が面会に来た。面会後は多少ストレスが解消される。長男も直接Aさんと会い、Aさんの態度が穏やかだったため、以後定期的に面会に来てくれるようになった。

○活動の成果

在宅生活での楽しみであったなじみの喫茶店に通うことにより、本人が施設での生活にはりあいがもてるようになってきている。以前は参加しなかった施設の合同行事などにも参加がみられるようになった。長男の面会も継続的にあるため、本人もここでの生活に納得してきている。Aさんのストレス緩和のために実施している「なじみの喫茶店に行く」ということは、在宅生活で一番の楽しみであったことの継続として、本人やまわりの利用者により影響をあたえていると実感される。そして在宅時より多少認知症が進行しているAさんに対して、会話中におかしな言動が見られたときでも、その店の人たちが以前とかわらない接客をしてくれ、常連客としての扱いを引き続きしていていることが、本人の自信とストレス緩和の一番の利用となっている。「なじみの店」にいくという行動が、様々な理由で入居された利用者の住み慣れた町での生活につながることを痛感させられた。

活動名称	能美市学官連携プロジェクト
活動要旨	認知症・介護予防事業の方向性を探り、子どもを中心に認知症の人を取り巻くコミュニティ創造を進め、世代間コミュニケーション・プロジェクトを展開する。
応募者	共生ケア研究グループ 山崎 竜二
連絡先	〒923-1211 石川県能見市旭台1-8-7-504

(概要)

<背景・課題>

平成18年8月より市役所と大学院の連携協定締結に基づき市から認知症高齢者の予防事業・支援方を整備する課題提示を受け検討を開始。認知症の方も社会参加できる仕組みと、地域の人々に身近な理解を促すモデルの構築に取り組んできた。

<目的>

1. 高齢者の認知・情動・意欲など精神機能に訴え、残存能力・潜在能力を引き出す
2. 高齢者の力を有効活用して子どもへの教育との相乗効果をもたらす
3. 子ども・保護者・近隣住民との接点から、認知症を抱える人の身近な理解を促す

<対象>

1. 介護予防教室に通う特定高齢者
2. 特定高齢者に限定されない市内の一般高齢者
3. 市内施設在住の認知症高齢者

<内容>

1. 市内各地域の予防教室における回想法・共生ケアの実施（二次予防の枠組み）

特定高齢者を対象にした教室では平成18年12月より回想法を導入し、高齢者の意欲向上を図る。未就学児と保護者、そして教室近隣の保育園との協力により共生ケアを実施し、童謡唱歌の披露などから高齢者が育児支援のサポーターとして力を発揮できる環境を整備。子どもから保護者のサークルへと通じる三世代モデルのコミュニティ形成のなかで認知症の身近な理解を促す。

2. モデル地区の小学校区における回想法・共生ケアの実施（一次・三次予防の枠組み）

退職後自宅に閉じこもりがちな一般高齢者が活躍できる環境を整備。一般高齢者が徒歩でも通える小学校区にて、民生委員の協力を得て参加を募った。また小学生と認知症高齢者との世代間回想法プロジェクトを小学校の総合学習の時間を利用して実施。平成18年12月一般高齢者と小学4年児童が「まちの物語」の劇創作を行った。事前に児童は認知症の人との接し方を学び、交流で理解を深め子ども認知症サポーターとなった。創作劇の映像は特定高齢者の通う教室で利用可能。

<成果と展望>

小学校の事前学習で、児童は認知症の特性を理解していたが、恐れや哀れみを記述。創作劇を用いた世代間回想法では、どのように回想が児童の持つ認知症高齢者の観念に作用するかを探るため、前後の高齢者像についてSD法の結果を分析した。参加児童34名の統計の結果、児童は認知症の人に対し、高齢者像を賢く生産的であると肯定的に捉えるように変化した。

回想法は認知症の人に対する偏見を防ぐ点で有効。創作過程に認知症高齢者が参加可能なプログラムの改良を行い、継続発展のため市社協によるプロジェクト事業化、自治組織の活用を検討。事前学習の論点を深め「老いる・生きる」をテーマに人の脆さや弱さにも焦点を当て、高齢者の参画した授業参観等で健常者を基準に認知症の人を欠如態と捉える見方を問い直す実践哲学に取り組む。

活動名称	認知症の要介護者の介護に大きな力を発揮する「えがおの会」
活動要旨	要介護者を抱える家族が定例会や交流会を通して互いの思いを共有し、それを介護に活かしたり、地域に認知症への理解を深めようとするボランティア活動
応募者	阿倍野介護家族の会・えがおの会 横尾 禮子
連絡先	〒545-0022 大阪市阿倍野区播磨町1-4-2

(概要)

1. 目的

要介護者を抱える家族などが、互いの交流を通して支え合い、介護の知恵や知識を高めることで本人とともに暮すことが楽になり、また広く地域社会に認知症や認知症罹患の方・ケアする立場の人に対する理解を深めることを目的とする。

2. 活動

- ①総会を4月に開催する。
- ②交流会を毎月第3水曜日午後1時から3時まで開催。精神保健福祉士が年に3回、相談員は毎回できる限り同席する。内容は連絡事項の後、要介護者の介護状況や困惑などを語る。次に癒しタイムを持つ。会員が笑い話・えほんの朗読や手品・盆踊り・全員で合唱などリラックスして終了。
- ③8・12月は会場を変えて会食を共にして楽しむ。 ④11月は研修や見学会を実施する。
- ⑤家族の会日より「えがお」を年に10回発行する。平成19年10月号は115号である。
- ⑥その他目的達成に必要な活動を行う。

3. 会員

介護している家族・看取りを終えた会員、その他本会の目的に賛同する者とする。平成19年度の会員数は42名である。

4. 世話人

代表・副代表・会計・世話人若干名を置く。世話人の任期は1年であるが、再任は可とする。

5. 事務局

阿倍野区在宅サービスセンターに置く。

住所：大阪市阿倍野区帝塚山1-3-8

6. 会費等

本会の運営は、会費・寄付金・その他の収入で賄い、会費は1人年間2千円とする。

7. 活動の成果

定例会は月に1度開き、自分の介護上の悩みを聞いてもらうことで心がどれほど軽くなることか、他の人の話を聞いて、ああ、自分よりもっとハードな介護体験をなさっている方が多いと感心し、また新たな気持ちで介護に取り組める方がいる。初めての参加者は泣きながらの報告になる方も多いが、体験者がうまくカバーして、例会以外でも聞き手になる。

電話・メールなどを利用して支えとなっている。

会日より「えがお」(B4版裏表)は10月号で115号である。地域の特別養護老人ホーム・デイセンター・保健福祉センター・区在宅センター物忘れ外来医師などで配布。1号から105号をA4版189頁に製本し、400部作成した。会員は希望数を取り、残りは講演会で配布。

認知症が理解され「わたし」が罹患しても安心できる町にするため、「介護カルタ」を作成。

活動名称	“ひなたぼっこ（INA）い〜なあ〜”
活動要旨	行政・民生委員・ケアマネ・社会福祉協議会などが協力して、自分・友人・夫・親がアルツハイマーになっても安心して暮らし続けられる町づくりを目指し、認知症への正しい理解をわかちあう
応募者	介護支援専門員 中岡 俊子
連絡先	〒057-0022 北海道浦河郡浦河町昌平町3-11 日本居宅介護支援事業所2階

（概要）

私は一ケアマネージャーですが、自分の利用者に促われず、どの人もこの住み慣れた町で（息子や娘が遠くに居ても）夫や妻と二人で、独居になっても、特にデイサービスやショートステイを利用しなくても、好きな時に起き、食べ、歩き回り顔見知りの所へ寄れる、そんな町ができればいいと思います。自分が若年性アルツハイマーや少し年をとり、認知症になっても、この町で安心して住み続けられるようにしたい。

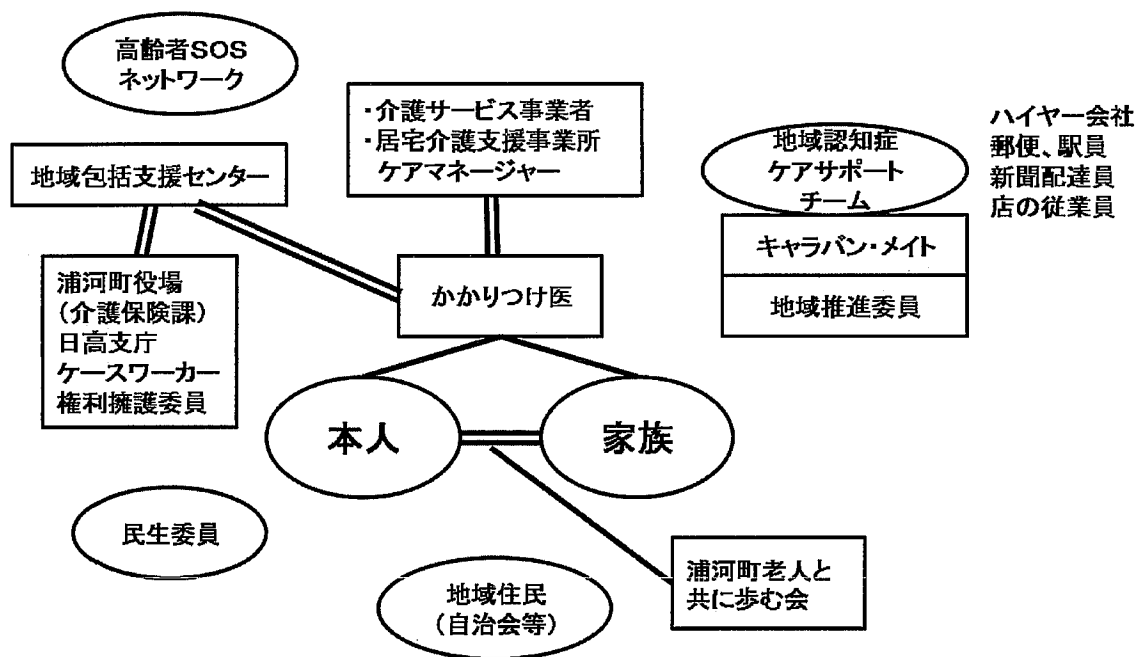
施設入所はお金がかかるし、今の有様では入りたくない。そんな思いをなくす様に、介護関係者だけでなく地域の人（勿論、家族等）が、認知症への正しい理解をしてもらおう。

まずは、介護関係者の学習会（自己研鑽も含む）自分が研修した「認知症地域推進研修」を周囲に語り、仲間作りをする。町の包括支援センターへも、協力（出来たらイニシアチブ）を要請。

民生委員で、キャラバンメイトの方と協力してメイトを増やす。

先生（精神科）を巻き込み、町内でのいろいろなサポート隊を作り、点と点を線にしていく。

浦河町の認知症早期発見・診断・支援
サービスイメージ図



活動名称	多職種で認知症ケア研究を推進する「ぐんま認知症アカデミー」の取り組み
活動要旨	認知症研究者・保健師・地域包括スタッフ・ケアマネ・家族会などが連携して、認知症の予防から支援にわたる研修会などの認知症の正しい理解を深めていく活動
応募者	ぐんま認知症アカデミー 代表幹事 山口晴康
連絡先	〒371-8514 群馬県前橋市昭和町 3-39-15 群馬大学医学部保健学科地域リハPJ室内

(概要)

群馬県において「認知症の正しい知識」と「認知症のケア研究」を普及させようと、医療、介護、家族会、行政、研究職などの多職種が集まり、平成17年にぐんま認知症アカデミーを立ち上げた。

理念 群馬県内の認知症に関わる研究者やケアの実践に関わる者、行政の保健師や地域包括のスタッフ、ケアマネ、家族会などが連携して、認知症の先端の知識を学び、意見を交換し、また、自分たちの研究を発表しあえる場を作ることをめざしている。

活動内容 認知症の予防～支援に関することとし、①春の研修会では教育的な講演、②秋の研究発表会では公募演題＋講演と、年2回の集会を実施。認知症の講演会情報を随時メール配信。

経過 平成18年5月の第1回春の研修会(140名参加)のテーマは、評価法や統計手法などの研究方法と認知症ケアマッピング。平成18年11月の第1回秋の研究発表会(220名参加)は、公募9演題の報告と野村豊子氏による「回想法」の特別講演を実施。平成19年5月の第2回春の研修会(240名参加)のテーマは「軽度認知障害(MCI)」、「群馬県の認知症早期発見システム」、「国際生活機能分類(ICF)に基づく認知症ケア」。本年秋の第2回研究発表会では公募9演題と今井幸充氏による「認知症ケアの標準化とスキルアップを目指して」の講演を予定。

運営費用 各研修会での一人500～1,000円の参加費収入のみで運営を実現。

年会費無料のノウハウ 集客の低コスト化。①会員への連絡方法をメールとfaxに限定、メール登録を推奨。②各方面の協力—県健康福祉部局、県社会福祉協議会、ケアマネ実務者研修などの研修会など、幹事の所属する職域団体の広報システムを利用。③ホームページは無料のEasy Orahooを利用して運営(<http://happytown.orahoo.com/ninchi/>)。④講演は幹事によるボランティア。

参加者の満足度 アンケートを毎回実施。本年の第2回春の研修会(138名回答)では、介護福祉関係者4割、ケアマネ3割、看護職2割、その他1割の参加。経験年数は1～5年位が多く、年代は20～50代まで多様。演題評価は「よかった」が8割超、「現場に役立つ」が7割超と好評。

活動の意義と今後の展望 1)当アカデミーの特色は、多職種が集合し、大学の教育・研究者～介護現場での実践者～家族会まで多様な人間の集合体であること。研究会では様々な視点からの意見や議論ができ、認知症の正しい理解が深まる。今後はこうした多様性と横の連携をさらに発展させたい。2)日曜日の研究会はなかなか休みを取れない介護職も参加しやすい。認知症ケア専門士の研修単位にも認定され、認知症ケア専門士にとっては資格の維持のために遠方に出向く負担を軽減でき好評。3)研究発表会では毎年9演題ほどの研究発表を公募。その中から学問的に優秀な発表と、現場で努力している発表の2題に奨励賞を与え、研究活動を奨励することを本年秋から始める。

おわりに こうした活動が全国各地で広まることを期待し、本年の認知症ケア学会で活動状況や活動のノウハウを報告。意欲さえあれば、お金が無くても活動できる。大切なのは、ネットワークとフットワークとチョット無謀な勇気。

活動名称	介護事業者による「地域の『人』づくり『場』づくり」の試み
活動要旨	民生委員等への各種資料の配布やボランティア参加依頼、公民館等で認知症の講演会等を実施など、利用者本位のサービスを目指し、地域のかけ橋として活動
応募者	株式会社 てるてるぼうず 相談役 阿部 孝
連絡先	〒944-0008 新潟県妙高市柳井田町 4-12-14

(概要)

介護事業者の提供するサービスが、真に利用者本位のものであるためには、他の医療・介護サービスとの連携に加えて、地域、利用者本人、家族との相互理解が欠かせない。

株式会社てるてるぼうずは、地域のかけ橋となり共働性を高めるとの理念の下で「地域の『人』づくり『場』づくり」の試みとして、次のような取り組みを行っている。

1. 地域の民生委員等への社内報や各種資料の配布

概ね毎月1回、事業者の社内報と事業者で作成した介護や福祉についての基本的な知識や技術、全国の取組事例などに関する勉強資料を、新井地区及び新井南部地区を中心に、民生委員の皆さん及び地区の区長等の皆さん（オピニオン・リーダー）に戸別配布している（2005年頃から、各60名程度、合計100数十名に配布）。

配布先の皆さんには結構好評で、この活動を通じて介護や福祉、あるいは認知症の正しい理解に関心を持ってくださった方も多い。

2. 地域の民生委員等のボランティア参加

2006年頃からは、上記①の取り組みを通じて関心を持ってくださった民生委員等の方々の有志で、チームをつくりローテーションを組んで、月2回程度、1回当たり概ね2名程度で、ボランティアに来ていただけるようになった。この活動は、事業所の円滑なサービス提供やサービスの質の向上に貢献していただいているのみならず、ボランティア活動での実践経験が各地域で（しかも各地域のオピニオン・リーダーから）語られることを通じて、地域社会における介護や福祉への理解、あるいは認知症の正しい理解にも大きく貢献していると言えるだろう。

まず民生委員等地域のオピニオン・リーダーを対象にして上記1.のような取り組みを始めたことが、その後の活動の広がりや地域レベルでの気運の盛り上がりにつながったようにも思われる。

3. 地域の公民館や退職者の集会等での認知症や介護技術の講演等の実施

様々な形で地域との交流に取り組んでいると、地域の各種団体等（JAのボランティア組織、女性の会、退職者の会など）において、認知症や介護についての講演や、地域づくり、ボランティア、介護現場に学ぶ生き方など、より良い高齢社会を考えることに資する講演を行う機会が増えてきた。

また、地域の希望に対応して、事業所のスタッフが地域の人々に車椅子での走行体験を提供するなど、介護現場の状況や介護技術等を出前で講義する機会も増えてきている。介護保険制度の仕組みについて講座を開いて欲しいという要望も多く、適宜対応している。

今後は、引き続きこれらの活動を着実に進めて定着を図り、地域社会の認知症や介護への理解の底上げにつながることを目指している。

活動名称	利用者とスタッフとの協働による地域との交流
活動要旨	近くの知的障害者施設や学校、地域のお祭りに利用者が参加するなど、地域と連携し交流の場をつくる
応募者	グループホーム七福神 管理者 八木澤 時子
連絡先	〒944-0036 新潟県妙高市末広町 1124 番地

(概要)

グループホーム七福神では、開設の準備段階から地域との連携を大切にしたいと思い、次のように、事業者と地域住民等との対話を重ねてきた。

<知的障害者施設「にしき園」との交流・ボランティア活動>

当施設の利用者が（徘徊の後）近くにある「にしき園」に迷い込んだことから、にしき園との交流が始まった。現在、同園の利用者がボランティアとして当施設の運営に参加してくださっている。

<小学校や中学校との交流>

利用者にとって子どもたちとの交流は活力の源となるように思われるし、子どもたちにとっても人生の先輩たちとの交流は得るものが大きいのではないかと思われる。当施設のある地域（や近隣地域）には学校など文教・文化施設が多いという環境から、自然に小学校や中学校の音楽会や運動会に招待していただくようになった。

<地域の人々との交流>

他の多くの施設等と同様、当施設でも、地域のお祭り等に参加するとともに、当施設における交流会等へ地域の人々に参加していただいている。地域とのつながりを大切に考え、地域での開設前の説明会をなるべく丁寧に行ってきたので、地域との交流活動は比較的スムーズに始められた。最近では、当施設のある地域だけでなく、近隣他地域からも声がかかり各種イベントに参加している。

夏の間は、当施設内の広場は子どもたちの朝のラジオ体操の広場となっている。毎朝6時半に、地域の子どもたち、保護者、当施設の利用者、スタッフが揃って体操するのは気持ちがいいものだ。

当施設のある地域は比較的年齢構成の若い地域で、当施設の利用者も、ほとんどはこの地域で生まれ育った方々ではない。当施設が地域の活動に自然な形で溶け込んでいることで、当施設の利用を始めた人々が、地域住民の一人として地域の敬老会や介護予防教室に参加しやすくなっている。

<地域の防災組織からのサポートとスタッフの地域貢献>

当施設でも地域の一員として地域の防災組織に参加している。一方で、当施設では特に徘徊傾向のある利用者にはGPSをもっている（お守り袋に入れてお守りとして身に付けていただけるようになった）、徘徊で行方が分からなくなって困ったことはそんなにはないが、何かあった場合には地域の町内会組織が中心になって支援体制を組んでくださっている。

当施設のスタッフが地域の公園の清掃・修景活動に参加するほか、地域の人々を対象に認知症に関する勉強会のスタッフとして協力させていただいている。地域の人々の（本来誰にでも身近なものである）介護や認知症についての理解がますます深まっていくことを感じ、嬉しく思っている。

最近では、当施設の家菜園に地域の人々が野菜の苗を持ってこられ植え付けをしてくださったり、当施設で収穫した野菜をわずかではあるけれども心が伝わるように地域の人々におすそわけしたりというように、日常的で自然な交流が根づきつつある。

活動名称	離れて暮らす親のケアを考える会
活動要旨	親と離れて暮らす子世代の「遠距離介護」を、セミナー・会報・メール・ウェブサイト等を通じた情報交換などで支援する
応募者	NPO法人 パオッコ 理事長 太田 差恵子
連絡先	〒113-0033 東京都文京区本郷 3-37-8 本郷春木町ビル 9 階インキュベーションハウス内

(概要)

核家族化が一層進む中で、65歳以上の高齢者の子どもとの同居率は半数以下と低下しています。親世代はできることなら生涯、住み慣れた家で住まい続けたいと望み、子世代も仕事や子どもの教育などを考えると、故郷に戻ることは容易ではありません。親に心身の衰えが生じてきた場合、通いの介護を選択する親子は増加の一途をたどっています。

平成8年、離れて暮らす老親を気遣う子世代仲間が体験や悩みを共有する場として、任意団体離れて暮らす親のケアを考える会パオッコを設立しました。親の心身に衰えが生じても「同居」ではなく別居を続け、通いながら親の暮らしを応援する子世代。「ひとりの経験はきっとみんなの役に立つ」という理念のもと、情報や体験を共有する活動を行ってきました。現在の会員数はおよそ250人。首都圏を中心に全国に在住。会報で情報交換を行うと共に、遠距離介護セミナー、遠距離介護の実態調査・研究を実施、交通機関各社への「介護帰省割引」実施の要望書提出などの提言活動も行ってきました。

平成17年5月末日、NPO法人化。

<地域について>

私たちの活動のコンセプトは、「子世代応援団」。ケアや介護をする側の子世代が笑顔でいられない環境では、親世代に笑顔になってもらうことは不可能だとの考えからです。そこで、主な活動地域は東京圏、大阪圏などの都会。故郷を離れて家庭をもった子世代が多いからです。

けれども、離れて暮らす老親と子の問題は、いまや東京・大阪などの大都市圏だけのテーマではなくなっています。高齢少子化の影響もあり、親元には子がひとりも残らないことは一般的です。結婚した場合、夫婦両方の親と同居するケースはまれであり、そう考えると、少なくともどちらかの親とは別居。つまり、「遠距離介護」は誰にとってもかかわりの深い社会的問題であります。

セミナーの開催は大都市圏となりますが、会報やメール、ウェブサイトを通し、日本中、さらに結婚や転勤で海外在住の会員とも交流を続けています。

<今後の展望>

私たちの活動は認知症に特化したものではありません。

いくなれば、認知症でもだいじょうぶ。寝たきりでもだいじょうぶ・・・。

どんな状況になったとしても、抱え込まなければ「きっと何とかなる」という気持ちを子世代で共有したいと考えています。

それこそが、介護による虐待や自殺、うつ発症・・・、その他さまざまな悲劇を予防することにつながるのだと信じます。

継続して情報を発信していくことが大切です。

今後も、地道に活動をおこなっていきたいと考えています。

活動名称	認知症を学び地域で支え合う・なじみのふるさとづくり 一寄り添い人の養成、訪問、世代間交流のお誘い
活動要旨	地域の「ほっとサロン」(若い母親と幼子、中高年スタッフとの交流・遊びの場)に、 認知症の方を迎え入れ、世代間交流を支援
応募者	開成町社会福祉協議会 なじみのふるさとづくり研究会 喜多 祐荘、土井 高史
連絡先	〒258-0021 神奈川開成町吉田島 1043-1 開成町福祉会館内

(概要)

開成町における認知症の人との出会いは平成16年4月。私たちは、学生とともに本人の心の世界の科学的理解、本人・家族と地域各世代の交流・役割発揮、文化伝承を実践研究テーマに取り組んでいた。本人の娘さんからボランティアによる在宅訪問で本人・家族間の関係回復支援を依頼され、月1回ずつ会話・同行を始めた。本人は、もの忘れが目立ってから10年目の80歳男性、記憶年代50歳くらい、毎日が田んぼの見まわり、若い頃の活躍を思い起こし、近所の人々に元気にあいさつをする。まちなかへ出かけるときは、常に奥様が寄り添う。本人が苦手な長期記憶を治そうと、家族が電話台にメモ用紙を置くが、本人はその必要を感じず、双方ともにイライラが募る。

当初から私たちと学生は、「人生体験を教わりたい」との立場で「記憶再生・共感会話・同行感動記銘法」(記憶会話同行法)を用いて交流を積み重ねた。本人の楽しい語りと遊びを繰り返すうちに、私たちは3ヶ月めに顔と存在を記銘され、学生も6ヶ月めに記銘された。私たちは、奥様や娘さんと本人との会話の調整をし、楽しい語らいと遊びに参加を促すことにより、日常における会話法と限界(してはならない強制)について理解してもらい、また家族の悩みを受けとめた。家族とともに認知症寄り添いの研修をした(①疾病の人間理解、②記憶会話同行法、③寄り添い活動)。

1年後、家族の提案を踏まえ、町民の特定のグループとの継続的交流を次年度の課題に据えた。町の社協と円中自治会福祉部の役員に申し込み、取り組みの必要性を検討のうえ、福祉部主催の「ほっとサロン」(若い母親と幼子たちと中高年スタッフとの交流・遊び)に本人・奥様を迎えてくれることが決まった。平成17年11月から、ほぼ月1回参加し、若い親たちと語らい、楽しく遊び、幼児たちを可愛がり、ときには本人の幼な友だちの訪問を受け、「ほっとサロン」が地域への窓口となっている。本人にとって、家庭訪問と「ほっとサロン」が楽しみの時間になっている。若い母親や幼児にとって、老夫婦はこころ和む存在であり、ふれあいから知恵と元気をもらっている。世話役スタッフも、不安から確信へと本人のこころの世界の理解が変化している。

平成18年4月から当研究会へ社会福祉協議会・円中自治会等が加わり、円中地区在住の他の認知症の人と家族を対象に、家庭訪問・交流参加の呼びかけを検討し始めた。あわせて、寄り添い人(訪問と同行)の養成を検討し始めている。本人・家族の人たちを支える集い(認知症援助技術セミナー)に招待し、娘夫婦、社会福祉協議会、円中自治会の方々とともに学び、交わり、音楽と食事と風景をともに楽しんでもらった。参加者みなが本人を理解することができた。

19年度は、「家庭訪問」、「ほっとサロンへの参加・交流」、「在宅者新規訪問」、「寄り添い人の新規養成」、「全町域の調査・交流(情報交換)」の5つの柱に取り組むことを予定し、認知症の人・家族・住民の「なじみのふるさとづくり」を地区単位にすすめた。9月に町社会福祉協議会主催「認知症を学び地域で支え合おう講座」で30人余が集い学び、自治会の取り組みを始めた。

活動名称	長岡京の温もりの通い合う街づくりに向けて ～やすらぎ支援員のネットワークの役割～
活動要旨	「やすらぎ支援員」（認知症高齢者近隣住民・介護経験者・認知症支援に関心のある方）が認知症について学び、地域の高齢者等を訪問し、なじみの関係をつくる
応募者	長岡京市 やすらぎ支援員 澤田 泰子
連絡先	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺三反畑 8-1 グループホーム西山の郷

（概 要）

長岡京市では、認知症についての理解の輪を広げ、認知症の人と認知症を抱える人がともに安心して暮らせる温もりの通い合う街づくりの取り組みが住民パワーの力で動こうとしている。

「やすらぎ支援員」は、認知症高齢者の近くに住む人・介護経験者・認知症支援に関心のある人などを対象として、養成講座や実習の修了生に登録してもらい、コーディネーターによる調整を経て認知症高齢者などの居宅を訪問し、なじみの関係をつくりながら見守り活動や話し相手などを中心に活動を行う。その中で、悪徳商法や虐待などの課題が発生した場合など民生委員や行政機関になが柔軟なネットワークを創造していく。

<今後について－18年度登録者交流会での意見交換から>

「やすらぎ支援員」は、行政の地域支援事業としての立ち上げにより講座が開催され、平成18年度の登録者が35名、今年度も2期生が受講中である。以下の意見を「地域力」に活かしていく。

- ・従来は行政が全体の責任をもった上で住民もある程度関与していくという形式だったが、今後はもっと住民が「自分たちの暮らしは自分たちの支え合いから」という自主的な気運が高まった。
- ・認知症高齢者が一人暮らしを続けている背景は、本人が認知症を認めず同居を拒んだり、子どもが親の認知症を受け入れていなかったりさまざまである。
- ・住宅事情や共働きなどの事情で老親を引き取れない家庭も少なくない。たまにしか会わない子どもは親の認知症を受け入れられない傾向もあり、そういう高齢者には日常的な関わりは欠かせない。
- ・一人暮らしや認知症の支援を必要な人々の周辺に気を配り、ちょっとした変化も見逃さないような地域で見守りを支えていくしくみが「やすらぎ支援員」の活動である。
- ・地域の状況やニーズを社会福祉協議会（地域包括支援センター）と協働で把握していく。
- ・やすらぎ支援員登録者と利用登録者との相互調整をしてスケジュール表を作成する。このコーディネーターは当面は社会福祉協議会と協働で行い徐々にシステム構築をする。
- ・役割や活動内脊は定期会議の中でその都度確認し合い、新しく創造していける柔軟な組織とする。
- ・やすらぎ支援登録者たちは、現役施設従事者や有資格者、又は在宅で認知症介護の経験者たちでありリスクも充分認識している中で、それをどのように対応していくかも話し合われた。
- ・保険加入や具体的な組織化に向けて現在進行中である。
- ・それぞれのノウハウをもとに大勢の人たちと協働しながら、地域に根ざした取り組みをしていく。
- ・住民と行政のネットワークを活用し、この仕組みを地域の社会資源として活動に結びつけていく。
- ・地域にネットワークが存在し、虐待や悪徳商法など問題が発生したとき機能することが必要。
- ・日頃の人間関係によるなじみの繋がりの中で、本人の意向や希望を確認し、いつまでも地域で尊厳ある暮らしができるよう安心して安全な温もりの通い合う地域づくりを目指す。

活動名称	「積小為大」～小さな有限会社の足下から認知症の人の“力”を発信していこう～
活動要旨	認知症介護事業者が、「自分だったら何をしてほしいのだろう」という原点にもどって、介護を実践していく活動
応募者	有限会社 エーデルワイス 総施設長 青山 由美子
連絡先	〒090-0826 北海道北見市末広町350番地59

(概要)

当施設が、開設したのは平成17年8月16日と、現在2年を経過したところです。開設前には「認知症の人は十分理解している」と、思っていましたが開設と同時に打ち砕かれていく自分がありました。長い介護経験が仇になることが多く、介護経験のない未経験介護者の方がすんなりと認知症の人とふれ合うことができることも経験から判明しました。

この思いこみの経験を打破するために経営者自身が、原点の「自分だったら何をしてほしいのだろう」との、基本的な考えからの対応が始まりました。

職員とのカンファレンスを重ねる毎に認知症の人が求めているものや、1曲の懐かしい歌からの発言は“その人の宝”となり、その情報は職員の気づきにつながりました。

認知症の人の対応は、特別なことではなく、介護者自身が行ってほしいことを心の基準とし、介護する人がわからない時は素直に尋ねること等、ごく当たり前のことから始めると穏やかに違和感なく暮らすことができると職員共々理解ができたのでした。

この理解が始まると、認知症の人が何を求めているのか“五感を駆使する”介護が必要であること、認知症の人は楽しいことが好きなこと、私達が青年時代に聞いた歌がテレビ等で流れると非常に懐かしく、その当時の思い出に入ることから、認知症の人の時代背景に沿ったものを導入すると、発語のなかった人が思わぬ家族も忘れていた記憶を再現することなど、新たな力をたくさんいただいたのです。

そのような経験から、いつも決まった時間に“笑いの体操や歌の時間、二宮金次郎物語（小田原教育委員会発行）等”の「動」の時間を提供し、認知症の人自身がその都度決めて参加や自室での過ごし方を選んだりしています。

毎朝提供時は、なぜこの体操をするのか、「二宮金次郎さんって知ってますか」等、導入前の短い言葉を添えて記憶の呼び水を行い認知症の人が自ら選択をして参加することが“本人のやる気”を引き起こし、意欲につながることで理解できたからです。

このような、自らの認知症介護に対する反省を地域の人や家族の人へと伝えることが企業を起こした使命だとも感じています。

認知症の人の“力”や認知症という病気によって引き裂かれた家族の絆を、もう一度再構築できるのが「認知症介護」の現場であると実感し、介護現場の人に伝える動機にもなったことでもあるのです。

今後も北のはずれの小さな地域からの発信ではありますが、認知症の人が苦しむことのないように、有限会社からでも実施できる地域発信を継続していき、国民の皆様の大事な保険料を使用させていただいているという原点を忘れず、幸せをお届けしたいと思います。

活動名称	「成年後見推進ネットこれから」の活動
活動要旨	高齢化社会が進んでいく今、早期の段階に、自分たちが希望する老後を迎える準備として、認知症や成年後見制度の正しい知識の普及等を進める
応募者	NPO法人 成年後見推進ネットこれから 代表 小泉 晴子
連絡先	〒178-0063 東京都練馬区錦 1-22-12

(概要)

私たちは東京都練馬区で平成4年から認知症の家族会の活動を継続してきました。

「成年後見推進ネットこれから」は、今まで家族会でやってきた介護よりもうすこし踏み込んだ支援をしていきたいと思って立ち上げました。成年後見制度はなかなか利用が進んでいません。利用が進むために色々な活動をしていきたいと思っています。例えば成年後見制度について理解していただくとか、手続きがよく分からないというような方にも、手続きの支援をしていくとかということがあります。それから早い時期に利用していただく、そういうようなことを広めていきたいと考えております。認知症そのものも早期発見、早期治療が大事なのですが、成年後見についても後見という最後の段階からではなく補助の段階からもっと関われば、もっと利用が楽ではないかと考えています。私たちを含めて団塊世代の皆さんに10年後、20年後を考えていまから準備しましょうと声をかけていきたいと思います。

NPO法人成年後見推進ネットこれからの設立総会は平成18年の12月3日に行われました。そして、発足を記念した講演会には平成19年4月27日に152人の参加者が熱心に耳を傾けました。

成年後見推進ネットこれからの活動としては、まず、学ぶことです。成年後見制度を学んで、「自分のこれから」と「身近な人のこれから」を考えるために成年後見制度後見コーディネーター養成講座(定員15名)を6月から9月にかけて7回連続で行いました。

そのほかの活動として、会員の集いを行い、10月には後見をする立場で自立支援法への理解を進めるために練馬福祉園の施設見学も行いました。また、講演会も引き続き行っています。

また、希望する生活を自分で選ぶための「これからノート」も制作しました。

「これからノート」は、自分自身の「これから」を自分で設計するための整理ノートです。現在、私たちは長い高齢期を過ごすようになりました。私たちには高齢になっても自分が希望する生活を自分で選ぶ権利があります。それを支援するのが成年後見制度です。成年後見制度を上手に利用するために、自分が生活してきた歴史やスタイルを情報として整理し、自分の望む高齢期の暮らしを自分で設計していく必要があります。何もかも「お願いします」で任せるのではなく、準備しておくことが大切です。また、「これからノート」は、認知症や障害を抱えて判断力が低下した人の「これから」を支えるためのノートでもあります。判断力が低下した人を支援する場合も、その人についての情報とその人の意思は大切です。周りで思っていることが本人の意思と違ってはよい支援は望めません。本人だけで記入することが難しいときは、介護者と一緒に記入できます。「これからノート」は、私たち自身の「自分で決める高齢期」のためのものです。

今後もさらに自分の望む高齢期を自分で設計するために、教育活動、支援・相談活動、地域ネットワークの構築を進めていきます。

活動名称	まちなかのきらくえんー認知症の人の「市民的自由」の尊重
活動要旨	ノーマライゼーションを基本理念に掲げ、特別養護老人ホームを中心に、どんなに重い障害をもっている市民として地域に暮らす生活を保障するサービスを提供
応募者	社会福祉法人 きらくえん 理事長 市川禮子
連絡先	〒661-0982 兵庫県尼崎市食満2-22-1

(概 要)

当法人は、現在兵庫県下に特別養護老人ホームを中心に、ケアハウス、グループホーム、デイサービス、ショートステイのほか、多岐にわたる在宅福祉サービスを併設した総合的な高齢者福祉施設4苑と法外的生活支援型グループハウスを運営しています。平成18年度には改正介護保険制度のもと地域包括支援センター3カ所と小規模多機能型居宅介護施設2カ所を開設し、すべての在宅福祉サービスにおいて介護予防事業を行っています。どんなに重い障害をもっている市民として、また地域に暮らす一人の住民としての生活を保障したいと思い、「人権を守る」「民主的運営」と方針を整理しています。私たちの「まち・地域」にかかわる活動を紹介します。

●いくの喜楽苑ー平成4年に朝来郡（現在は朝来市）生野町で開設。ここでは、個室化により入居者の自立への意欲が高まり、認知症の人たちが穏やかに過ごされるようになることを学びました。認知症の方の歌う歌がかつて生野銀山が栄えていた頃の盆踊りの歌だと職員が気づき、現在は、いくの喜楽苑で8月の一夜、600人余の町民の方々とともに賑やかに盆踊り大会が開かれています。

●あしや喜楽苑ー平成9年、芦屋市に開設。福祉は文化である、という質の高い福祉実践に加え、入居者に質の高い文化を享受していただき、特養が地域の文化の拠点になることを目指しました。広い地域交流スペースにて講演会、クラシックやジャズコンサートなどを頻繁に実施。ギャラリーには入居者はもとより地域住民の方々も来られ、昨年1年間で延べ1万5千人以上が来場。営業許可をとった喫茶店には、入居者はもとより地域の住民の方で賑わっています。現在、この地域交流スペースをさまざまに利用される方々の総数は1ヶ月に延べ4千人を超えるまでになりました。

●阪神淡路大震災から3年余を経た平成10年4月、ようやく新設された2万5千戸の復興公営住宅に、仮設住宅で仮住まいをしていた人たちが順次入居されました。復興公営に入居する人たちは高齢者が多く、生活支援や介護を必要とする人たちが大勢いました。独居の比率も異常に高く、行政も何らかの手だてをとらざるを得ず、シルバーハウジングを約4千戸とコレクティブハウジングを260戸組みこむこととあわせて、それらの住宅にLSA（Life Support Adviser 生活支援員）を配置することになりました。当法人も芦屋市と尼崎市で380戸のシルバーハウジングと30戸のコレクティブハウジングへのLSA派遣事業を行うことになりました。その中で唯一芦屋市が昼間だけでなく、24時間カバーするLSAの派遣事業を決め、南芦屋浜復興公営住宅814戸の高齢者自立支援事業と230戸のシルバーハウジングへのLSA派遣事業を私たちの法人に委託しました。以来9年間、当法人は団地内にLSA11名を配置し、1日平均80軒の訪問活動と24時間体制で緊急通報に対応してきました。被災地の復興団地（総戸数4万8千戸）で唯一9年間孤独死ゼロを達成しています。今後ますます高齢化し独居世帯が増えるわが国において、在宅福祉サービスだけでは救えないサービスの空白時間を埋める「すき間のケア」として重要だと思えます。歴史の歯車を後ろに回すのではなく、たとえわずかであっても半歩でも一歩でも前に回す役割を果たしたい、時代がかわろうとも誠実を胸に刻んでひたすらに歩み続けていきたいと思っています。

活動名称	地域人として生きる －誰もができることを通してつながる－
活動要旨	長年培った介護福祉士としての経験を生かし、認知症の方ご本人・家族・ボランティア等と共有しながら、介護保険適用の通所介護サービス等を運営する
応募者	NPO法人 志ネット・石川 常光 利恵
連絡先	〒924-0072 石川県白山市千代野西 2-5-3

(概要)

私たちは老いる。生活上のさまざまな不自由を少しずつ増やしつつ年を重ねる。種々の社会保障の仕組みの中で支えられながらも、長命を純粋に喜ばず、人生の最後まで輝いて生きるということの困難さを不安とともに想像する。誰もが未体験の年を重ねる世界には、認知症という不安要素が大きな位置を占めている。

「認知症の人が生きやすい場所をつくる」。しかも、今まで暮らしていた身近な所につくりたいと、平成9年秋、任意団体として「菜の花のおうち」を開設。福祉分野で介護福祉士として働いてきて20年近い私たちは、認知症はケアによって多くの不自由や混乱が緩和されると実感。しかし、在宅で望む暮らしを継続していくとき、身近な人々の理解を基盤とした共助の仕組みは欠かせない。

私たちは、在宅福祉の充実に住民の役割が不可欠だと思ふ地域の人々とともに、自発的な供給組織を作りたいと、平成16年春、『NPO法人 志ネット・石川』を設立。認知症ケア専門士として学んだことを、本人、家族、ボランティアの方々と共有しながら、平成18年には介護保険の通所介護の通所介護サービス・介護予防通所サービス事業を実施し、今日に至っている。

<活動の成果と今後の展望>

◇認知症の人が映画を見てわかるの？

- ・「ばあちゃん、映画に行けていいな」と孫にうらやましがられます。
- ・文四郎とおふくの恋のせつなさに、涙が流れます。
- ・「こんな時代を生きてきた」三丁目の夕日に懐かしさがこみあげます。

◇認知症の人がものづくりできるの？

- ・昔から縄を緋い、俵を編みましたから、布草履づくりは得意です。
- ・義妹にパッチワークのバッグをプレゼントできたのは喜びです。
- ・腕っぷしバンドが女性のつどいの景品に使われたのは誇りです。

◇認知症の人が新聞読んだり、漢字クイズをしたりできるの？

- ・わからない言葉や漢字は辞書を引くという楽しみがあります。
- ・政治家の不正や官僚の不誠実に、しっかり怒りがこみあげてきます。
- ・同年代の投稿には励まされたり、同感したりで、今を生きています。

◇職員とボランティアは、確かなサポートがあれば

できることの多さを知ります。

わかることの深さに感動します。

◇医療の進歩を着実にひきよせられる連携を求めながら、年を重ねることを学びあい、健やかな老いを拓きます。

活動名称	グループホーム入所者による公園清掃活動
活動要旨	近くの公園の清掃活動や定期的な外出や買い物を通して、グループホーム入所者の地域社会への協働やふれあいをめざす
応募者	社会福祉法人 浴風会 グループホームひまわり
連絡先	〒168-8510 東京都杉並区高井戸西 1-12-1

(概要)

社会福祉法人浴風会では、「利用者本位のサービス実践」「専門性の活かせる職場作り」とともに「地域社会への協働と貢献」を目標に掲げています。また、当グループホームでは「日常的に町に出て、地域の人々や自然とふれあいながらの暮らしを支援し、「家族や地域の人々の声を大切に、開かれたグループホーム」をめざしています。

このため、日頃からグループホーム所在地である東京都杉並区の皆さんとできるだけ多くの交流を持つことを心がけてきました。とくに、利用者の皆さんが外出する機会を増やすことにこだわってきました。

これまで、外出支援の活動として計画を立てて東京都庁や深大寺などに遠出をするようにしています。その際には一斉に大人数で出かけるのではなく、気のあった人同士や車椅子の人同士などの2～3人で誰でも年に1回は心置きなく出かけられるようにしています。

また、月に1回は長めに歩いたりちょっと交通機関を利用するようなところに外出しています。たとえば、食費をやりくりして隣の駅近くにあるみなさんのお気に入りのハンバーグ屋さんまで出かけます。職員からお店のスタッフの方にあらかじめ説明をしていますので、お店の人たちはトイレに近くてゆっくりできる場所を「指定席」として確保してくださいます。また、近所ではとても有名な阿佐ヶ谷の七夕祭りに出かけたたりもします。

買出しは月に二回、まとめて行くことにしています。利用者の方で付き合っただけの方には一緒に行っていただきます。そして天気さえよければ、毎日でも緑の多い浴風会の構内や、近くの神田川沿いを散歩します。

これらの活動は、身体能力を維持しまたそれを計るためにも重要だと思っています。

最近では、地域の皆さんに喜んでいただけるようなことはないだろうか、身近でできることはないだろうかと考えて、近くの区立公園のゴミを拾う活動を始めました。近所の公園にはペットボトルやカップめんなどのゴミが多くて気になっていたからです。

大きなビニール袋を用意して、手で拾えるゴミを集めます。20分くらいの間にビニール袋が1つでは足りなくなります。

利用者の皆さんは「まったく、こんなところに捨ててマナーが悪い」と憤慨しながら、それでもはっきりと表情が豊かになります。

始めてからまだ4回目ですが、これからはできるだけ定期的に行っていきたいと思います。「地域の中で、地域とともに」生活することは人として当然のことです。ささやかな活動の第1歩ですが、地域の中で役割を果たすことは非常に大事なことでと考えています。

活動名称	高齢者が安心してご利用いただける店舗を目指して
活動要旨	認知症サポーター養成講座を展開し、全国の全店舗に認知症サポーターを最低1名配置。顧客満足向上に努めていく
応募者	三菱UFJ信託銀行 株式会社 経営企画部CSR室 三輪
連絡先	〒100-8212 東京都千代田区丸の内1-4-5

(概要)

三菱UFJ信託銀行は、厚生労働省が進める「認知症サポーター100万人キャラバン」の趣旨に賛同し、大手金融機関としては初めて、高齢化を背景とした社会問題に社員一人ひとりが取り組む「認知症サポーター」養成講座を全店舗で展開し、「認知症サポーター」の養成に取り組んでいます。

○「認知症サポーター」養成講座に取り組んだ経緯

昨今、「CSR（企業の社会的責任）」という言葉を目にする機会が増えていますが、三菱UFJ信託銀行でもCSRを経営戦略の大きな柱のひとつと位置付け、本業や本業以外の社会貢献活動を通じて、社会的責任を果たしていくことを宣言しております。

三菱UFJ信託銀行では、CSRの取り組みテーマのひとつに、日本社会における少子高齢化問題を掲げており、“世代間の「想い」をつなぐ活動”を全社的に進めていこうと考えております。その一環として、金融機関としては初めて、「認知症サポーター」養成に取り組むことと致しました。

高齢のお客さまとのお取引が多い三菱UFJ信託銀行にとって、高齢化を背景とした社会問題に社員ひとり一人が取り組むことは、社会に貢献しつつ、また、お客さまへのサービスの向上につながると考えたからです。

○養成講座の開催について

第1回の養成講座を平成18年11月に本店ビルで開催し、本店をはじめ首都圏近隣の社員のうち希望者273名の社員が出席しサポーターとなりました。受講した社員のほとんどがたいへん有意義であったとの反応でした。

実際に家族に認知症の方を抱えている社員もおり、講義終了後の質疑応答も活発に行われました。

平成18年12月には、全店舗から各1名ずつ出席した社内の研修会においても、養成講座を開催しました。これにより全国77店舗の全てに認知症サポーターを配置致しました。

平成19年1月以降は各店舗で養成講座を開催し、日頃お客さまと接する機会の多い店頭の社員を中心にサポーターとなり、その輪を広げ、現在では全国で約2,300人の社員、派遣社員、嘱託がサポーターとして活躍しております。

活動名称	認知症の人を支える地域医療の経験と課題～在宅支援診療所から～
活動要旨	クリニック・宅老所・通所リハ・グループホームなどを運営しながら、パーソン・センタード・ケアを理念とした在宅介護を支援する多職種ネットワークをつくる
応募者	医療法人社団つくし会 新田クリニック 院長 新田 國夫
連絡先	〒185-0005 東京都国立市西 2-26-29

(概 要)

私は平成2年にクリニックを開業して以来、東京都国立市で定期的に訪問診療を行っています。現在も外来診療を行いながら、ほぼ毎日、訪問診療に出ています。また、緊急時の往診にも対応します。約50名の在宅の要介護者・療養者を24時間体制で診ています。これまでに800人を越える高齢者の方の最期を在宅で看取りました。現在、在宅の方で認知症のある方は22～23人、外来の方で認知症の方と疑いのある方をあわせると200人くらいになります。

地域の高齢者医療にあたりながら認知症高齢者などのための宅老所の運営を始めたのは、介護保険制度のスタート以前の平成9年でした。朝、集まって、みんなで食事の用意を始めるような生活の場ができると、認知症の高齢者が投棄せずとも問題行動がなくなっていきます。私は外科医ですがそれを見て、認知症高齢者への認識が深まりました。

私自身も認知症について十分な知識を持ち合わせていませんでしたので、在宅介護に携わるメンバーと研究会を作っています。市民向けの啓発活動のための講演会も開いています。

また、平成10年に通所リハビリテーション「ふれあい倶楽部」を始めました。ここに高齢者を毎日連れてきてもらうようにしますと、外に出て人々と交流するようになった方は気力が戻り、状態が改善されるのです。しかし、重度認知症の高齢者もいますから、通所ケアにも限界があります。そこで、平成17年にグループホームと介護付き有料老人ホームを作りました。

初期においては、在宅生活が圧倒的に多く、ほとんどは地域のかかりつけ医が主治医です。そのため、かかりつけ医の認知症に関する周知と地域支援体制が必要となってきます。

BPSDの介護者の対応については、パーソン・センタード・ケアの概念を明確にすることで、逆説的に介護者の対応の改善を促すことです。例えばできることをさせない、本人の気持ちを見無視するなど、日常あり得るさまざまなことを悪意と思わないでしていることです。その結果としてBPSDが発症します。軽度であれば環境要因を整えることで対応は可能であり、医療要素を持った観察が可能なデイケアあるいはショートステイの利用により家族負担を軽減できます。

後期になると在宅ケアはさまざまな困難を伴います。私自身、介護保険開始以前に宅老所を立ち上げたのはBPSD、高度の認知症患者における在宅ケアの限界を感じたからであり、宅老所の利用によりほとんどの薬物治療から離脱できたことを経験しています。さらにグループホームを立ち上げたのは、デイケアのみの利用では介護の限界があることが理解できたからです。できる限り在宅に近い状況のグループホームは、認知症患者にとり自宅より快適な場所となり、多くの周辺症状を消失させることができました。

多職種の連携は現場にかかわりのある人からの情報が重要です。介護事業者などの責任者から認知症患者の在宅ケアと地域連携は正確な情報が伝わることは少ないのです。さまざまな利用者、さまざまな多職種との頻回の担当者会議がお互いの理解につながります。

活動名称	毎日の生活を地域のなかで 地域の輪そしてひろがり…
活動要旨	短大からの実習生の受け入れ、近隣中学校との交流、大学への講師派遣等など、地域の人たちと一緒に「支え、支えられる」グループホームを目指した活動
応募者	株式会社 ひまわりの会 ぼれぼれグループ 藤原 一恵
連絡先	〒631-0004 奈良県奈良市登美ヶ丘 2-2-15

(概要)

奈良市は奈良県の北東部に位置し、京都、大阪まで30分というアクセスの良いベッドタウンとして古い町並みと新しい住宅地の交じり合った落ち着いた街です。古都奈良の文化財、東大寺・興福寺・春日大社・元興寺・薬師寺・唐招提寺等、この町全体の歴史や文化が評価され世界遺産として登録されています。奈良時代の様子を伝える貴重な証拠であり、日本人の信仰と密接な関係があり、年中行事などを通じて市民の暮らしの中に生きています。生活そのものが歴史を感じさせ、また奈良公園の近隣では、大通りを鹿が歩いています。鹿が通り過ぎるのを待ち、車が行き来するといったゆっくりと時間が流れる町でもあります。

その奈良市にぼれぼれグループの3つの事業所があります。ぼれぼれグループは4つの理念を柱に運営されています。

～ゆっくり、楽しく、ご一緒に～ で表現され、高齢者を人生の大先輩として敬い、常に謙虚に介護をさせていただくという気持ちを忘れてはなりません。

1. 質の高いサービスの提供

介護の道に近道はありません。高齢者の「生活を支える」ことを使命として「長生きしてよかった」「あなたとめぐり合えてよかった」と満足と信頼していただけるよう勤めなければなりません。

2. 王道をいく

質の高いサービスの提供を、遵法の精神と社会的ルールに則ってひたむきに追求していくことが地域、社会に貢献することにつながります。またそこで働く職員自身にも自らの誇りと自己実現が可能な組織づくりにもつながります。

3. 「考える」「学びあう」「実践する」組織

一人ひとりが常に向上心を持って、自己啓発に努めます。現場に学び、失敗で学び、帰納と演繹の考え方で広く知恵を共有し実践し評価する組織でなければなりません。「楽しく学びあい」「夢があつて思いやりのある職場」をめざします。

4. 地域に開かれた組織

四通八達に地域社会と交流し地元から好感と信頼をいただける組織でなければいけません。たとえば「地域の掃除をする」「地域の住民と仲良くする」「地域が繁栄することをして貢献する」「介護の相談に応じる」「介護情報の提供」「職場の提供」等々を通じて地域に開かれた組織をめざします。

地域の人たちと一緒に「支え 支えられる」事業所をめざし、少しずつ地域に根を下ろしていています。

奈良市にある3つの事業所のうち2箇所にグループホームがあります。ぼれぼれ奈良公園とぼれぼれ登美ヶ丘です。

活動名称	一粒の麦（傾聴ボランティアにおける愛の見守り）
活動要旨	認知症高齢者宅を訪問し、家族に代わって見守りや話し相手（傾聴）を行う。介護に苦しむ家族の慰労の為に行政がシルバー人材センターに委託した事業の一環
応募者	草加市認知症高齢者家族やすらぎ支援事業 やすらぎ支援員 矢菅 健司
連絡先	〒340-0021 埼玉県草加市手代町 1009-1 社会福祉活動センター内

（概要）

草加市は人口238,717人（平成19年4月1日現在）の風光明媚な、俳句と煎餅の町です。旧日光街道には芭蕉の銅像や正岡子規の句碑が建立され、松の並木道がロマンを呼びます。65歳以上の人は38,683人で、人口の16.20%を占めています。シルバーカーを押して路傍に佇むお婆さん、他所の屋敷に迷い込み、追い駆けて来たお嫁さんに激怒され、引かれて行くおじいさん。夕闇の空を警察のスピーカーの音が流れ、徘徊老人の行方を尋ねるもの悲しさ。何処の町にもあるようにロマンの町にも悲哀の影が…。認知症高齢者を介護する家族の痛々しい心情が伝わって来ます。

草加市では行政が民間の機関に委託して、介護に苦しむ家族の負担軽減の為に、草加市認知症高齢者家族やすらぎ支援事業を立ち上げました。認知症高齢者家族とは認知症高齢者とその家族の事で両者を指します。家族に代わり見守りや話し相手を行います。平成17年10月1日に創設されました。やすらぎ支援員とは、認知症その他に関する講習を所定時間受け、市長よりその修了書の交付を受けて市に登録された者です。高齢者の境遇に同情するのではなく、傾聴を受けられる高齢者に「共感」する態度で接することが支援員にとって重要とされています。

平成19年の4月から8月までの介護認定調査で認知症状が全く見られなかった人は793人（32%）とされていますが、これから認知症の症状が出てくる可能性のある人も皆無とは云えないでしょう。支援事業の対象となる方々は更に増えることが予想されます。

当該支援事業を行政から委託されたのが「社団法人 草加市シルバー人材センター」です。現在、会員数が約2,000人で、百十数の活動グループを有し、やすらぎ支援グループもその中の一つです。やすらぎ支援員は27名おり、70名の認知症高齢者を訪問して話し相手になり見守っています。この人たちの活動を傾聴ボランティアと呼びます。支援員はそれぞれ奉仕の精神を持って利用者宅を訪れ、認知症高齢者の語らいに耳を傾けます。支援員にとって訪問先の主は「人生の師」となります。ご家族へのやすらぎが生まれる一瞬です。

このような支援活動に対し、市からは一人当たり1時間に付き750円の活動費が支給されます。利用者さんは週に二回、一回に付き2時間までの傾聴での支援が受けられます。料金無料。シルバー人材センターには行政と支援員とを取り持つコーディネーターと担当者があり、高齢者家庭や各機関との縦横の固い連携プレーが利用者さんを守っています。支援活動は、支援事業の発足当時に神奈川県横須賀市のやすらぎ支援員さん達を訪問しての交流から始まりました。支援活動の先輩となられた方々との間に質疑応答がなされました。自信のない私たちに勇気と希望が与えられました。

草加市やすらぎ支援員は独自の路線を探求し、高齢者家族と市から感謝されています。認知症高齢者についての演劇も行い、大勢の人々に認知症について知っていただきました。

活動名称	地域と施設で暮らす交流の場
活動要旨	特別養護老人ホームに隣接した場所で喫茶店を経営。利用者がミニ逆デイとして気軽に立ち寄り、地域利用者やホームに訪問された方との交流の場をつくる
応募者	憩いの場「優しい時間」 中田 伸子
連絡先	〒121-0061 東京都足立区花畑4-39-25

(概要)

憩いの場「優しい時間」に隣接特別養護老人ホーム足立新生苑の「ミニ逆デイ」の利用と地域のお年寄りとの談笑の場。

開店のきっかけは煙草と総菜を販売していたが、時代の流れで総菜を止め、今迄使用していた厨房をリフォームするに当たり、店の隣りが「特養」なので介護士として勤務していた関係上「デイサービス」ではなく「逆デイサービス」を提供したいという気持ちになり、車イス使用出来るバリアフリーに店内を改装しました。NPO法人でなく夫婦（夫71才、妻64才の夫婦）で出来る範囲での営業。

（平成17年11月22日 開店）

そして「逆デイサービス」だけでなく地域の住民（特にお年寄り）との係わりも重視したく朝10:30～営業（お散歩の帰りに立ち寄れる場として提供）その為年齢が60代～90代までと幅広く年齢関係なくお互い楽しく優しい時間を共有されています。

老人ホームの利用者やヘルパーさん、同行の在宅介護の方々も多く来店され、開店してから二年ですが近くに喫茶店が少ない為、大変好評を頂けています。又、最近では地域包括支援センターの方に来て頂き、介護保険の話を地域の方々と一緒に聞くという事もありました。

●メニュー例

- コーヒー ¥150
- おしるこ ¥250
- くずゆ ¥250
- ゆず湯 ¥150
- 食事 ¥525 等

●営業時間

- 朝10:30～5:00
- 定休日（日曜日）

活動名称	グループホームと商店街の交流からはじまった 「認知症でもだいじょうぶ」の町づくり
活動要旨	グループホーム入居者が地域のなじみの商店街にでかけることによって地域に溶け込み、道に迷った時など支援をしてもらう
応募者	グループホーム えがおの家 千田 富子
連絡先	〒190-0021 東京都立川市羽衣町1-7-10

(概要)

<はじめに>

グループホームえがおの家は平成14年4月に開設。「ボケても幸せに暮らせるまちづくり」に役に立てるような取り組みをしようと話し合ってきた。認知症の学習会や「ホームスイートホーム」の自主上映会の開催、開設1周年にも認知症になってより才能を発揮した小菅マサ子さんを主人公にした「折り梅」を自主上映するなど、地域のみなさんと一緒に認知症について学習した。見学者や実習生は原則的に断らず、認知症やグループホームについての講師要請にも可能な限り応じた。

<入居者のみなさんと商店とのお付き合い>

認知症でも普通に暮らせることを地域の人々に発信した第一功労者は、グループホームの入居者さん自身であった。毎日の食料品はできるだけ地域の商店街で買っているが、一番安くておいしいお店を知っているのは、昔から近所に住んでいた入居者さんだった。グループホームのある羽衣町の商店街では2ヶ月に一度、買い物時に交付するシールを貯めた抽選会を開催する。入居者はその常連で、一等賞を2回も当てた。買い物の行き帰りも、入居者のみなさんと一緒だと誰もがやさしく声を掛けてくださる。職員の知らない間に散歩に出かけて道に迷った人を助けてくれたのも商店の方々が多かった。いなくなったのを30分以内に気づけば職員が見つけれられるが、それ以上になると探すのにも途方にくれてしまう。迷い人は、暗くなっても電気で明るいお店に助けを求めることが多く、お店の人が気づいて声をかけてくださるケースも多いことを、経験を通して学んだ。

<運営推進会議のみなさんが応援団>

グループホームは平成18年4月から地域密着型サービスとなり、運営推進会議を開催することが義務付けられたが、商店街の方々を中心に快く引き受けてくださった。「こどももおとしよりも安心して暮らせるまちづくりを」と近くの小学校の校長先生にも参加をお願いした。子ども達が実習に見え、お返しに展覧会などにご招待された。老人会代表の会長さんは、開設5周年記念の上映会「そうかもしれない」を町内会に回り半額自治会負担としてみなさんで鑑賞してくださった。

運営推進会議主催で平成18年11月「認知症サポーター養成講座」を開催した。これは立川市では初めて「行政にこれから立川市はどうするのか話してもらおう」と市と共催となった。定員70名を超える104名の参加があり、今年、他の地域でも養成講座が開催するなど広がり、民生委員などで構成する「見守り隊」でも養成講座を開催するなど、少しずつ全市に広がっている。

地域の迷い人の現状について警察とも話し、迷い人SOSネットワークについて検討を開始。

<これから本格的な「認知症でもだいじょうぶ」な町づくりを>

今後とも地域の方々とりわけ商店街の方と協力して「認知症でもだいじょうぶ」であることへの理解を深め、そして「認知症でもだいじょうぶ」な町づくりを進めていきたいと思っている。

活動名称	グループホーム いろいろの取り組み
活動要旨	毎日恒例となっている「近所への買い物」からはじまった地域とのつながり
応募者	(有) KYT グループホームいろいろ 尾原 一美
連絡先	〒653-0043 兵庫県神戸市長田区御屋敷通 6-2-26

(概 要)

兵庫県神戸市長田区にあるグループホームいろいろは、平成15年10月に開設し今年で4年が経ちました。開設当初は「穏やかに・ゆったりと」を理念にし受身の入居者の姿が見られていました。一年半が過ぎた頃、「自分のことは自分で。主体性を持って」という支援に修正し、理念も変わりました。

スタッフはそれぞれの入居者のできる事・できない事をしっかり見極め足りないところだけを補って、その人の持っている力を引き出すことに力を注ぎました。入居者が主体的な生活が送れるようにスタッフは黒子の支援に徹しています。その次のステップとして、「互いに助け合って人として生きる姿」を目指し、まずは取り組みとして入居者全員で、徒歩15分のスーパーへ買い物に出かける毎日が始まります。すると、今までは入居者とスタッフだけの関わりしか見られなかったのが、みんなで一緒に買い物に出掛けることで他の人の車椅子を押してあげたり、歩く速度の遅い人を気遣って休み休み歩いてくれたり、重い荷物を分け合って持ってくれたり…と入居者同士が互いに助け合う姿があちこちで見られるようになっていきました。

それと共に地域の行事にも積極的に参加するようになりました。小・中学校のトライアルウィークの児童の受け入れをした数日後に、その児童が学校の音楽会の案内状を届けてくれて、入居者全員で鑑賞に出向いたのがきっかけとなり、その年からは年中行事となりました。

認知症があっても、地域社会とつながりを持ち地域の一員として生活できるようにという当たり前の日常を送っています。

<活動の成果と今後の展望>

買い物も行き始めた頃は慣れないため、でかけるまでに時間がかかっていましたが、毎日毎日繰り返すことで買い物の習慣ができ、時間になると自然と買い物の準備をした入居さんがリビングにあつまってくるようになりました。

それぞれのお年寄りのできること、できないことを見極め、字の書ける人には買い物メモを書いてもらい、買い物メモを見ながら品定めをしてもらい、会計ができる人には財布をまかせレジで支払ってもらい。できることが増えていくと助け合って買い物袋をもってあげたり、お互いに声をかけあう姿が頻繁に見られるようになりました。

地域にどんどん出て行くようになると、声をかけてくれる近所の人も増え、家でたまったスーパーの袋をごみ袋にどうぞと差し入れしてくれる人があったり、ボランティアで手芸を教えに訪問してくれたり、自治会の行事に誘ってくださることもあります。「地域社会とのつながりをもち地域の一員として生活できるように」といういろいろの理念にあるようにこれからも地域の一員として社会に出て行く、人として自然な姿を支援し続けていきたいと感じています。

活動名称	認知症ケアのネットワークづくり（佐倉市西南部編）
活動要旨	高齢者リハビリ研究会、認知症勉強会、専門職対象の電話相談等の活動を経て、現在はデイサービス従事者や介護専門職が合同で認知症の勉強会を行うことによって認知症を支える専門職のネットワークを構築、認知症のケア体制をつくる
応募者	認知症ケアネットワークCB 事務局長 藤本 美紀
連絡先	〒276-0045 千葉県八千代市大和田 238-17 脇本方

（概 要）

わたしたちは、千葉県の北部、八千代市と佐倉市、千葉市、印西市が接する地域で活動しています。もともとは平成9年に有志にて高齢者リハビリ研究会として発足し、平成11年からは認知症に関連する勉強会を開催。この頃は都内や他県の関係者を招いたり、異分野の技術者の方との勉強会でした。その後、平成16年からは専門職対象の電話相談などを開始、平成17年、研究会の千葉県居住者と賛同者にて地域に特化したネットワークに改組を行い、「認知症ケアネットワークCB」として、活動して参りました。今回は、佐倉市での活動を中心に報告します。

当会のメンバーが平成16年6月に在宅のケアマネージャーで赴任した地域で、①認知症の方の利用しやすいサービスが少ない、②関係職種から認知症に関する問い合わせや相談が多い、という提起がありました。そのつど当会で散発的に対応しましたが、当会の委員のボランティア活動だけでは限界があり、地域の専門職と一緒に認知症のケア体制をつくらう、という機運になりました。

当会の関係した専門職から認知症の勉強会をしようという声が上がリ、合同の取り組みをすることになりました。これがきっかけとなり平成17年12月から合同の勉強会を行いました。

～取り組みについて～

- 平成16年度：認知症に関連する職種への電話相談、サービス事業所などの紹介や同行訪問
⇒課題：当該地域での認知症支援体制を補強する必要性がうかびあがる
- 平成17年度：相談内容からあがった問題点への取り組み
協力医療機関の体制づくり、専門職合同の勉強会づくり
⇒成果：医療機関を中心として、地域の支援チーム形成へ進む
課題：若年認知症の方への支援の必要性、本人と家族それぞれに対する支援の必要性
- 平成18年度：協力機関での活動の幅を広げる
啓発活動はサポーター養成講座の支援へ、若年認知症の方が利用しやすい事業所づくり
家族とのコミュニケーション⇒家族支援のため家族会づくりへ
⇒成果：勉強会の成果でそれぞれの事業所が独自の取り組みをはじめ
課題：認知症早期の方についてのフォローをどうしていくか
- 平成19年度：早期の方の利用できるサービスづくり、他機関との連携・ネットワークの拡大
本人の意向を実現する手伝いへ

わたしたちは「発見した課題」に対して次の年に取り組み、またその中で現れてきた課題に対して取り組んでいます。小さな集まりですが、自分達でできることからやっています。完成ということはありません。この活動をしていてうれしいことは、これまで「認知症」ということにさほど関心のなかった方が、いつのまにか味方になって動いてくれることです。このような仲間が増えていくことが、「認知症でもだいじょうぶ」な町づくりにつながっていくことを心から願います。

活動名称	「認知症の人から町の人へのメッセージ」
活動要旨	東京都町田市にある9つのグループホームが共同の研修会やホーム別の発表会など、場作りを提供。入居者の創作意欲や地域とのつながりを促す
応募者	町田市グループホーム連絡会 濱田 秋子
連絡先	〒194-0004 東京都町田市鶴間 544 ふよう病院内

(概要)

町田市グループホーム連絡会は平成15年4月8ヶ所グループホームで結成されました。グループホームの質の向上と認知症を町の人たちに知っていただく活動が町田市と共同で始まりました。

町田市グループホーム連絡会主催・町田市後援のグループホーム報告会は年に2回開かれています。その4回目の9月の町田市フォーラムでの報告会では、それぞれのグループホーム入居者を共に家族、スタッフ、ボランティアで支え、地域の方に支えられ紹介しました。日ごろの趣味活動をスライドで紹介したり、スタッフに支えられて舞台上に立ち踊ったり、思い思いにお話し、演技する場であるファッションショーでは、一番来た衣服を着かみも整えての自分の一番素敵姿を披露する場、輝ける場として参加(80、90歳にしてファッションモデル)となりました。また、それぞれの自分達の日常生活を紹介し、晴れの舞台として生き生きと話されます。

もうひとつの活動は、12月の町田市版画美術館にてのグループホーム入居者の作品展です。日ごろの趣味活動の作品や、写真、手作りのおやつ、野菜、生活の様子分かるようにそれぞれの事業所が工夫して7つの事業所の個性を出し、入居者が案内、受付をします(受付嬢にも変身します)。

グループホームの認知症の方の生活と認知症になってもこんなことができること、やりたい、生き生き生活できることを地域の皆さんに見ていただきます。地域の方々が応援者として一緒に参加できるのはすばらしいことです。

<まとめ>

地域の方々に支えられながら、認知症の方が舞台上に立ち自分を表現することができ、ボランティアとして地域の方々が参加していることが増えている現実があります。また地域のお年寄りとして、役割をもって活動できることは喜びと生きがいにつながります。これからも行政とともに事業所が力を合わせて地域に働きかけ、ともに生き支えあうことができることを願っています。これからも続けていきます。

活動名称	～中庭をつかって～ 地域と共につくる認知症の人の環境づくり
活動要旨	地域の人がグループホーム内の中庭の手入れを通じて入居者との交流を図る
応募者	医療法人社団芙蓉会 ふよう病院 グループホームあおぞら 濱田 秋子
連絡先	〒194-0004 東京都町田市鶴間 544 ふよう病院内

(概要)

地域の方々为主体的に行う毎日の活動の庭の維持管理を通じて、認知症の方々となじみの関係をつくり、認知症を理解し、施設の豊かな住環境づくりに取り組んでいる活動を報告します。

グループホームあおぞらには桜と楓、2つのユニットがあり、その建物を囲むように中庭があり、住居棟の屋上にある花壇、居室の周りにも庭があります。これらの庭は入居者が自由に行き来ができ、植物に触れたり、土に触れたり、季節を感じたり、寛いだり、人との交流ができる大切な場所です。あおぞらの四季折々の花が楽しめるこの庭は中庭コーディネーターと共に地域の方々‘中庭ボランティア隊’がグループホーム開設以来、毎日の日替わり当番によって維持管理を主体的に行っております。

中庭ボランティア隊の活動は月に1回のボランティアミーティングを行い、植物の様子はもちろん、活動中にあった入居者とのエピソードや庭と入居者の様子、その様子に対しての庭づくりのアイデアが話し合われています。

日替わりの当番は植物への水やり、花柄つみ、除草、剪定など様々。これらの作業は中庭ボランティア日誌によって引き継ぎがされ、情報の共有を図っております。花の栽培が得意な方、野菜づくりが得意な方、造園やDIYが得意な方、それぞれがお得意の技術でかかわっております。

この庭での作業の様子は居室のお年寄りからもみることができ、その様子に「いつもご苦労様」「きれいな花が咲いてるね」などと入居者とボランティア隊との会話がうまれ、なじみの関係が築かれています。中庭ボランティア隊の活動はきれいな四季折々の庭を維持管理するだけではありません。庭づくりを通じてグループホームの庭が安心できる和める場であったり、微笑んだり笑ったり、ひとと一緒に過ごす場、輪になる場となることを大切に庭づくりにあたっています。

あおぞらの庭づくりの合言葉は「に和・に笑・に輪・にわづくり」。この活動を継続しつつ、今後はさらに地域やこの庭にかかわっていただける仲間をつくり、さらなる和みや笑い、輪を広げていく庭の環境づくりを進めていきたいと思っております。

<中庭ボランティア隊の主な活動>

- ・毎日の植物管理（水やり、花柄摘み、施肥、除草、株分け、移植など）
- ・植物による日常の話題づくり
- ・中庭ボランティア日誌の記録にて情報の共有
- ・育てているものは草花から果樹、野菜、ハーブなど様々
- ・入居者と共に行う園芸作業
- ・中庭ボランティアミーティング
- ・グループホーム行事参加
- ・グループホーム家族会参加
- ・地域の方々へのオープンガーデンの開催など

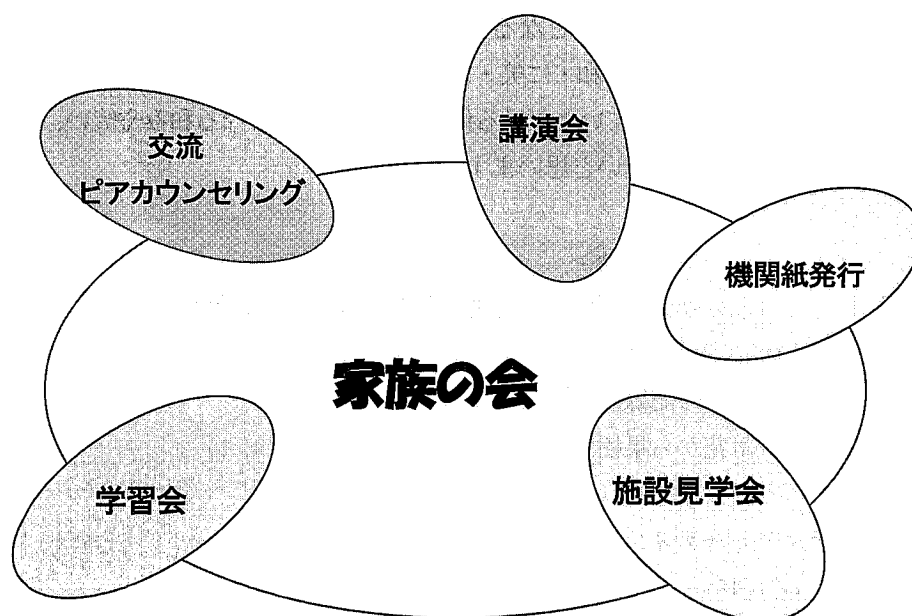
活動名称	「デイホームにんじん・家族の会」～認知症の方と家族の方々の集い～
活動要旨	デイサービス利用者を介護しているの家族が集まり、ひとりの悩みをみんなで分かち合って介護方法を話し合い、その結果利用者本人の精神的安定を図る
応募者	社会福祉法人にんじんの会「家族の会」 担当：南平
連絡先	〒191-0041 東京都日野市南平4-5-3 ドウエル日南1階

(概要)

平成8年4月1日、日野市に認知症の高齢者を対象としたデイサービスを開所しました。当時は措置の時代で公的サービスを受けられない認知症の方が利用できるサービスはありませんでした。また、社会的にも認知症に対する理解も低く、専門医を受診するという意識もない状況でした。

デイサービスを開所してわかったことは、家族が認知症の高齢者を在宅で介護していく上で心身ともに大きな負担になっているということです。相談する場所もない、自分の時間も取れないというなかでデイサービスの必要性を痛感しました。認知症の方を在宅で支援していくには本人の介護は当然ですが、家族のケアも必要で「家族介護者教室」を定期的で開催してきました。毎回プログラムの中に「交流会」の時間を設けて日頃の悩みや、疑問、体験などの意見交換をしてきました。その中から家族が主体となって家族が抱えている共通の悩みを自分一人の問題ではなく皆で共有していくことで、精神的な負担や、将来への不安を軽減することができればとの思いから「家族の会」を強く望まれる声が上がリ、平成12年10月に発足することとなりました。時期的にも平成12年4月より介護保険制度の導入により今後在宅介護をどのように考えていくかという大きなテーマもあり、この時期の発足には意義のあることでした。

名称は「デイホームにんじん・家族の会」となりました。家族の中から世話人代表1名、世話人3名の方が中心に会の運営にあたり、事務局を社会福祉法人にんじんの会で担うこととなりました。家族の要望をとりあげ、年間数回の活動を実施し満7年目を迎えています。



活動名称	認知症になっても、障害をもっても地域でいきいきと暮らせる為に～小さな田舎町（愛南町）での取り組み～
活動要旨	地域の行政、専門職（医療・福祉）その他一般住民らがネットワークをつくり、認知症になっても障害をもっても地域でいきいきと暮らせるような町づくりを行う
応募者	愛南町、なんぐん地域ケア研究会、南宇和郡医師会、認知症の人と家族の会愛媛県支部（南予地区）、認知症キャラバンメイト、愛南町ボランティア連絡会、南宇和心の健康を考える会、南宇和障害者の社会参加を進める会 担当 長野 敏宏
連絡先	〒798-4102 愛媛県南宇和郡愛南町御荘平山 846 財団法人正光会 御荘病院

※報告書発行時点で書類のとりまとめが完成せず、
 応募者の希望により掲載を控えさせていただきます

活動名称	～認知症を囲む新たな地域コミュニティゾーンの構築を目指して～
活動要旨	地元で根差す多種の地域密着型サービスの展開。グループホーム入居者の地域行事への参加、また小規模多機能型居宅事業所の中に地域交流センターを設け、地域の方が利用することで認知症入居者を自然に受け入れる体制づくりを行う
応募者	社会福祉法人ライフ・タイム・福島 グループホームフクチャンち 所長 森 重勝
連絡先	〒960-8154 福島県福島市伏拝字清水内 25

(概要)

<はじめに>

平成18年度から地域密着型サービスが始まりましたが、私たちの法人での「認知症でもだいじょうぶ」な町づくりについてご紹介します。福島市内の3つの地域で事業を展開しています。

- ①松川町ー市中心部からは離れ市最南端に位置し、特別養護老人ホームを中心とし、ショート、デイサービス、ヘルパー、居宅介護支援事業所、地域包括支援センターから構成される、法人が設立された地域です。
- ②伏拝ー市中心部から南に約8kmの位置にあり、徒歩圏内に駅、バス停、スーパーや飲食店がある住宅街に、グループホーム、認知症対応型デイサービス（共用型）があります。グループホーム（フクチャンち）は福島県で第1号の設立です。
- ③吉井田ー市中心部から南西に約3kmに位置し、通り沿いにはオフィス、商店、車販売会社が立ち並び、通りから一歩踏み入ると住宅が密集し大型スーパーもある活気あるところです。そこに、小規模多機能型居宅介護事業所、居宅介護支援事業所があります。

<取り組みの一部の紹介>

①グループホーム フクチャンち（地域密着型サービスとして）

運営推進会議の委員集めは、町内会に自分たちの想いを強く訴え、自発的に引き受けていただき、会議は町内会の行事として開催されています。施設の「はなれ」は老人会の会場にもなっています。

②小規模多機能型居宅介護事業所ライフ吉井田

平成19年8月設立。当施設の中の「サロンおらげ（福島の方言で“自分の家”）」を地元住民へ開放し、子どもからお年寄りまでの憩いの場となっています。また「地域交流センター」も開放し、ここを中心としたネットワークづくりが展開されています。

<私たちの思い>

まず、「地域密着」と言葉で表現し行動を起こそうとしても、事業所側の思いと地域住民の思いには大きな相違があると思います。ライフ吉井田についても、事業所側の抱く将来の青写真とは裏腹に、地域住民からすると「いったい、ここに何ができるのだろうか」「地域住民に不利益や危害を与えないだろうか」と不安、心配を感じていたようです。そのようなスタートから、私たちには、地域住民の信頼と安心を得るための働きかけはないだろうかとの思いが強くなりました。

次に、今後、加速を増す少子高齢社会、その中でも、認知症高齢者は飛躍的に増加していきます。いかに、少なくなる若年層が、増加する認知症の方々を支えていく社会になるかが大きなポイントであると考えました。そのためには、一般的にも言われていますが、地域で支援をしていくという雰囲気は地域全体に浸透していかなければならないと思いました。その浸透をさせる使命が、私たちにはあるとの思いを意識することから始めました。